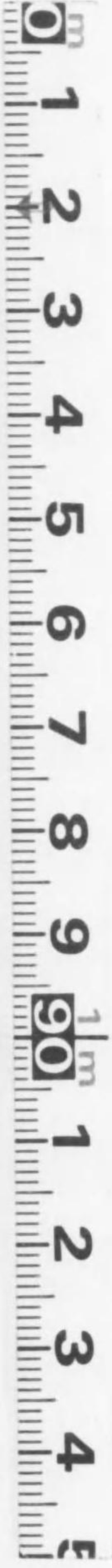


387-272



1200501457599



始





161



大内青巒講述

碧巖集講話

東京鴻盟社發行





凡例

碧嚴集は垂示すいじと本則ほんそくと頌じゆと着語ちやくごと評唱ひやうじやうとの五つを以て組立てられたものであるに、今此の講話は其中の評唱を除いて他の四つだけ講話したのであります、評唱は圓悟禪師が本則と頌との二つを批評的に注釋せられたるもので、頗る肝要なものであるのに何故に其れを除いたかと云へば、何の意味もあるのでは無く、唯其の文が甚だ長くて其れを悉く講話することにすれば此の講話の四五倍も多き非常に浩瀚なる大冊となるので、容易に卒業することが出来ないことと云ふだけのこと、已むを得ず略したのでありますから、尙ほ他日機縁の熟するを待つて更に悉く講話したいと思ふて居るのであります、尤も本則と頌とに對する圓悟禪師の批評は、評唱が無くても着語の上に於て大抵よく領解が出来るのであります。



碧嚴集の主腦とすべき所は、言ふまでも無く本則の公案に在るのであります、後學初機のために禪學の指南とすべき所は却つて垂示に在るのであります、故に先づ第一に能く垂示に心を潜めて之を玩索し、其れから本則の公案に於て、かの垂示に明かされた所の道理を古人は如何やうに實踐



せられてあるかを窺ひ、更に雪竇禪師は其れを如何やうに味はれたかと云ふことを頌の上に於て知るのであります、偕又圓悟禪師は其の本則の公案と雪竇の頌とを如何やうに見られたのであるかと云ふことは、即ち着語に於て之を窺ひ知るのでありますから、別して此の講話の如き評唱を略したものに於ては、尤も彼の着語に注意して圓悟の見識を領得すべきであります。

◇ 然るに其の着語が甚だ多きに過ぎて、中には同じ意味のことを語を換えて重複したのもあり、又は前後其の置き處を錯亂したかと思はれるのもあり、或は圓悟禪師の見識としては斯のやうな着語はなざるまいかと思はれるものもあり、且つ異本に無いのも他の本には載せてあるものもあり、或は評唱の中の語が混入したのもあり、要する所は最初久い間寫本で傳はつたものでありますから、其間に後人が自分の見込みを書き添へたり、又は備忘のために書き入れたりしたものが、いつとなく混じたのも多くあらうかと思はれる、其れ故に師家によりては全く着語を依用しない人もあり、さなくも往々取捨した人が多くあります、拙老も最初のうち少々除き棄て、講話を略したこともありましたけれども、前申す如く今度は全たく評唱を除いたために圓悟の見識を着語で見るとより外に致しかたがありませんから、玉石混淆の嫌ひは有りながらも、なるべく着語を扶けて講話することに致したのであります。

◇ 碧巖集の版本寫本は幾種類もあつて、本文に多少文字の異同もあり、孰れを正確とも定め難い所から、已むを得ず今度の講話は大智和尚の碧巖集種電抄を原本として講話することに致したのであります、さりながら此の講話は大智和尚の説に據て敷演したのではありません、本より今度の講話は通俗を主として、初めて指を碧巖集に染める人にも成るべく解し易いやうにと思ふたのでありますから、禪學専門の衲僧たちに叱られても笑かれても一向に構はない、唯々後學初心の人のために幾分かの指導になりさへすれば其れで本望であると云ふ覺悟で着手したのでありますから、全たく藹々居士一流の通俗談と思ふて下されば其れで好いのであります、けれども此の講話を致すに就て多く参考いたしたのは、風外老人の耳林抄と、作者は誰か分らぬけれども碧巖集抄と題する古版本とであります、他に玄虎藏主の虚空抄だの、本光和尚の黒漆桶だの、天桂老人の舐犢抄だの、華嚴鳳潭師の鐵壁雲片だのと云ふやうな數部の書も見ましたけれども、多くの利益は耳林抄に得たやうに思ひます、但耳林抄には垂示が欠けてあつて、其ればかりは遺憾でありました。

◇ 此の講話は、本より第一垂示、第二本則、第三其着語、第四頌、第五其着語と、一々其文を逐ふて順次に講話したのでありますから、此の講話を読む人は必ず其の本文を離れずに一々其の本文に



當つて此の講話を読むやうにして下さりたい、若し然もなくて本文は読むのが面倒であると云ふやうなことから打ち棄て、置き、假名まじりの通俗談である講話ばかりを読まれたのでは、他はとにかくに着語の如きは何のことも全く分らない所があらうと思ふのであります、畢竟講話は本文の險路をたどる杖であると云ふことを忘れないやうにして、杖ばかり虚空に躍らせぬやう御注意をねがふのであります。

藹々居士しるす

碧巖集講話 目次

目次	
第十則	陸州問僧甚處……………九六
第九則	趙州東西南北……………九二
第八則	翠巖夏末示徒……………八一
第七則	法眼答慧超……………七三
第六則	雲門十五日……………六三
第五則	雪峰盡大地……………五四
第四則	德山挾複子……………四〇
第三則	馬大師不安……………三〇
第二則	趙州至道無難……………二〇
第一則	武帝問達磨……………五
序 辯……………	一



第十一則	黃檗酒糟漢	一〇三
第十二則	洞山麻三斤	一一一
第十三則	巴陵銀碗裏	一一九
第十四則	雲門對一說	一二六
第十五則	雲門倒一說	一三一
第十六則	鏡清艸裏漢	一三六
第十七則	香林西來意	一四五
第十八則	肅宗請塔樣	一五〇
第十九則	俱胝指頭禪	一六〇
第二十則	龍牙西來意	一六五
第二十一則	智門蓮華荷葉	一七五
第二十二則	雪峰鼈鼻蛇	一八〇
第二十三則	保福妙峰頂	一九一

第二十四則	劉鐵磨臺山	一九七
第二十五則	蓮華庵主不住	二〇三
第二十六則	百丈奇特事	二一〇
第二十七則	雲門體露金風	二一五
第二十八則	涅槃和尚諸聖	二二〇
第二十九則	大隋劫火洞然	二二九
第三十則	趙州大蘿蔔	二三七
第三十一則	麻谷振錫遠牀	二四一
第三十二則	臨濟佛法大意	二五一
第三十三則	陳尚書看資福	二五七
第三十四則	仰山問甚處來	二六四
第三十五則	文殊前三三	二七〇
第三十六則	長沙一日遊山	二七七



第三十七則	盤山三界無法	二八三
第三十八則	風穴鐵牛機	二八九
第三十九則	雲門金獅子	三〇〇
第四十則	南泉如夢相似	三〇六
第四十一則	趙州大死底人	三一三
第四十二則	龐居士好雪片片	三一八
第四十三則	洞山寒暑迴避	三二五
第四十四則	禾山解打鼓	三三三
第四十五則	趙州萬法歸一	三四一
第四十六則	鏡清雨滴聲	三四七
第四十七則	雲門六不收	三五五
第四十八則	王太傅前茶	三六一
第四十九則	三聖以何受食	三六九

第五十則	雲門塵塵三昧	三七五
第五十一則	雪峰是甚麼	三八三
第五十二則	趙州石橋略約	三九五
第五十三則	馬大師野鴨子	四〇〇
第五十四則	雲門近離甚處	四〇六
第五十五則	道吾漸源弔孝	四一二
第五十六則	欽山一鏃破三關	四二五
第五十七則	趙州至道無難	四三四
第五十八則	趙州時人窠窟	四四〇
第五十九則	趙州唯嫌揀擇	四四五
第六十則	雲門拄杖子	四五一
第六十一則	風穴若立一塵	四五九
第六十二則	雲門中有一寶	四六七



第六十三則	南泉兩堂爭貓	四七二
第六十四則	南泉問趙州	四七八
第六十五則	外道問佛有無	四八一
第六十六則	巖頭什麼處來	四九二
第六十七則	梁武帝請講經	五〇二
第六十八則	仰山問三聖	五〇八
第六十九則	南泉拜忠國師	五一五
第七十則	鴻山侍立百丈	五二三
第七十一則	百丈併卻咽喉	五三〇
第七十二則	百丈問雲巖	五三三
第七十三則	馬大師四句百非	五三六
第七十四則	金牛和尚呵呵笑	五四六
第七十五則	烏白問法道	五五四

第七十六則	丹霞問甚處來	五六七
第七十七則	雲門答胡餅	五七七
第七十八則	十六開士入浴	五八一
第七十九則	投子一切聲	五八七
第八十則	趙州孩子六識	五九四
第八十一則	藥山射塵中塵	五九九
第八十二則	大龍堅固法身	六〇六
第八十三則	雲門露柱相交	六一二
第八十四則	維摩不二法門	六一八
第八十五則	桐峰庵主大蟲	六三〇
第八十六則	雲門有光明在	六三九
第八十七則	雲門藥病相治	六四四
第八十八則	玄沙接物利生	六五二



目次	雲巖問道吾手眼	六六三
第八十九則	智門般若體	六七三
第九十則	鹽官犀牛扇子	六七九
第九十一則	世尊一日陞座	六九一
第九十二則	大光師作舞	六九七
第九十三則	楞嚴經若見不見	七〇一
第九十四則	長慶有三毒	七〇九
第九十五則	趙州三轉語	七一六
第九十六則	金剛經輕賤	七二四
第九十七則	天平和尙兩錯	七三一
第九十八則	肅宗十身調御	七四一
第九十九則	巴陵吹毛劍	七四八
第一百則		
終		

碧巖集講話

藹々 大内青巒講述

序 辯

禪といふは、宇宙萬象の眞理實相を體達するのである、故に宇宙萬象皆禪ならざるものは無いけれども、其中から或る一つを抜きあげて、此れが禪で御座ると云ふことは出来ぬのであるから、禪は總ての言語や形様を以て顯はし示すことは出来ぬ、謂ゆる言語道斷心行處滅であつて、言語の道が斷えてゐるばかりではなく、心行處も滅してゐる、即ち心の中に彼れの此れのと思考すれば、皆禪の本旨を失ふことになる、然るに今は其の禪宗の宗門第一書と稱せられる「碧巖集」を通俗に講話してくれよとの注文であるが、是れは實に甚だ無理な注文である、昔から此の碧巖集の如き禪録は提唱といふことは有るが、講話といふことは殆んど無い、提唱と云ふのは、其の言句の意味を更に他の言句を以て評したり、又は言句以外に色々な形様、たとへば「拄杖を卓すること一下」とか、「拂子を擲つ」とか、又は咄とか喝とか云ふやうなことで、其の言外の意味を開發させるのである、其れを講話して注入的に禪理を分らせて見たところで、其言句の理路は分るとしても、決して開發的の味ひは得られぬ、古人の語に「老鼠入牛角」といふ句があ



る、年の老いた鼠が牛の角の中へ飛込んだといふのである、之を拙老が注解して、老鼠入牛角といふは、鐵砲玉が空中を飛んで往つたといふことちやと言ふた、然るに此の注解が愈々益々分らないから解釋してくれろと云ふ、已むを得ず講釋して、老鼠は柔かなもの弱いもので牛角は剛いもの堅いもの、其の柔かきで弱いものが剛い堅いものへ入つたといふのは、剛いとか柔いとか云ふ相対的な料簡に支配されて居るうちは分らない、一旦其の相対的な柔いとか剛いとかいふ料簡を超絶して、絶對不二の妙境に到つた上には、老鼠牛角の間に剛柔も入不入も認むべきものは無い、其れだから老鼠入牛角といふのも鐵砲玉が空中を飛ぶといふのも同じことである、鐵砲玉が空中を飛ぶのは易いことで不思議がないが、老鼠が牛角に入るのは難いことで不思議なやうに思ふやうでは禪の話を書く資格が無いといふものぢや、かやうに講釋すれば一通り道理は分つたやうに思ふであらうけれども、其れは理窟が分つたといふまでの事で禪を會したのでも何でもない、さりながら初めから言句も讀めず更に一往の理窟も分らないやうなものが、其れを超絶した所の妙味を合點することの出来べきはづが無い、然るに近頃は「碧巖集」や「無門關」の素讀も満足に出来ないで、一足とびに言句理論を超絶した妙境に到り得たやうなつもりになつて、參禪を傳授物か何かのやうに心得て、やゝもすれば入室とか獨參とかいふことばかり大切に居るものもある様子であるが、實は餘程おぼつかないものであらうと思ふ、其れ等の病人に對しては此の碧巖集などを婆々談義流に講釋するのもマンザラ無益でもあるまいが、元來文字言句の外であるものを已に雪竇禪師や圓悟老人が、かやうに文字を弄したのであるからには、其の講釋をするといふことも不思議は無い、何とかいふ畫家が、

が風の繪をかいてくれろと頼まれて、柳の靡く圖をかいだといふ話もある、なるほど柳の枝の靡くところに風の様子はたしかに見える、しかし間接に風の様子が知れるといふだけのこと、初めから風そのものを全く知らないものには、決して其の繪で風そのものを知ることが出来べきでは無い、今此の碧巖集の講話も、柳の枝の靡く姿だけが能くかければ結構だが、實地の風力は諸君の把握するとも放下するとも御自由にお任せ申すより外に致し方がない。

此の書物は「碧巖錄」とも「碧巖集」とも申しますが、禪宗では宗門第一書などと名けた人も有つて、七八百年來中々盛んに行はれたものである、是より先きに宋の初め頃、今より九百四五十年前に雪竇從顯禪師といふ高僧があつた、此人は同じ禪宗の中で雲門宗といふ一派の人で、青原行思禪師第十世（達磨大師から第十六代に當る）の法孫である、其師匠の智門禪師に提携せられて、宗乘に深く達せられたばかりで無く、餘程文才にも優れた人であつたから、其頃の儒者たちの間にも雪竇に翰林の才ありと言はれて、若し俗士であつたならば、翰林院の大學士となるべき人であると評判されてあつたと云ふことである、其人が禪宗歴代の高僧たちの歴史中から、宗旨の本色をあらはして後人の依標とするに足る問答や説話などを一百則あつめ、一々それを詩に作つて門人に示された、其題に成つた古人の問答や説話のことを公案とも古則とも本則とも申すので、其詩のことは頌と申します、簡様な名目は是れから先きで始終申さなければ成らぬから、どうぞ記憶して置いておもらひ申したい、サテ其本則と頌とを一百則まとめて一冊といたし「雪竇頌古」と名けて久しく世に行はれて居たものと見えるが、其後二百年ばかりを経て、宋の哲宗徽宗ごろに佛



果圓悟禪師といふ人があつた、此人は同じ、禪宗の中でも臨濟宗楊岐派の法流で、南嶽禪師より第十五代（遼磨より二十一世）の法孫である、此人が彼の「雪竇頌古」を殊の外よることで、一則毎に小序を附して其れを垂示と名けられた、是れは圓悟が自家の門人に示したのであるから垂示です、サテ又本則と頌との一句毎に短評を加へて其れを著語と申します、此の著語が餘程面白い、又本則にも頌にも委しい總評を附して其れを評唱とも又は單に評とも申します、以上雪竇の集めた本則と頌と、圓悟の垂示と著語と評唱と都合五つ集まつて一部の碧巖錄と名づけられたのです、碧巖と云ふ二字は、圓悟の居られた澧州夾山の靈泉院の居間の額に碧巖と書いて有つたので、其の碧巖室で選述せられた故に碧巖錄と名けたのだと申すことだ、其れが今より七百四五十年前（圓悟禪師は我が崇徳天皇の保延四年即ち南宋の高宗皇帝紹興八年に遷化せられた）のことである、然るに禪宗と云ふ宗旨は本より教外別傳不立文字直指人心見性成佛と云ふので、手に信ぜ口に任せて活潑自由に自からも參じ他にも參ぜしむべき筈であるから、かやうに一部の書物などを作つて人に示すべきものではない、かやうな書物などが有ると卑劣な學生等が文字の上だけ口さきばかりで、禪宗の悟りを開いたやうな風をしたり、或は理窟の分つたのを悟りを開いたやうに思つたりする者が出来て甚だ宜しくないと云ふので、圓悟の弟子の大慧宗杲禪師と云ふ人が、師匠が切角こしらへた碧巖錄の草稿を火の中へ入れて焼いてしまふたと云ふことだ、此大慧が彼の程子朱子などと同時代で、朱晦庵が佛教の道理を聞きかちつて理學を初めたのは、全く此大慧から聞いたのだと申す評判がある、朱子の語類などに杲老と稱してあるのが即ち此大慧です、然るに其後さらに爐餘の草稿をまとめた者があつて、今日にまで

傳はつたので有りますが、我が日本へ初めて渡つたのは、圓悟禪師遷化の後九十年ほどを経て、日本曹洞宗の高祖永平寺開山承陽大師道元大和尚が宋國に留學せられた時に、一部を寫して我が土御門天皇の安貞年間に歸朝の節、お持ち歸りになつたのが第一最初である、其の寫本は加賀の大乗寺に秘藏してあると申すことだ、又此本の註釋は黃檗宗の人で肥前の大智和尚と云ふのが「種電鈔」と云ふのを十冊あらはして有る、まとまつたものは是れだけで有るが、やはり門外の人には少しも分らぬ、其外には「國字鈔」だの「紙積鈔」だの「耳林鈔」だの云ふ假名交りのものも有るが皆専門家が専門家を相手に提唱されたのであるから、通俗どころか専門家でも他宗の人には少しも分らぬ、其れを今通俗に講釋せよと云ふ注文は、甚だ無理な注文であるけれども、已むを得ず先づ第一則から始めます。

第一則 武帝問達磨

垂示 隔山見烟。早知是火。隔牆見角。便知是牛。舉一明三。目機銖兩。是衲僧家。尋常茶飯。至於截斷衆流。東涌西沒。逆順縱橫。與奪自在。正當恁麼時。且道是什麼人行履處。看取雪竇葛藤。

これは第一則の垂示です、先づ初めに學人平生俊發の作用を擧げて、山を隔て、烟を見る早く是れ火なる



ことを知る、繯を隔て、角を見る便ち是れ牛なることを知ると言はれた、是は涅槃經に釋迦如來が説かれたお譬で、随分俊發の機轉には違ひないけれども、まだ其んな事では許せぬぞ、一を擧ぐれば三を明めると云ふも目機に鉄兩を辨ずると云ふも、皆一寸も抜け目の無い様子で、目機と云ふは俗に云ふ目分量と云ふ事で、チョツと見ると直に一厘一毛までが分ると云ふやうに、宇宙の眞理を手の上で轉がし、社會の現象を鼻の先きで弄らふと云ふのだから、伶俐は伶俐に違ひないけれども、其んなことは衲僧家に於ては尋常の茶飯である、何も珍らしくは無い、衲と云ふは破れ衣のことで袈裟の異名です、ソコで衲僧と云へば總べて僧侶のことでは有るけれども、禪宗の慣習で俊發伶俐な作用のある者を稱することに成つて居る、尋常の茶飯と云ふは朝飯前のお茶の子と云ふやうな言葉ぢや、衆流を截斷するに至りてはとある衆流と云ふのは一源に對した言葉で、一源と云ふは眞如法性靈妙心源などと有難さうな名を付ける所である、其れに對しての衆流であるから世の中に有りとは有らゆる一切の現象みな衆流ぢや、吾々凡夫は生れてから死ぬまで、衆流の間に浮いたり沈んだりしてゐるから自由が得られぬ、然るに今其衆流を截斷とタチキリてしまふ日には、東涌西沒逆順縱橫與奪自在ぢや、正當恁麼の時且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞとある、正當恁麼の時と云ふは斯う成つた時にはと云ふやうな言葉ぢや、恁麼も什麼も皆宋國の俗語で、恁麼は此の如きの意、什麼は何と云ふ意味、行履は行狀履歷と云ふ事で動作のことぢや、サテ其東涌西沒逆順縱橫與奪自在の行履の人は誰で有らうぞ、雪竇の葛藤を看取せよ、昔雪竇老人が書いて置いた葛藤がある、其れを看るが好いぞと云ふ、葛藤と云ふは松の木などに纏ひ附くものぢや、松は千歳の翠を保つと云

ふけれども、葛藤の爲めに枯れることがある、佛法は松の木をやうなもので、元來葛藤のやうな文字言句に用は無、然るに動もすれば、經だの論だの註だの釋だのと色々な葛藤が蔓延して、遂に佛の慧命を枯すことに成る、近頃は哲學だとか論理だとか云ふやうな餘計な葛藤が纏ひ付くから油斷がならぬ、其れはトニカク雪竇にドンな葛藤があるぞ。

**本則** 舉梁武帝問達磨大師。如何是聖諦第一義。是甚

磨云廓然無聖。將謂多少奇特。可煞明白。帝曰。對朕者誰。滿面慚惶。強惺々

磨曰不識。咄。再來不識。帝曰不契。可借許。子。達磨遂渡江至魏。這野狐精

帝後舉問志公。過東。從西。帝曰不識。帝曰不識。志公曰。陛下還識此人。

否。和志公。趕田國始得。好。帝曰不識。得達磨公案。志公曰。此是觀音

大士傳佛心印。胡亂指注。臂。帝悔遂遣使去請。果然把不住。志公

曰。莫道陛下發使去取。東家。人死。西家人助哀。闔國人去。他亦不

回。志公也。好與三十棒。不知脚跟下放。大光明。



これが即ち本則とも公案とも古則とも言ふのです。古則と云ふは古人の公案一則と云ふのを略したのでありませう、公案と云ふは、公府の案牘で今の政府などで云ふ法律案とか議案とか云ふのと同じ意味です、佛祖の一言一行は確乎不拔にして味まし難く背き難きこと、公府の案牘の威嚴なると同様ぢやと云ふ所から、公案公案と言ひ慣はしたのであると申すことです、本則と云ふのは前の垂示や後の頌に對して、是れが全く其本文であるからぢや、擧の字は擧示の義で、雪竇が門下に示した様を記者が識した言葉です、梁の武帝は姓は蕭、名は衍、字は叔達、漢の蕭何二十五世の孫であると云ふことぢや、初め梁公に封ぜられ又梁王となり、遂に帝位に即いて高祖武帝と稱せられた、殊の外篤く佛法に歸依して、其頃佛教の學問にも德行にも秀でた寶志和尚だの善慧居士だのと深く交はり、又武帝の子の昭明太子と云ふのも中々の學者で、且つ信者で、餘程佛教の道理を研究し、殊に寺を建てたり僧侶を供養したりするやうな事業は、中々多く有つた様子であるけれども、謂ゆる衆流を截斷して逆順縱橫與奪自在と云ふ場合には夢にも到つたことが無かつたから、初めて達磨大師に逢ふた時に武帝が問ふたのが可笑い、朕は寺を建てたり僧を度したり佛を供養したり經を讀んだりしたことは幾らと云ふ限りもない程であるが、ドンな功德が有らうぞと問ふた、達磨が之に答へて無功德と罵しり付けるやうに言はれた、が武帝は其意が解せぬので今度は此本則の問答に成つて如何なるか是れ聖諦第一義と問ふた、聖諦と云ふは眞諦と云ふも同じことで、第一義は讀んで字の如くであるから、聖諦第一義と云ふ五字を通俗に義譯して見れば、佛法の道理の此上も無く大切な有難い所と云ふ意味になる、武帝は餘程の功德があると思ふて居た大事業を達磨に無功德と蹴くり返されたの

であるから ヤツキと成つて然らば佛法の道理の此上も無いと云ふ所は如何で御座ると問ひ掛けたのぢや、すると達磨は相變らず叱り付けるやうな聲をして、廓然無聖と答へた、廓然はカラリとして何も無い有様ぢや、無聖と云ふは武帝が聖諦と問ふたから、ソんな聖などと云ふものは無い、お前は佛法の道理の此上の無い所と問ふけれども、一體に佛などと云ふものは絶えて無いぞと云ふたのです、ドウです諸君、諸君は佛とか凡夫とか云ふものが有ると思ひますか、武帝にばかり心配させて置くわけには往かんぢや無いか、有ると言へば常見ぢや、無いと言ふなら斷見ぢや、武帝の眼中には佛も有れば凡夫も有る、ソコで更に進んで朕に對する者は誰ぞと詰めかけた、いま現在我れと向ひ合ふて居るのは何ぢやと云ふのです、達磨は平氣で不識と答へた誰やら一向知らぬぞと云ふのぢや、武帝到頭何のことゝも少しも分らぬ其様子を記者の詞で帝契はすと書いてある、契と云ふは符節を合せるやうにスカリと禪機を投合することぢや、然るに今武帝はソウ往かなんだ、達磨は武帝に眞實の佛法を參究する力のないのを見限つて楊子江を渡つて魏の國へ行き嵩山の麓の少林寺と云ふ寺へ引込んでしまふた、ソコの様子を達磨遂に江を渡りて魏に至ると書いてある、然るに武帝は其後平常歸依する寶志和尚が來た時に其事を話したと見える、帝後に擧して志公に問ふとある、志公は即ち寶志です、ソコで志公の反問が面白い、陛下還て此人を知るや否や、あなたは其達磨と云ふ者が如何なる人であるやら御存知でありますか、武帝が何で其れを知つてゐるものか、帝曰く不識、一向存知ないと言ふたのだが、前に達磨が武帝に答へて不識といふたのは實に萬斤の力のある不識であつたが、同じ不識でも武帝が志公に答へた不識は頓と力が無い、ソコで志公が言ふには



此れは是れ觀音大士佛心印を傳ふと有難さうな一言を聞いた時の武帝の顔つきがドンなで有つたやら。サテこゝで簡単に達磨大師の履歴を申して置きましたやう、初め釋迦如來が靈鷲山に於て八萬の大衆と稱する弟子たちに對し、金波羅華と云ふ花を拈つて見せられたと云ふことだ、いつもで有れば必らず四辯八音のお説法があるのであるに、其日に限りてお説法はなされず、たゞ華を一枝チラリと拈弄せられただけで有るから、多くの弟子たち誰ありて其意を解する者が無い、唯一人摩訶迦葉と云ふ老僧だけが莞爾と微笑したと云ふことだ、釋迦如來が之を御覽せられて、我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙の法門あり摩訶迦葉に附屬すと言はれたとある、是れが佛心印傳授の濫觴です、印の字は印可だの印證だのと續く字で、タシカに證據立てることぢや、釋迦の心と迦葉の心とピッタリ相印證して不二ぢや、其の證據が拈華と微笑との啐呀の間にあらはれたものと見える、さて又迦葉は之を阿難に附し、阿難は之を商那和修に授け、嫡々相承二十八傳して達磨に至つたのです、其名を具さに申せば菩提達磨と云ふので、俗姓は南印度の國王で香至王と云ふ人の第三子であると申すことぢや、二十七祖般若多羅の弟子に成つて遂に佛心印を相承した後、師匠の遺言に依て支那傳道の途に上り、梁の普通年間に支那に渡り、其れから前に申したやうなわけで少林寺へ引込んで、九年が間時機を見合せて居られたが、九年目に神光慧可と云ふ弟子に佛祖相承の衣鉢を附屬し、即ち支那禪宗の初祖と仰がるゝことに成つたのです、觀音大士と云ふは、委しく申せば觀世音菩薩とも觀自在菩薩とも云ふので、此娑婆の人では無い、極樂世界の教主阿彌陀如來の高足の弟子であるが、大慈悲心の爲めに種々の身を現して十方世界に傳道布教せらるゝといふことぢや、ソコで此娑婆世界へも種

種な姿を現して來化せらるゝものと見える、達磨となつて佛心印を傳ふるのみでは有るまい、基督となつて十字架にも上れば、加藤清正となつて猛虎と組打もするであらう、花となつて春の庭に開き、月となつて秋の空にも照る様子ぢや、吾々お互ひ人々各自に觀音大士となつて佛心印を傳ふる時節も無ければならぬ、大士と云ふは摩訶薩を翻譯したので、大人と云ふも同じ意味です、さて梁の武帝は元來觀音大士を信仰すること尤も篤く、請觀音經の説に依て「圓通懺摩法」と云ふものを選述し、頻りに禮拜懺悔などを勤めて居る人であるから、其の觀音大士が釋迦佛附屬の佛心印を支那國にお傳へなされるため遙々と東渡せられたのであると志公から聞いたから、驚いたの驚かないのと云ふ沙汰ではない、ソレは一向に知らなんだ其れと知つたら禮拜供養して御利益にあづかるべきであつたにと云ふわけで、帝悔ひて遂に使を遣はし去て請せしめんとす、早速勅使を魏の國の少林寺へ遣はして招請したいものであると云ふのを、志公が打消して道ふこと莫れ陛下使を發し去て取らんと闔國人去るも他は亦た回らずと言はれた、たとへ梁の君臣士庶人までが皆一同にお迎ひに往つたからとて、アノ達磨が何で歸つて來まじやうぞ、其んなことはお止めなさるが好いと云ふのぢや、サスガに寶志老僧は達磨の知音ぢや、武帝は達磨と云へば揚子江を渡つて魏の國へ往つてしまふた碧眼の胡僧のこととばかりと思ふて居るから使を遣はして請じたいなど、云ふけれども、其んな考では眞の達磨に相見することは出來ぬ、武帝ばかりでは有るまい、人々各自に脚下に氣を附けぬと、達磨に蹴つまづいて地獄の釜の底へコロガリ落ちるぞ。本則は先づ此位にして置き是れから着語を辯じまじやう、着語と云ふのは前に申して置いた通り、圓悟禪



師が本則と頌との一句毎に短評を加へたものぢや、禪宗には妙な辯が有つて裏の方から譽めたり謗つたりする風がある、是れは世間にも往々ある事で、理盡き辭窮まる所へ往つては何とも言ひやうが無いから、悪口を言つて褒詞に代へることがある、其味が呑込めないと着語の中には随分驚き入つた悪口があるから其れを文字の表面からばかり見て通ると何の事とも分らないのが多い、先づ第一に梁武帝問達磨大師と云ふ下に這の不啣喙を説く漢とある這の字は此の字と同じ意味、不啣喙は宋國の俗語で不恰惻と云ふほどこの漢の字は我國の俗語にコノ男とかアノ男とか云ふ時の男と云ふのと同じほどの意味であるから、此着語を俗譯して見れば「馬鹿なことを言ふ男だ」と云ふのです、宇宙の眞理は他人に問ふに及ぶべきでは無い、人々各自に反省して見るが好い、其れを達磨大師に問ふとは何事ぢや、如何是聖諦第一義の下に是れ甚の繫驢概ぞとある、甚の守は何の字に同じ、繫驢概は驢馬を繋ぐ木概と云ふことで甚だ賤しいツマラヌ物のことぢや、武帝が有難さうに聖諦第一義などと問ひ掛けたが、それは一體何の繫驢概ぢやい、穢らはしいものを持出しては困るぞと云ふアンパイ、廓然無聖の下に將に謂へり多少の奇特と、達磨老僧はハルバル天竺から御座つたと云ふから何ぞ多少の奇特なお答でもあるかと思ふたに廓然無聖と言ふだけのことか、それは當り前のことでは無いか、然し其んなことを武帝に言つて聞かせてドウするつもりか知らんが、箭新羅を過ぐ箭は矢であります、支那から東の方のはてが新羅、すなはち今の朝鮮であるが、射た所の箭が新羅を通り過ぎてしまふたとしてはドコへ往つて落ちることやら目的が分らぬと云ふので、俗語に落着の分らんことを箭新羅を過ぐと云ふのださうです、廓然無聖と答へた落着がドウなることやらと云ふの

ぢや、可煞明白とある可煞は甚の字の意味でハナハダと訓むのです、此着語は達磨の答の脱體現成、毫も隱藏する所なきを稱したのぢや、對朕者誰の下に滿面の慚惶強て惶々とある、武帝は達磨の答を解し得ず實に滿面の慚惶、身の置き所が無い筈であるに強て惶々とシラ／＼しく慚をかくし惶をこらえて朕に對するものは誰ぞなどと第二の問を起した氣の毒さよと言ふ評ぢや、果然として摸索不着ソレ見たことか武帝の小刀細工で幾ら摸索したからとて、決して達磨の痒いところへ手の届くものには無い、磨曰不識の下に咄とある、咄と云ふのは叱と云ふのと大同小異で物事を叱り付ける言葉ぢや、達磨が不識と答へたのを圓悟が何で咄却したのであるか、ほめたのか謗つたのか吾々お互ひも咄却されないやうに用心せねば成るまい、再來半文錢に直らずと第二の着語を下した、前に廓然無聖を賣り附けやうとしたけれども武帝は一錢にも買はなんだ、然るに又々不識などと觸れ込んでも半文錢の價値もあるまいと云ふのです、帝不契の下に可借許とある、ア、惜しいことをした何を惜しいと云ふのか、武帝が悟れなんだのが惜しいか元來迷悟は無い筈ぢや、達磨が武帝を度しそくなつたのが惜しいか元來濟度などを受くべき衆生は無いぞ、然し武帝が達磨の機に契はぬと云ふ所が却て些子に較れりでがなあらうと是れは全く武帝を愚弄した着語らしい、渡江至魏の下に這の野狐精と達磨を罵つた、この一罵これ實に祖師西來の洪恩に報謝して感涙潸然たる所であらう、種電鈔に三世諸佛も是れ野狐精、歷代祖師も是れ野狐精と言つてある、其れに違ひない、しかし諸君この野狐精の足跡を追ひあるくと未來永劫魔魅されて浮ぶ瀬はありませんぞ、免れず一場の懺懺これは達磨を抑へた着語ぢや、懺懺と云ふは耻辱と云ふも同じことで、達磨が空しく梁を去て魏に



赴いた様子を批評的に言ふたまでの事であらう、其次の西より東に過ぎ東より西に過ぐとあるのも同様で、達磨が衆生濟度のために東奔西走する有様の評ちや、然し此中に元來迷悟も無く凡聖もなく盡く方法界一枚の大光明であることを顯はして居る、帝後舉問志公の下に貧兒舊債を思ふとある、サスガ武帝も無功德だの廓然無聖だのと云ふ聞き慣れない説法を聞いて、何となく氣に掛つたと見えて志公に問ふた様子が、貧乏人が古い借金を思ひ出した様であるかと評したのちや、傍人に眼ありと云ふは志公を褒めたのです、達磨に和して國を起出して始て得てんと云ふのは、志公が武帝に反問して還て此人を知るや否やと云ふ様子が達磨と同じ穴の野狐精らしいに依つて、達磨を逐ひ出して魏の國へ遣つたやうに志公をも逐ひ出してしまふが好いと云ふので、志公を褒め且つ武帝を愚弄したのです、更に好し三十棒を與ふるに國を逐ひ出すばかりでなく三十棒を與へて打擲つてやるが好いと云ふのちや、是れでも未だ志公を褒め足らぬと見えて達磨來也と云ふた、達磨が復た出て來たやうであるぞと云ふのです、帝曰不識の下に却て是れ武帝達磨の公案を承當すとある、さきに達磨が武帝に答へて不識と云ふた時には、武帝一向に合點し得ぬ様子であつたが、今武帝が其れと同じ言葉で志公に向ひ不識と云ふのが是れが却て達磨不識の公案に承當し得たのであるかも知れぬと飽くまで武帝を嘲弄した着語です、佛心印の下に胡亂に指註すとある、志公は觀音だの佛心印だのと妙な註釋を下したが、觀音が達磨に限つたわけもあるまいし、又佛心印と云ふものは、他に傳へ得べきもので有るやら無いやら、何れにしても受取りにくい胡亂な指示註釋であるぞと云ふて、吾々に問題授けられたのちや、臂膊は外に向つて曲らずとある、膊は俗に謂ふムカウズネちや、ヒヂヤムカウズ

ネは内の方へこそ曲れ、外へ曲るものではない、どの様に方便して言ふて聞せたからとて武帝に悟りが開けるものではないと云ふのです、遺使去請の下に果然把不住とある、ソレ見たことか武帝は決して觀音も佛心印も分るもので無い、把不住はトリトメ得ぬと云ふ詞ちや向に道ふ不啣と其れだから最初から武帝は不啣を説くの漢であると云ふて置いたのちや、莫道云々の下に東家の死人にお悔みを言ふやうなアンパイである、志公が斯んなことを言ふて武帝を論す様子が丁度隣家の死人にお悔みを言ふやうなアンパイである、と冷かした、也好し一時に國を起ひ出すに、トカク志公は色々なことを言ふて武帝を趕らかす様子が達磨と同罪に相違ないに依つて、梁の國を逐ひ出すが好いと云ふ、亦不回の下に志公也好し三十棒を與ふるに、是れも前と同じ筆法ちや、知らず脚跟下に大光明を放つことを、人々各自の脚跟下に達磨大師が大光明を放つて居るぞと吾々に注意して呉れられた、お互ひに脚下を照顧せねばなるまい、先づ着語も斯んなこととして、次に頌ちや。

頌 聖諦廓然 何當辨的 對朕者誰 豈免生  
還云不識 因茲暗渡江 清風匝地有何極 千古萬  
荆棘 闔國人追不再來 休相憶 古空相憶



寶向三章 裏二觀 師顧視左右云這裏還有祖師也備特番款那 〇 自云有阿勞

喚來與老僧洗脚外二〇作三這去就猶較些子

これが雪竇禪師の作で達磨の公案をした頌です、頌と云ふことは、詩の六體に比賦興風雅頌と云ふた時の頌の意であります、吳音で讀むからジュと云ひ慣はしてある、一體に僧の詩を偈と申しますが、偈は梵語に伽陀または偈陀とも云ふのを漢語に譯すれば頌の意味であると申すことで、即ち譯語を以つて申せば頌、原語では偈陀の陀の字を略して偈と申すのです、此第一則の頌は長短句十二句ある、初めの四句は四言で、次の二句は五言で、あとが七言五句の間に三言の一句が挟まつて居る、先づ第一句は武帝の問の聖諦第一義と達磨の答の廓然無聖とを一句にまとめて、其儘に拈じ來つた間に髪を入れぬ機合が見える、序に着語も申して往きませう、圓悟が節新羅を過ぐと着語した、謂ゆる落處が知れぬぞと云ふたのぢや、又嘖と云ふてある嘖と云ふは笑ふ貌で、フ、ンと云つたやうな工合であるが、圓悟が何を笑ふたのであらうぞ、第二句に何ぞ的を辨すべきとある、的は端的ぢや、端的と云ふは正直と云ふも同じことで其物そのまゝに露堂々明歴々くります所が無い有様を云ふ、今武帝が聖諦と問ひ達磨が廓然と答へた、此の聖諦廓然の端的がドウして辨せられやうぞと云ふたのぢや、圓悟は過也と着語したイヤ違ふた何も辨じ難いことは無い舉足下足皆是れ廓然の端的ぢや、第三句に朕に對する者は誰ぞ、武帝の詞をソツクリ其儘持つて來た、ソコで圓悟が再來半文錢に直らすと着語した、此語は前に武帝が達磨に買つて貰ふつもりで遂に資本

まで失したのであつたに、雪竇も亦た之を賣りに來たかと云ふので、更に又恁麼にし去るやと叱る、お前も武帝と同じやうなことを成さるかと云ふのです、第四句に還た云ふ不識と、前に廓然無聖と云ふて置いたに更に亦た不識と云ふたから還云と頌した、着語に三人四人中れり、是は前に達磨が不識と武帝に答へ、次に武帝が志公に答へて不識と云ひ、今また雪竇が不識と云ふたから、三人も四人も同じ矢を放つがドウちや中るかなと云ふやうなアンバイ、咄、他人の事はイザ知らず雪竇老人にして斯んなことを云ふは甚だ其意を得ぬと云ふので更に咄破した、第五句に茲に因て遂に江を渡る着語に人の鼻孔を穿ち得ず卻て別人に穿たるとある、コレは圓悟が達磨を捕へて達磨が武帝を濟度し得ず卻て後に志公に濟度されたやうな有様に見えるのを評したものと見える、蒼天々々あゝ悲しい事であるぞ、好不大丈夫は俗に謂ふヨイベラボウだなどと云ふやうな言葉、第六句に豈荆棘を生ずることを免がれんや、一體に釋迦が天竺に於て說法を初めたのからして、風なきに波を起したのであるから、一休和尚は「釋迦と云ふいたづらものが世に出でて多くの人を迷はする哉」と云ひ、昔し雲門大師は四月八日に釋迦がオギアーと生れた時に打殺して狗にて食はせてさへ仕舞へば、コンな厄介な佛法だの禪學だのと云ふ世話もやけなんだにと云ふたと申すことであるが、カテ、加へて今また達磨が渡つて來て、無功德だの無聖だのとトテツも無いことを言ひ散らして、其上に江を渡りて少林山へ引込むなど、云ふやうな餘計なことをするものだから、種々さまさまの荆棘を生じて千七百の公案などと云ふ厄介な事も起つたのであると云ふのであらう、ソコで圓悟が脚脚下已に深さ數丈と評した、コレは圓悟が雪竇の發言に同意を表して、實に其通りぢやドコもかも荆棘



だらけちやと云ふ、ソレ諸君の脚下にも様々な荆棘が澤山あるぞ、御油断あつて蹴つまづきなさるな、第七句に閻國人追へども再來せずコレも本則そのまゝちや、ソコで圓悟が兩重の公案と着語した、また追ふことを用ひて作麼すると云ふた、人の跡を追ふなど云ふことは男らしい者のすることでは無い大丈夫の志氣何くにか在る、第八句に千古萬古空相憶、着語に手を換えて胸を植つと云ひ空を望んで啓告すと云ふ皆男らしく無い有様を評し得て面白い、空を望んで啓告すと云ふは、彼の朝顔と云ふ盲婦が男の跡を慕ふて大井川に川留にあふた時、天道さま聞えませぬと言つて泣いたと云ふやうな有様、十字架の上で神を恨んだり歴史を書きかけて天道は是非かと口説たりするのも大抵似たやうなものであらう、相憶ふことを休めよコレは三言ちや、此句で此頃の舞臺がクルリと廻つたぞ、圓悟が怪しんで什麼と道ふぞと着語した、しかし矢張鬼窟裏に向つて活計を作すのであらうと奪つた、鬼窟裏の活計と云ふは餓鬼の飲食相談ちや、何程工夫しても到底満腹することは出来ぬ、第十句に清風匝地何の極まりか有らん、いつまでも人の跡を追ふには及ばぬ、何處に清風明月の無いところが有るぞ、夜着持たぬ貧乏人の窓からも明月はさす、正月の餅は食へんでも鶯の初音は確に聞える、人々各自光明の在る有り、釋迦の足を借りて歩くには及ばぬ、達磨のお世話にあづかつて臥起すべきでは無い、ソコで圓悟も果然と云ふた、テツキリ其れに違ひないと云ふのちや、しかし清風だの明月だのと云ふまでに説明せんでも好からうに餘りに深切すぎるぞと云ふので、大小の雪竇草裡に輾すと評した、大小の二字には別段の意味は無い、人を指斥する時に大小の和尚だの大小の先生だのと云ふのが此頃の俗習と見える、草裡に輾すと云ふは大道を歩まずに路傍の草

の中にコロガリ落ると云ふことで、兒を懲んで醜態を忘れる形容を落草と云ふのが禪家の套語です、私などが斯んなやうに碧巖の講話などをするのは、落草どころか溝泥の中へコロガリ落ちたやうなもので、醜とも陋とも申しやうの無い有様であるから、禪宗の専門家にはドンなに叱られるか知らぬけれども、諸君のために浮身をやつすのちや諸君も少しは懲れむが好い、師左右を顧視して云はくと云ふ六字は記者の言葉です、這裏還て祖師ありや、之は雪竇が此頌を作つた時に門下の大衆を集めて提唱して聞かせた、其時に第十句を唱へると直に左右を見廻して這の裡に達磨大師が居るかなと言ふた様ちや、ドウです諸君ソコに達磨が居りますか居りませんか、よく脚下に氣を付けて搜がして御覽なさい、魏の少林山へ住つてしまふたなど云てはイケませんが、しかし雪竇は前に相憶ふとを休めよと云ふて置きながら何ゆゑに達磨を搜がすのちや汝番欸を待つや、番欸と云ふは翻欸の普通で、欸と云ふは罪人が裁判官の前で白状した文書のことださうです、已に前に相憶ふことを休めよとタシカに白状して置きながら、また祖師ありやなどと達磨の跡を追ふと云ふものは前の欸を翻覆すると云ふものちや、汝雪竇、果して翻欸するかと評したのちや、猶ほ這の去就を作すかと云ふは矢張そのやうに達磨の跡を追ふかと云ふのです、自ら云ふ有りである三字は記者の詞で（有の字を一字句と見る説もある）雪竇みづから答へて達磨はコ、に居ると云ふのちや、着語の榻薩阿勞は我國の俗語に御苦勞千萬な事ちやなどと云ふて人の仕事を愚弄するところがあるアレと同じ意味と見える、結局に喚び來れ老僧がために洗脚せしめんとある、老僧と云ふは雪竇自分のことです、祖師が居るかと思ねたのは禮拜でもするつもりかと思つたら、喚び來れ私の脚を洗はせるからと云ふの



ぢや、何の御用かと思つたら飛んでも無い御用ぢや、其上に圓悟は更に三十棒を興へ逐ひ出すも也た未だ分外と爲さずと助言した、一體祖師に何の怨讎があつて箇様なことを申すのでありまじやうぞ、諸君よくお考へを願ひたい、上すべりをして面白いとか愉快だとか云ふだけの事では何の所詮もない、ソレでは私は丸んで落語家か軍談師のやうなものに成つてしまふ、アマリに情ないでは無いか、圓悟が更に着語して這の去就を作す猶ほ些子に較れりと云ふた、雪竇が祖師に脚を洗はせると云ふたのが餘程賛成と見える、しかし自分の脚を洗ふに達磨を頼まんでも洗はれさうなものであるに。

第二則 趙州至道無難

〔垂示〕乾坤窄。日月星辰一時黑。直饒棒如雨。點喝似雷奔。也未當得向上宗乘中事。設使三世諸佛只可自知。歷代祖師全提不起。一大藏教詮注不及。明眼衲僧自救不了。到這裏作麼生請益。道箇佛字。拖泥帶水道箇禪字。滿面慚惶。久參上士不待言之。後學初機直須究取。

この垂示は向上宗乘中の事と云ふ六字が眼目で、向上宗乘中の事の廣大無邊なるに比ぶれば、乾坤の廣大

も尙ほ窄く、向上宗乘中の事に比ぶれば日月星辰の光明なるも尙暗黒であるぞ、直饒禪宗の高僧が其廣大光明を言語文章に顯はすことが出来ぬからと云ふて、理盡き言窮まれば拄杖を振り上げて人を打ち或は聲を勵まして大喝一聲カアツと怒鳴る、其喝が喝々連喝して雷の奔るに似たりとも、又その棒を下だすと雨の點々飛下するが如くであつても決して也た未だ向下宗乘中の事に當得せしむることは出来ぬぞ、同じ佛教の中でも天台華嚴眞言淨土などの諸宗は教家と申して、釋尊一代の説教を書き記したる經文を尊び、三世諸佛のお説教と言へば此上も無いことのやうに思ひ、又禪宗の方では教外別傳と唱へて歴代の祖師の以心傳心を此上の無いことのやうに思ふて居ることであるが、其教家で尊ぶ三世諸佛でも此向上宗乘中の事に至つては只自知す可しで決して之を他人に説き示すことは出来ぬぞ、其禪宗で尊ぶ歴代の祖師でも此の向上宗乘中の事に至つては全提不起ぢや、全提と云ふは其儘ソツクリ引さげると云ふことであるに、其下に不起すなはちタテヌと有るから、向上宗乘中の事を其儘ソツクリ引提げて起つと云ふことは出来ぬと云ふのぢや、三世諸佛も歴代の祖師も其通りであるのだから其諸佛の説かれた一大藏經すなはち一切經五千四百八十八卷にも決して此向上宗乘の事を詮註することは出来ぬ、又彼の歴代の祖師の兒孫と稱する禪宗の者などは、設ひ明眼の衲僧と自から誇つて居て見たところで、他人の濟度は云ふに及ばず自救不了で自ら己れを救ふことだけでも出来おふせるものではない、衲僧と云ふ衲の字は襤褸を綴り合せた衣服のことであるが、袈裟と云ふものは全く襤褸を綴り合せたのを本式とするのであるから、袈裟のことを衲衣といふのです、それが一轉して袈裟を掛ける僧徒の事を衲子だの衲僧だのと云ふことになつたのぢや、這裏



に。到。て。作。麼。生。が。請。益。せん、サア斯う成つた處に到つてドウ相談したものであらうと云ふのです、請益と云ふのは論語やらに益を請ふと云ふ詞が有つて、有る上にモツと増してもらふと云ふ意味で有るが、それが一轉して師友に物を聞いた上に更に質問對論することを請益と云ふのです、サア何と相談したものであらうぞ、箇の佛の字を道ふも拖泥帶水ぢや、教家の人は直に佛とか菩薩とか有り難さうに言ひ出すけれど、其れは誠に見苦しいぞ、拖泥は泥をヒク、帶水は水をカブルと云ふので有るから、俗に謂ふ泥溝鼠が猫に逐はれたやうな様ぞ、又禪宗の方の人は輒もすれば禪の字を道ひたがるけれども、其れも滿面の慚惶いかにも外聞の悪い限りぢや、久參の上士久しく向上宗乗中の事に參得し來つた上根の士は之を言ふを待たぬことであるが、後學のもの又は初めて其事に參する機根のものは直に須からく究取すべし、直の字は餘處目を振らず、理窟に滯ふらず、方便に泥まず、言句に着せず、伎倆に執せず、サア一體何としたものぢや。

**本則** 舉。趙州示衆云。至道無難。唯嫌揀擇。不在明白裏。護惜箇什麼。是汝還護惜也無。時有僧問。既不在明白裏。我亦不知。爲什麼卻道不在明白裏。

僧云。和尚既不知。爲什麼卻道不在明白裏。云。問事即得禮拜了退。

趙州と云ふは漢土の地名ぢや、其趙州の趙州城と云ふ處に觀音院と云ふ寺があつて其寺の佳持に従諡禪師と云ふ名僧が有つた、此人は六十歳の時に初めて發心修行の途に上り、八十まで行脚して餘程有なものであつたから、時の人が皆其名を言はずに趙州和尚とばかり呼んだと申すことぢや、サテ止趙州和尚が或時門下の衆に示して云はるゝには、至道無難唯嫌揀擇、これは達磨大師から三代目の祖師すなはち三祖鑑智僧瓌大師と云ふ人が「信心銘」と申して四言長篇の韻文の法語を書いて置かれた、其冒頭に至道無難唯嫌揀擇但無憎愛、洞然明白と書き出してゐる、其前の二句だけを擧げてアトの二句は自分の詞の中へ含めて纔に語言あれば是れ揀擇是れ明白と言はれたのぢや、至道と云ふは至極の大道即ち向上宗乗中の事ぢや、無難と云ふは困難なるものでは無いと云ふ意味、俗にムツカシクナイと云ふほどの事ぢや、實に向上宗乗中の事すなはち至道、さらに詞を換えて申せば宇宙の眞理は何もムツカシイ事は無い、春になれば花が咲き秋になれば紅葉が散る、眉毛は眼上に横たはり、呼吸は鼻の孔から通ふ、何も世話のやけたことでは無い、此眞理が森羅萬象の往來する至極の大道であるから至道と云ふ、君父も此道を通れば臣子も此道を通る、商人も此道さへ通れば安全ぢや、百姓も此道さへ通れば間違ない、清風も通れば明月も通るぞ、此道が直に佛祖の大道ぢや、ソコで向上宗乗中の事とも名けられるのです、唯嫌揀擇、揀擇は二字ともにニ



ラブと云ふ字ぢや、目に色を見る赤いと知り黒いと知る誠に無難ぢや、赤いは赤いに任せて置け、黒いは黒いに任せて置け、餘計な世話を焼くには及ばぬ、然るに直に揀擇とエリキラヒをする、赤いのが美しく黒いのが醜い<sup>イカ</sup>と見るもムツカシイことは無い、美しいからは非欲しい醜いから見るも厭ぢやと食ほつたり嘔つたりする、サア斯う成て来ると修羅の警察署も地獄の裁判所も事務御多端と相成る、然らばドウすれば好いのかと云ふに、三祖は此語に續いて但憎愛なければ洞然として明白なりと言はれてある、明白と云ふは山は山で水は水である、花は紅<sup>ベニ</sup>で柳は緑であると云ふことぢや、詞をかえて教家のやうに云へば揀擇は迷で明白は悟りぢや、サテお話が復た後へ戻つて至道は無難であるから不可思議不可商量ぢや、四の五の餘計なことを言ふには及ばぬ、然るに若し纒に語言あれば是れ揀擇是れ明白、佛だの衆生だの迷だの悟だのと苟くも口端に掛ければ、早や揀擇の明白が迷か悟かのドチラへか墮落する、迷に沈むのがツマランばかりでは無い、悟に沈んでもツマラぬぞ、譬へば病に苦しむのは病人に違ひないが、薬に取りついて居るうちは矢張病人に違ひないやうなものぢや、ソコで老僧は明白裡に在らず、老僧とは趙州自分のことぢや、此趙州などは揀擇の迷路に流浪して居らぬばかりでは無く、明白の一味平等なる悟道にも躊躇しては居らぬぞ、是れ汝還た護惜すや也た無や、お前だちも能く自ら保護し珍惜する所が有るやら無いやらドウぢやなと問ひかけた、時に門下の一人進み出で、趙州へ逆縁に問ひかけた、既に明白裡に在らずと言はるゝでは無いか、外に何も護惜すべきものの有らうはずが無いでは御座らぬか、箇の什麼をか護惜せん<sup>コトナニ</sup>と一本やりこめた、趙州は平氣で之を外づし我も亦た知らず、ソコは我も一向に知らぬのぢやと云ふて済ま

しこんで居る、此我も亦た知らずと云ふた一言に斬釘截鐵の力量あることを知らねば成らぬ、然るに此問ひ掛けた僧も中々承知せぬ、和尚既に知らずんば什麼としてか却て明白裡に在らずと道ふや、和尚と云ふは趙州を指して謂ふので、先生とかアナタとか云ふも同じことぢや、アナタは知らぬと仰せらるゝが御自分で知らぬなら何故に老僧は明白裡に在らずと仰せられたぞ尻口で物を言ふものでは御座らぬ、此僧の言ふところが實は本統なのぢや、趙州が明白裡に在らずと云ふたのは初から方便で明白裡に在らずと言ふただけ既に明白の臭氣がある、知らぬと云ふも其實は早や第二第三ぢや、纒に語言あれば是れ揀擇是れ明白と言ふたでは無いか、しかし趙州はサスガに先生ぢや尊大に構へて嚴格に言はれた、事を問ふこは即ち得たり禮拜し了りて退ぞけ、其方は中々理窟を言ふて人に物を問ふことが上手ぢや、しかしモウ其れで宜しい、禮拜して退ぞかしやれ、すべて佛敎者の問答は問ふ者が先づ禮拜して問を起し、それ〴〵答を受けて別に問ふことが無くなれば又禮拜して自分の席へ退ぞくの普通の禮儀です、今は恰かも禮拜して退ぞくべき時であるから、禮拜し了りて退ぞけと號令しただけのことよ、コレが若し茶を呑むべき時であつたら喫茶去と云ふかも知れぬ、若し又飯を食ふべき時であつたら喫飯し去れと云ふであらう、寢に就き去れば云ふも、洗面し来れと云ふも皆同じことで、別に何の不思議も無い平常普通の事ぢや、揀擇でも無ければ明白でも無いぞ、臣と爲つては忠を盡し去れ、子と爲つては孝を盡し去れ、花と爲つては開き去れ、紅葉と爲ては散り去れ、誠に至道は無難ぞよ、先づ是れで本則がザツと済んだ、これから圓悟の着語を調べて見ましやう。



示衆云の下に這の老漢什麼をか作す葛藤を打すること勿れとある、至道は元來語言を絶したものでちや、然るに衆に示して云くなど何を作るのちやツマラヌ葛藤を持出して人に厄介を掛けぬが好いぞ至道無難の下に難に非ず易に非ずとある、至道は元來難易の間には居らぬ然るを無難とは何事ぞと咎めた、凡て着語は揚げたり抑へたり互ひに相鏡を打つて名刀を鍛錬するやうなものであるから其つもりで見ると宜しい、唯嫌揀擇の下に眼前是れ什麼ぞ、眼前に椅子もあればテーブルもある、コップもあれば水瓶もある、是れ何の揀擇する所があるぞ、然し趙州が今此二句を自分の物らしく持出して来たところは三祖大師が猶ほ御健在のやうちやと冷かした、是明白の下に兩頭三面、終に語言あればと自分で言ひながら矢張さういふ語言を發して居るところが、頭が二つ有つて顔が三つもある化物のやうであるぞ、サテ又揀擇とか明白とか色なことを並べ立て、人に見せびらかす様子は小賣弄、小商賣をするやうのもので、儲が無いばかりでは無く元資まで失さねば好いが、一體に言句を絶した様子を示さうとして言句を述べるのであるから、魚泳けば水濁り鳥飛べば毛を落す如く跡をかくさうとすれば愈々跡が見えるぞ、不在明白裡の下に賊身已に露はる明白裡に在らずと云ふだけ明白の賊意が露顯する、一體に明白裡に在らずなどと云ふて何處へ逃げて往くつもりであるぞと云ふので什麼の處に向つて遁れ去るぞと云ふた、也無の下に也た一箇半箇あり、一人や半人無いでも有るまい、果して僧あり出で、問ひ掛けた、箇什麼の下に也た好し一撈を與ふるに、これは質問に出掛けた僧を教唆たのちや、舌上の齧を拵ふと云ふはサスガの趙州も此僧の質問には閉口であらうと冷かしたやうに云ふてます、僧にけしかける、我亦不知の下に這の老漢を撈殺すとある、到頭

趙州老僧を問ひ殺したかな、我も亦た知らずと本音を吹かせたぞ、しかし此の我亦不知の一言には三世諸佛も歴代の祖師も倒退三千里であらう、日本軍に逐はれた敵兵のやうに退却するより外は無此邊の着語は凡て質問の僧を抑揚して飽くまで冷かす氣味が見える、不在明白裡の下に看よ走りて什麼の處に向て去る、斯う問ひ詰められた趙州が何處へ走り去るか、諸君よく趙州の脚下を看て居るが好いと門下に注意した、逐ふて樹に上り去らしむと云ふは問ふた僧を冷かすので、最早や手の届かぬところまで趙州を逐ひ上げたぞと云ふのちや、禮拜了退の下に頼に這の一着あり、サスガ趙州老人ちや、此の一語で三世諸佛も歴代祖師も壓倒し得るぞ、サテ、恐ろしい老和尚ではあると云ふので、圓悟が其後容を見送りて這の老賊、近代の風外禪師がコ、に着語を下して火牛復齊と言はれたも面白い。

頌 至道無難 三重公案 滿口 言端語端 八裂 水濁 七華 一有多種

分開好 只一期 一一無兩般 何堪四五六七 天際日上月下 餓面相呈 頭上

切忌昂 檻前山深水寒 還覺寒毛卓 豎 髑髏識盡喜何立 棺木裏 行

者是他 枯木龍吟銷未乾 唯 枯木再生花 難難 裏是什麼所在 說難說易 揀

擇明白君自看 值 將謂由別人 事 此頌も長短十句あり本則の要語を其儘第一句にした所は前一則の頌と同じやうです、實に至道は無難ち



や、風は揀擇と吹きはせぬ、雨も明白と降りはせぬ、花は迷ふて開くでもなく、紅葉は悟つて散るでもない、吾々お互ひの日々夜々造次頭沛も其う無ければ成らぬ筈なのに、ナゼやもすれば揀擇明白の兩端に狼狽するぞ、圓悟の着語に三重公案とある、之は三祖大師の語を趙州和尚が衆に示し、其れを今また雪竇禪師が頌に用ゐたから三重の公案ぢや、満口に霜を含むと云ふは口に含んで満たしむることの出来べきものでない至道の無難さ加減は言ふに言はるゝものではないと云ふほどの評ぢや、第二句に言端語端これは趙州が纔に語言あれば是れ揀擇これ明白と言ふたのを、雪竇は反對に言ひあらはして、言も至道の端的も至道の端的よと言ふたのです、たゞ言端語端ばかりでは無い、造次も至道の端的ぢや、頭沛も無難の端的ぢや、花も月も馬も牛もよ、ソコで圓悟が魚行けば水濁ると着語した、言ふだけ野暮ぢやと云ふアンパイ、然るに彼れの此れのと云へば七華八裂よ、搽胡よ、搽胡と云ふはメチャクになることです、第三句に一に多種ありとある、一と云ふは平等一味のところ謂ゆる明白の體ぢや、多種と云ふは千差萬別の有様謂ゆる揀擇される境界よ、圓悟の着語に一の中に多種あると云ふなら分開了たら好からう、若し又た一般ぎりのものなら什麼の了期か有らん、何の役にも立たぬぞと言ふのぢや、第四句に二に兩般なし、多種ありと聞いたら復た幾つにもあるやうに思ふて揀擇するであらうが、二に元來兩般は無いぞ、春花秋月山水聲千差萬別の境、個々絶對獨立獨尊にして他の厄介には預からぬ、圓悟が評して兩般さへ無いのであるから、何ぞ四五六七に堪えんと言ふた、然し雪竇は斯んなことを言ふて何の爲めにするのぢやと云ふので葛藤を打して什麼をか作すと着語した、先づ此れで此公案の頌は済んだが、雪竇が更に文才を弄して第五

句に天際日上り月下る、夜が明ければ日が東海に上り月は西山に傾むく、是れ此の端的、揀擇か明白か、圓悟は觀面相呈すと言ふた、眼ある者は看よと云ふのです、又た頭上漫々脚下漫々とある、至道の端的は屋根の上にもあれば椽の下にもあるぞと、言へばとて頭を昂げて上を仰いだり、頭を低れて下に俯したりしてはならぬぞと制した、第六句に檻前山深く水寒し、前句と同徹で別意は無い、天際と云へば遠大に聞えるが檻前と聞けば手近いやうに思はれるまでのことぢや、ソコで一死更に復活せずと圓悟が云ふた、然し山深く水寒しと聞けば何となく深山幽谷の心もちになつて、誰やらが「巴峽猿の啼く處を過ぐれば鐵作の心肝も亦た斷腸」と云ふたやうなもので寒毛の卓立するを覺ゆること無しやと吾々に向つての撈着ぢや吾々はトカク人の口うらに乗せられては心を動かすに依つてコンナことを言はれるのぞ、獨體識盡きて喜何ぞ立せん此七八の一聯には色々の故事を多く含んであるけれども、其の穿鑿はおあづかりにして成句の上だけザツト見て通れば、獨體に喜怒哀樂の情の無いのは勿論である、至當無難の極端も亦た揀擇明白の知つたとでは無いぞと云ふのぢや、識盡てとある識の字は心識または識神とつづいて俗に謂ふ魂魄のことです、圓悟の着語に棺木裏の瞠眼とある、これは死中に活所のあることを云ふ俗語ぢやと云ふことです、又廬行者是れ他の同參と云ふ着語は、廬行者と云ふは六祖大師が俗人であつた時の名であるが、大師の偈に「生來坐不臥、死去臥不坐、一具臭骨頭、何爲立三功果」と云ふのが有る、夫れが雪竇の此句と同參すべき所ぞと云ふの意であらうと申すことです、第八句に枯木龍吟銷して未だ乾かずとある、死中に大活を得來つた有様ぢや、枯木に風の颯々と觸れる龍の吟する如き聲が起る、銷して未だ乾かずは死んだと



思ふたら未だ息がある云ふやうな詞ぢや、ソコで圓悟が枯木再び花を生ずと評した又達磨東土に遊ぶと云ふた、達磨は西天の第二十八祖であるに復た東土の初祖となつた、サテ斯く大死一番して後さらに蘇生し來つて見れば、娑婆往來八千邊、八萬四千の煩惱を相手に衆生濟度の千變萬化せねばならぬ、ソコが第九句の難々ぢや、今までは無難とばかり聞えてあつたに、今度は反覆して難々と云はるゝ、彌陀の本願に打まかせて淨土へ參らせてもらふのは何の世話の無い無難極まる仕事であるが「五濁惡世に還りては釋迦牟尼佛の如くにて」と云ふところへ來ては、實に難々ぢや、圓悟が裏の方から相槌を打つて邪法扶け難しと云ふた無難の舞臺へ難々などと踊り出すことは賛成し得ぬぞと云ふのぢや、また倒一説とある従前の説を一倒し來たナ、這裏是れ何の所在ぞ難と説き易と説くぞ、結局に揀擇明白君自から看よ、コ、に至りては揀擇も好し明白も好し人々各自に眼を開いて看るが好い、他人の足を借りて歩くは至道の往來で無いぞ、圓悟は、瞎と云ふた、瞎は盲目ぢや、看よと云ふたから圓悟は其んなものを見る眼はもたぬぞと云ふので、是れ此一瞎、光明遍照十方世界ぢや、將に謂へり、別人に由ると、我に看よと云ふのではあるまい頼に自から看ると云ふ雪竇お前自から看たくば看るが好い、山僧が事に干からず圓悟は一向關係は御座らぬぞと云ふのぢや、何が故に此の如くなる、從來眉毛は眼上に横はれり今さら看るには及ばぬぞ。

第三則 馬大師不安

垂示 一機一境。一言一句。且圖有箇入處。好肉上剜瘡。成

窠成窟。大用現前。不存軌則。且圖知有向上事。蓋天蓋地。又摸索不著。恁麼也得。大廉纖生。恁麼也不得。不恁麼也不得。太孤危生。不涉二途。如何。卽是請試舉看。

この垂示が五節に分れると云ふことぢや、第一節に一機一境一言一句且らく箇の入處あることを圖るも好肉上に瘡を剜り窠を成し窟を成すとある、機と云ふは機轉と續いて心のハタラキ、境と云ふは形に顯はしめて見せるもの言句は讀んで字の如し、都て普通教化の手段は機境言句の外は無い、釋尊が華を拈じたのは一境で迦葉が微笑したのは一機ぢや、笑つて答へずは一機で、立つて山を見るは一境ぞ南無阿彌陀佛も一言一句で南無妙法蓮華經も一言一句ぢや、月落ち鳥啼いても、古池や蛙飛び込むも、喝も咄も、光明遍照も念佛無間も、皆一言一句の範圍を出ることは出來ぬ、箇様な機境言句に涉るものは都て暫時の間學人を誘引して入處あることを圖るまでのことで、一大光明あることを知らしめんが爲めにマツチをチラリと摺つて見せるやうなものである、却て好肉上に瘡を剜り窠を成し窟を成す、窠も窟もアナと云ふ字であるが、吾々が色々の穴を堀つて其中へ自から埋つて居る、其穴の惣名を理窟と稱すると云ふことぢや、大乘だの小乗だの、顯教だの密教だの、禪宗だの眞宗だのと云ふ色々の理窟がある、近頃は哲學だの理論だの



と云ふ穴堀機械が多く舶來したから、新らしい穴も澤山ふえる、油斷すると無間地獄まで通りぬけぢやぞ、第二節に大用現前軌則を存せざるも且らく向上の事あることを知らしめんことを圖る蓋天蓋地又摸索不着、此れが第二節です、前とソツクリ違ふて機境や言句には涉らぬ、大用は大體のハタラキぢや、大體とは宇宙萬象の一大本體、其まゝに活潑々地の作用を起す、月は照り風は吹く柳は緑に花は紅、それが即ち大用の現前ぢや、法律も入らねば規則も不用ぞ、手に任せ拈じ來りて是非も無ければ迷語も無い、然し是れも亦た暫らく向上の事あることを知らしむるまでのことよ、向上は進歩と云はんが如き詞で、大智慧門の方ぢや、淨土門で往相と云ふやうなアンバイぞ、向下と云ふは退歩と云はんが如き詞で大慈悲門の方ぢや、淨土門で還相と云ふやうなアンバイぞ、詞をかへて申さば自己の本分を顯はす邊を向上と云ひ、利他の方便を廻らすのが向下であるから即ち前の第一節は全く向下にあたる、蓋天蓋地の蓋の字はオホフと云ふ字で、物の一面に充滿する意味ぢや、故に蓋天蓋地と云ふは盡天盡地と云ふも同じことで、天上にも地下にも摸索不着とツラマイやうが無いぞと云ふのぢや、ソコ第三節に恁麼も也た得たり不恁麼も也た得たり太廉織生とある恁麼はコレとかコノとかカクノゴトクとか云ふやうな意味であるから、恁麼も也た得たり不恁麼も也た得たりと云ふのはドチラでも宜しいと云ふことぢや、宇宙萬象そのまゝに大光明の遍照で、謂ゆる盡十方無碍光中の千紫萬紅、捨つべきものは一つも無いぞ大廉織生と云ふ太の字と生の字には意味が無い、廉織と云ふは物のコマカなることであるから、サテ／＼能く行届いたことぞと云ふやうな詞ぢや、第四節に恁麼も也た得ず不恁麼も也た得ず太孤危生と、前と全く反對ぢや、ドチラも採用相成ら

ぬとある、大用現前の處には規則が無いから、上告の致しやうも無ければ辯護のしやうも無い、三世の諸佛も此に至りては啞人の如く、歴代の祖師も嬰兒の如くぢや、太孤危生これも太の字と生の字には用がない、孤危は孤立危険と云ふことで千丈の岩石などが直立して居る有様、甚だ險峻で攀ぢ登りやうが無いぞ、二途に涉らず如何か是なる請ふ試みに擧す看よ、サア向上向下恁麼不恁麼すべて二途に涉ることは許さぬぞ、又ドチラへも片寄らぬと云ふに途中にブラ／＼して居ることも成らぬぞ、何としたものであらう幸に面白い昔話があるから擧揚して看せるほどに氣を附けて參究しなさい。

**本則擧馬大師不安** 道漢漏逗不 **院主問和尚近日尊候如**

**何** 四百四病一時發 **大師云日面佛月面佛** 可煞新

馬大師と云ふは達磨大師八代の法孫で、江西の馬祖山に居られた道一禪師と申して臨濟大師四世の祖ぢや、唐の興元四年二月一日に寂せられたが其前日に此問答が有つたと申すことです、不安は不豫とか不例とか云ふのと同じ意味で病氣のことぢや、圓悟の着語に此の漢漏逗少なからずとある、漏はモル逗はトドコフルで、器などの用に立たなくなつた有様ぢや、馬大師も老衰せられた病氣などをやるやうになつてはモウ役に立たぬぞ、其上に別人を帶累し去る此老漢の不安の爲めに多くの人に迷惑を掛けるぞと云ふ、これは千年以前に白骨に成つてしまふた馬大師の事ばかりでは無いぞ、吾人お互ひに安だの不安だのと云ふことが有るものであらうか、無いもので有らうか、人々各自の主人公を人々各自に診察一番して見るが宜し



い、主人公には安も不安も無いはずであるに、何故にか種々さまざまな病的症候の見えるのは主人公では有るまい、下婢か従僕か食客などの類であらう、其んなものに面會して主人公に遭ふたつもりになつて居るものが世の中に多いと云ふ評判ぢや、能く氣を付けて置かぬと萬一の時に飛んだ大耻をかくぞ、院主問ふ和尙近日尊候如何、院主と云ふは役僧の役名で、此時に馬祖山の院主を勤めて居た僧と見えるが、其人の名は傳はらぬ、サテ其院主が馬祖に問ふて云ふには和尙これは馬祖に於てアナタと云ふほどのこと近日尊候如何、近頃御病氣の様子に承はりましたが御容體は如何で御座ると云ふた、馬祖ばかりでは有るまい、諸君近日尊候如何と人々各自に問ふて見るが好い、圓悟の着語に四百四病、一時に發るとあるイヤハヤ有りと有らゆる病氣が皆一時に發つたぞと云ふのぢや、院主がコンなことを問ふのが實に自分が大病の爲めに膽語を吐くのぢやといふのです、馬大師元來不安は無いソレに病氣見舞を言ふとは何事ぞ、雨の降る日に太陽に向つて尊候如何と問ふやうなものよ、或は此の着語を馬祖の方へ掛けて尊候如何どころで無いぞ、馬祖の病氣は四百四病一時に發つたのよと云ふたと見る説もある、昔し維摩居士が自分には病氣は無いけれども一切衆生に病氣があるから自分も病氣すると云ふたことが有るが、馬祖の病氣も維摩と同症かも知れぬぞ、次の着語の三日の後に亡僧を送らざれば是れ好手とあるも兩方に掛けて見られる、此容體では三日も立つたら死亡した僧の送葬を行ふ様に成らねば好いと云ふたのぢや、然し院主は仁義道中で問ふたのかも知れぬと辯護した、仁義道中と云ふは我國の俗に御挨拶するとか御辭儀するとか云ふやうな詞と見える、ソコで馬祖は何と答へたか大師云く日面佛月面佛、實に妙な答では有る、是れが向上か向下か

將た太廉織生か太孤危生か、南無阿彌陀佛とか南無妙法蓮華經とか云ふことは聞いたこともあるが、コンな佛には是れまで御懇意申したことが無い、ソコで圓悟が甚だ新鮮と着語した、又圓悟は評唱の中にコウ云ふてある「此れ箇の公案若し落處を知らば便ち丹青に獨歩せん、若し落處を知らずんば往々枯木巖前に差路し去ること有らん」と云ひ、又「只這の日面佛月面佛極めて是れ見難し、雪竇も此に至りて亦是れ難し」と云ふてある、然し圓悟が更に着語を下して子を養ふの縁と云ふた子を養ふの手段ならばサマで孤危峻峻なことを言ふはづも無さうなもので有るが、獅子は其子を千丈絶壁の巖上から蹴落して其氣力を試みると云ふ例もあるから、結局これは理窟で了解すべきでは無い、人々各自に實修實證して默識心通するが宜しい、然し日面佛月面佛と云ふ言句だけの姿は分らんければ成らぬ、是れは佛名經に月面佛の壽命は僅に一日一夜で、日面佛の壽命は一千八百歳であると説いてある、十方三世の一切諸佛の中には色々な佛が有る、娑婆の釋迦佛は八十で入滅せられたが、極樂の彌陀如來は無量壽ぢやと云ふ評判ぞ、一日一夜の佛もあれば千八百歳の佛も有る、かげろ、うのあしたゆうべを待たぬも露のひぬまの朝顔も、三千歳の桃も八千年の椿もあると云ふことぢや、いま馬大師は幾つで死んだか分らぬが院主が御容體如何で御座ると問へば、一日一夜で死ぬる佛もあれば千八百歳で死ぬる佛もあるぞと答へた、何の不思議もないことよ、然し佛と云ふものは生れたり死んだりするもので有らうか無からうかソコが工夫のしどころぞ、元來法身佛には生滅去來は無いはずで有るが、衆生濟度の爲めには報身應身の生滅去來を示さねば成らぬ、ソコを淨法界身、本無出沒、大悲願力、示現去來とも云ふて有る、吾人お互ひの生老病死も大悲願力の去



來となれば何の苦も無く樂も無いフヤウヨウ承陽大師は「六趣四生に輪轉するとも皆是れ菩提の行願と爲る」と言はれた、六趣と云ふのは天上と人間と修羅と餓鬼と畜生と地獄ぢや、四生と云ふ胎生と卵生と濕生と化生です、如何なる所へどんな姿で生れても、其れが其まゝに悉く衆生濟度の行願となるぞと云ふことです、見真大師は「安樂淨土に到る人、五濁惡世に還りては、釋迦牟尼佛の如くにて、利益衆生きわも無し」と言はれてある、釋迦牟尼佛も吾々凡夫を御濟度の爲めには法性法身の御姿をおやつしなされて、吾々凡夫と同じ姿の人間にお生れなされ、人間と同じやうに生老病死を示させられた、吾々が設ひ極樂淨土へ往生しても極樂に逗留して獨りで樂しんで居るわけには參らぬ、矢張り釋迦牟尼佛の如くにて一切衆生濟度の爲めには、再び此の娑婆の五濁惡世へ還つて來なければ成らぬ、サア斯うなつて見れば生死去來が布教の爲めに巡回派出をするやうなわけで其面白さ加減言はん方なしと云ふことに成る、其れ故に此の日月佛月面佛の六字が佛法世法一切諸法一切諸法の蘊底を盡した一言である、是れは一場の閑話では無い、實着に參究して落處を知らば生々世々受用不盡ぢや、まづ此れで本則は濟んだとしてあとは雪竇の頌です、六言が一句、七言が四句、一字句と二字句とが間にあつて都合七句の古詩體です。

頌 日月佛月面佛開口見膽○如○兩面五帝三皇是何物大高生○莫

賤可○二十年来曾苦辛自是汝落草○不于山爲君幾下蒼龍窟他好○可

也莫○錯用心○好屈愁○殺○人○愁○人堪述向○阿○誰○說○說○明眼衲僧莫輕忽更○須○

倒子細○退三○千咄○

第一句に日月佛月面佛コレは直に馬大師が院主に答へられた句を拈じ來りて諸人に示された、ドウぢや此一句の面白さは諸君よく聞えたかと云ふあんばい、圓悟の着語に口を開けば膽を見るところある、此一句で馬祖の膽も見えれば雪竇の膽も見えるところと云ふた、諸君もよく見えたか、又兩面の鏡の相對して中に於て影像なきが如しとある、鏡と鏡と相對すれば互ひに光と光と相映するのみで、毫髪ばかりも影や像は見えぬ影や像が見えぬからと云ふて、何も映らぬかと云ふに、映るも映る馬祖と雪竇と二つとも言はれぬば一つとも言はれぬ有様、相互ひにアリノと見える、吾々お互ひも亦た常に佛祖と相對して兩面の鏡の相對して中に於て影像なきが如くに成らねばならぬ、佛祖に相對してと云ふたら又別物のやうに思ふかも知れぬが、君と臣と相對し、父と子と相對し、乃至朋友互ひに相對して兩面の鏡の中に於て影像なきが如くにさへなれば、仁怒も忠孝も皆無爲無作の仁慈忠孝ぢや、第二句に五帝三皇は何物ぞとある、此句に就ては昔から色々な議論があるが、本と此句は禪月大師貫休が公子行の詩に「錦衣鮮華手擎鶴、閑行氣貌多輕忽、稼穡艱難總不知、五帝三皇是何物」と詠じた古成句を雪竇が其儘こゝへ借りて來たので、此禪月の句意も二様に見える、公子の傲遊する有様は、下民の辛苦艱難も知らず、祖先の五帝三皇が如何なる苦勞をして國を肇め家を起したかも知れぬ様子ぞと言はれたと見ても好し、又は公子を誡めて祖先の辛苦を思はぬかと言はれたと見てもよいが是れ何物ぞと云ふ語勢は矢張り前の意味で、五帝も三皇も眼中に無い様



子が強いやうであるソコで雪竇が此句を此れへ持込んだのは全く馬祖が傍若無人に日面佛月面佛と云ふた勢ひが、佛祖も衆生も迷悟も生死も絶えて眼中に無い様子、如何にも氣高い言ひやうで、世に尊貴だの卑賤だのと云ふことの有ることを知らぬ風情、彼の禪月が詠じた公子の意氣揚々たる有様ぞと云ふたと見ると一ト通りの見かたちや、圓悟の着語もソコと見えて大高生とある、エライ天狗ぢやなと云ふた氣味で、他を諷することなくんば好しと云ふたも同じ心であるが、雪竇に向つて馬祖を侮蔑して悪いぞと云ふたと見ても、又は五帝三皇を諷じなさるなと云ふたと見てもドウでも好からう、然るに天桂禪師は此句を前の句から引き續けて、日面佛か月面佛か五帝か三皇か是れ何物ぞと云ふ意味ぞと言はれた、太郎か次郎か、お竹かお梅か、是れ何物ぞと云ふのも同じことよと見られたので、これは甚だ面白いやうではあるが、漢文の法として然うは見られぬかも知れぬ、然しソコが人々各自の見識ぢや、諸君は諸君で勝手に見るが宜しい、然るに之を妙な見やうをしたのは宋國の朝廷の大臣等です、神宗在位の時に此の「雪竇頌古」を大藏經ダイソウキョウにはゆる一切經の中に入れてたいと願ふた所が、我が君王の祖先たる五帝三皇を是れ何物ぞなどと云ふて國を誇つた句のあるものは大藏中に入れられぬと云ふ評議で上奏却下に相成つたと申すことぢや、今日の日本ならば發賣禁止、維新前なら雪竇和尚は斬罪か輕くも遠島へ流されるわけであつた、然るに雪竇は禪月からの借り物にも拘はらずコレが中々得意の句です、ソコで第三句に二十年來會て苦辛す、一體此公案の頌は前の二句で済んだので、是れからあとは雪竇自分の昔話をして學人を覺醒するのである、此雪竇も此事に就ては二十年このかた中々苦辛したぞと云ふ、圓悟が其れを評して自らは是れ汝の落草

とからかつた、落草と云ふことは大道を往かずに草の中の横道に入り込むと云ふことで有る、其れを轉じて兒を慙んで醜を忘ると云ふやうな所に使ふ詞にしたのです、今の詞で申したら其れはお前が自分の勝手に其様な苦辛をしたまでのことで、誰れも頼んだわけでは無い、元來佛法の大道には苦樂は無いに、強いて苦辛したは落草と云ふものぢや、山僧が事に干からず、山僧サンソウと云ふは圓悟自分の事です、雪竇がドンな苦辛しても、此圓悟が關係したことでは無いぞと云ふ、然し其苦辛の有様は、啞子苦瓜を喫して幾ら苦くても言ふに言はれず、其時の顔がドンなであつたらうと冷かした、然し此一段の話を圓悟や雪竇の昔話ばかり任せて置いては、切角碧巖を研究する所詮が無い、人々各自に苦瓜ニガウリを喫して見て而して後に其れを昔話にする時節が無ければならぬ、其苦辛の有様を第四句に幾たびか君が爲めに蒼龍窟ソウリョウクに下る、君と云ふは日面佛月面佛と無造作に言ひ得る境界を指したのです、蒼龍の窟下の珠を得るには幾たびも蒼龍窟ソウリョウクに下らねばならぬ、實地の修行は命がけでありますから、屢々死地に飛び込まんでは成就しがたいと云ふのを、圓悟が打消すやうに何ぞ恁麼なることを消せん、何もソんなことをするには及ばぬと云ふのです、消せんと云ふは費さんやと云ふのと同じ詞と見える、蒼龍窟下の珠は人々各自に元來所持して居るはずぢや、他の蒼龍窟などに下るには及ばぬぞと云ふたのです、とは云ふもの、錯まりて用心すること無くんば好し、心得違ひしては成らぬぞと門下へ注意した、屈コレは一字です、あゝ長い間の苦辛で怖ろしい窮窟な目に逢ふた、さすがの圓悟も此に至りてモハヤ堪え切れなんだと見えて、人を愁殺すと云ふた、悲しいことを言ひなさるな、昔し實地に命がけの修行をしたことを思へば、ワシとても御同様ぢや、愁人愁人に向つて



説くこと勿れ、其やうなことを同情の人に向つて話すものではないぞと云ふ、第六句に述るに堪たりとコレは二字ぢや、窮すれば則ち通ずと云ふ事があるが多年屈した結果が述るに堪えたりと云ふことに成つて、五帝三皇是れ何物ぞと云ふ境界になり得るぞ、圓悟の着語に何誰に向て説くとある、お前は述るに堪えたりと言ふが、其れは誰に向つて何を説かうと云ふのぢや、實地を履んで来たもので無ければ、幾ら説いて聞かせたからとて分るものではない、さればとて同臭味の人に向つて話したならば其人が泣くであらうぞと云ふので、愁人に説與すれば人を愁殺せん、互ひに斷腸の外は無いぞ、是れは圓悟が眞實に雪竇の知音たる一言ぢや、吾々お互ひも其知音仲間に入らねばならぬぞ、明眼の衲僧も輕忽すること莫れコレが結句ぢや、さて此の場合に至りては三千世界を見透しにするつもりは納僧でも、輕々疎忽に看過することは成るまいぞ、そこで圓悟が門下の諸子に向つて更に須からく子細にすべし念に念を入れて綿々密々に參究するが好いぞと注意した、其の雪竇に對しては何も輕忽だの鄭重だのと云ふには及ぶまいと云ふので咄と叱りつけた、然し雪竇の着々誠實なる言句には、誰でも倒退三千であらう、中々寄りつけたものでは無いと、揚げたり抑へたり相鎖を打つて馬大師不安の公案を參究せられた、その調子を能く吞込んで各自に實參實究するが宜しい。

第四則 德山挾複子

垂示 青天白日不可更指東劃西時節因緣亦須應病與

藥且道放行好把定好試舉看

此垂示を三節に分けて見る、第一節に青天白日、東を指し西を劃す可からずとある、青天白日と云ふは一點の雲も霞も無い景況、吾々各自の本體本性の上に於て迷悟も無ければ生死も無い有様に譬へたのぢや、東を指し西を劃して佛だの法だのと騒ぎ廻るには及ばぬぞ、とは云ふものゝ自己の本分ばかりで濟むべきでは無い、衆生濟度の方便としては、第二節に時節因緣亦た須らく病に應じて藥を與ふべし、其時節と云ふは謂ゆる臨機應變で、順縁でも逆縁でも因縁次第に、衆生の病氣を見はからふて其れ相應の藥を與へねば成らぬ、サア斯う二た筋の道が有るがドウしたもので有らうぞと云ふので、第三節に且らく道へ放行するが好きか把定するが好きか試みに舉す看よ、放行と云ふは自由に任せることで、即ち第一節の青天白日がソコぢや、把定と云ふは取り留めて收束することであるから、即ち第二節の應病與藥です、果してドチラが好いぞ、試みに一則の公案を拈提して見せるぞ、能く氣を附けて參考さつしやれと云ふのぢや。

本則 舉德山到滬山 挾複子於法堂上

東過西從西過東 顧視云無無便出 德山至門首卻云也不得草  
雪竇着語云勘破了也 便具威儀再入相見



山坐次スルヲ 鬚冷也 也須是這老漢 ○持得 德山提起坐具云和尚改面換頭 ○瀉山無風起浪

擬取拂子中須是那漢始得 ○運善 德山便喝拂袖出野狐精見解 ○

堂也 著草鞋便有照也 便行風光可愛 ○公案未圓贏得上笠 瀉山至晚問首坐

適來新到在什麼處東邊落節西邊拔本 ○首座云當時背卻法堂

著艸鞋出去也靈龜曳尾 ○好與三十 瀉山云此子已後向孤峯

頂上盤結草庵呵佛罵祖去在賊過後張弓 ○天雪竇着語云雪

上加霜然錯 ○點果

さて此本則は徳山禪師と瀉山禪師との立ち合ひで相撲なら關取と關取の取組ぢや、徳山と云ふ人は本と三論宗や法相宗を學んだ學僧で、禪宗は知らぬ人であつた、殊に金剛般若經が得意で、講釋は能く爲られたが、即心是佛と云ふことを知らぬに依つて禪宗の宗匠たちが即心是佛とか本來成佛とか説くのを面憎く思ふて、禪宗を攻撃しやうと云ふ考から澧州と云ふ所へ往く途中で或る茶屋に休むと、其茶屋の婆々が餅を賣つて居るのを見てコレ婆さん拙僧に其餅を二つ三つ賣つて下さいと云ふた、婆々が云ふには餅を買つて

何になさる○點心ヲシをするから賣つてくれ點心と云ふは心を轉ずるとも書くので、腹の空たときに鳥渡何か食ふことです 婆々は點心と聞いて然らばお問ひ申したい事があるが、其れをお答へ下されてコノ婆々に得心が入つたなら餅を御供養いたしましやう、一體貴僧が背負ふて御座る其本は何でありますか○コレは金剛般若經の講釋を拙僧が書いたのであるが、其れを問ふて何にする○イヤ其金剛經の中に分らぬことが有るからお問ひ申したいのです○金剛經の中に分らぬことが有ると云ふならドンなことでも問はしやれ○然らばお問ひ申しますが貴僧が今點心ヲシすると言はれたが金剛經の中に「過去心も不可得なり現在心も不可得なり未來心も不可得なり」と説いて有る然るに貴僧は何れの心を點ぜらるゝつもりか答へて下さい○サスガの徳山こゝに至りて一言も無い、佛法は講釋だけでは自由がきゝませんぞ、婆々はセセラ笑つて餅は上げますまい、餘處へ往つてお買ひなさい、徳山は驚ろいたの驚ろかないのと云ふ沙汰で無い、お婆さんお前はドウして其様なエライ見識を具へたのちや○ナニ此の近處に龍潭禪師と云ふお方が御座る貴僧も其お方に參じて御覽なさい、婆々に耻をかゝせられない位のことには有らうよと聞いたから、徳山は年來長い間苦辛して隣の家の寶物を數へるやうな學問ばかりして居たのが誠に耻かしいと云ふので、切角脊負ふて來た金剛經の抄疏を皆火に投じて焼き棄てゝ仕舞ひ、直に龍潭禪師の處へ往かれた、其れから又一段の面白い話があるが、餘り長くなるから其れはお預かりとして置いて、とにかくに徳山は斯う云ふわけで禪學へ飛び込んだ人で有りますから、誠に本氣の人であります、サテ其後龍潭の處で悟りを開いたが尙ほ諸方の禪師たちに歴參しやうと思ふて、或る時に瀉山禪師の處へ往かれた、其頃瀉山禪師は天下に名高い宗



匠で此人の弟子に、仰山と云ふ名師が有り、兩人の名を合せて瀉仰宗と云ふ一宗の祖師に成られた人で、コレが達磨門下の五宗に分れた中の一番古い宗旨です、さて徳山は此瀉山禪師の處へ何をしに往つたので有らうぞ、參禪問法の爲めに往つたのでは無くて、瀉山の悟りを勘檢しに往つたやうに見える、ソコで復子を挟さみて法堂上に於て東より西に過ぎ西より東に過ぎとある、復子と云ふは行脚僧の荷物のこと、法堂と云ふは瀉山禪師が弟子たちの爲めに説法して居られる處のことです、ソコへ徳山は旅支度で荷物を引つ提げたまゝソリと飛び込んで東から西へ西から東へと歩き廻りて、サテ何と云ふたかと思へば顧視して曰く無々、いかにも傍若無人のやうかたぢや、人間並の上で申したら無禮とも不敬とも申しやうの無い致し方です、無々ないぞと云ふたので有らうが何が無いので有りませうぞ、花もあれば月もある、風も吹けば雨も降る世の中に、何が無々ぢや、コンなことを仕たり言ふたりしたなら、瀉山がどんなことをするかソコを勘檢しやうと云ふ考か知らんが、サスがは瀉山ぢや、八風吹けどもピクともせぬ富嶽の巍然たるやうなものぢや、ソコで徳山便ち出づフイと外へ出てしまふた、コ、の様子を後に雪竇が着語して勘破了也、勘破了也と云ふは勘檢してしまふたぞと云ふことです、徳山が瀉山を勘破したので有らうか、又は瀉山が徳山を勘破したので有らうか、又は雪竇が瀉山徳山兩人の作略を勘破したので有らうか、ソコは人々各自に見るが好い、徳山門首に至り却て曰く也た草々なることを得ず、傍若無人にヤツつけて見たが、更に考へ直したのです、門首に至ると云ふは、瀉山の寺の門の處まで出て往つたと云ふことです、草々は匆々と云ふも同じことで、コレは少し丁寧に勘檢して見なければならぬと云ふのです、

便ち威儀を具して再び入て相見す、前には旅支度のまゝで無禮至極な有様であつたが、今度はチャンと弟子たるものが師匠に物を問ふだけの威儀をつくらふて再び入て相見す、禪宗ではお目に掛るとか拜觀するとか云ふほどのことを、相見すると云ふのが平生の詞になつて居ります、其時に丁度瀉山禪師が坐つて御座ツたが、徳山は坐具を提起するとある、坐具と云ふは禮拜するときの下へ敷くもので、原名を尼師壇と云ふ、袈裟を掛けたときに必らず持たなければ成らぬのです、瀉山は坐して居る、徳山は立禮で立つて居ることですから、坐具をたゝんで手に持つて居たのを、更に提起と少し引き上げて、サテ何と云ふたかと云ふに、和尚、和尚と云ふたのは瀉山禪師を呼んだので、先生とかアナタとか云ふほどのことです、瀉山は徳山が坐具を提起して和尚と呼び掛ける様子を見ると椅子の側に置いてあつた拂子を取らうとした、ソウすると間に髪を容るゝ隙も無く徳山便ち喝して拂袖して出づ、何と烈しい掛合では御座らぬか、徳山が和尚と呼び掛けただけでマダ外に何にも言はぬに、瀉山は拂子を取らうとした、スカササ徳山は大きな聲をしてカアツと言つて袖を振り拂つて出て往つてしまふた、コレは一體いかなことと有りませうぞ、雪竇は相變らず勘破了也と着語した、今度は徳山が門首で考へ直す用も無いと見えて、法堂を背却して草鞋を着けて便ち行くサツサと旅支度をしてドコかへ往つてしまふた、コレは先づコレで一幕として、サテ瀉山晩に至て首座に問ふ適來の新到什麼の處に在る、晩に至つたと云ふは其日の夕方になつたと云ふほどのこと、首座と云ふは弟子たちの中の第一座に居る人々のこと、新到と云ふは禪宗の一つの名詞で、今新たに弟子入りを願ふて來た者のことを新到と申します、新入の生徒と云ふは



どのことです、適來と云ふは先き程からと云ふやうな詞で有るから、先刻見えた徳山と云ふ僧は何處に居  
 るぞと首座に問はれたのです、何處に居ると云ふのは、五尺の形體カカラのことでは無からう、あの徳山と云ふ  
 ものの立脚の地はドンな處であると思ふぞと云ふて、瀉山が首座を勘檢せられたものと見える、其れとも  
 知らず此首座はノロマにも當時法堂を背却して草鞋を着けて出て去れり、アレは先刻旅支度をして何處  
 へか往つてしまひました、トンと力の無い答へやうぢや、瀉山はソレにも構はず此子已後孤峯頂上に向て  
 艸庵を盤結して佛を呵し祖を罵しり去ることコト在らん、此子と云ふは徳山のこと、孤峯と云ふは山々の多く  
 ある中に一段と秀でたる峯のこと、其の頂上と云ふので有るから絶對高尚この上も無い所です、ソコ  
 へ草庵を結んで佛を呵し祖を罵しるぞと有らうと言はれる、瀉山が大層に徳山を褒められたやうに聞え  
 る、然るに雪竇は雪上に霜を加ふと著語した、瀉山老人も餘計なことを言ふたものでは有る、凡そ生きと  
 し生ける者誰れか孤峯頂上に草庵を結んで居らぬものがあるぞ、佛を呵し祖を罵しると云ふも後れた話ぢ  
 や、花は佛と咲くか月は祖と照るか、元來佛だの祖だのと言ふものの有らうはずが無いに、何の呵するの  
 罵しるのと云ふ世話が入らうぞ、ソんなことを言ふだけ雪上に霜を加へると云ふもの、餘計なお世話ぢや  
 と云ふあんばい、先づコレで一と通り本則のおもてが濟んで、ソコで圓悟の著語を調べて見やう、徳山到  
 瀉山の下に擔板漢とある、擔板漢と云ふは板を擔イふた男と云ふのであるから後を振り向いて見ることも出  
 來ず左右を顧りみることも成らず、たゞ一方向に往くのです、當節なら馬車馬バシヤウマと云ふても宜しい、徳山が  
 瀉山に到る意氣軒昂の様子が馬車馬のやうぢや、しかしコイツ中々喰へない奴ぞと云ふので、野狐精と第

二の著語を下した、挾ク子シ於レ法堂上ノ下ニ妨ケずシ人ヲして疑着セしムとある、いかにも傍若無人の仕方  
 あるに依つて、如何なる人でも何をするので有るかと疑はぬものは有るまい、然し其の人を疑着せしむる  
 所が、却つて脚色が見えて大失策ぞと云ふので、敗オ缺クを納ると言はれた、從東過西從西過東の下に甚だ禪  
 ありて什麼をか作さん、徳山は頻りに悟りに誇つて居るものと見えるが、何も珍らしくも無いことを、河  
 の端へ水を賣りに往つたやうなものぞ、無々の下に好し三十棒を興ふるに、御褒美に思ふさま打ち擲つて  
 やるが好い、然し甚だ氣天を衝くおそろしい勢ひでは有るぞ、眞の獅子兒よく獅子吼すアノ無々と言つて  
 飛び出した様子が獅子奮迅の有様ぢや、勘破カン了リヤウ也ニの下に錯サと果ク然ニと點テンの三つ續けさまの著語が有る、錯は  
 チガフたと云ふやうな言葉、果然は其れと反對でソレに違ひないと云ふ言葉、當節の演説場などでヒヤ  
 ヒヤと云ふたり、ノウノウと云ふたりするやうなもので有るが、何がヒヤヒヤで何がノウノウやら、一人  
 で兩方を言ふたばかりで無く、モ一つ點テンと言ふた、コレは點定テンテイと點破テンパと點頭テントウとの差別があると言ふことぢ  
 やが、點定ならば事物を把り留めて動かさぬ方であるから、宇宙の萬象おのゝ其本位ホンイて住する有様、點  
 破ならば事物を放把する方であるから一切諸法を空散して跡を留めさせぬ、點頭ならば俗に謂ふ合點カテンする  
 ことぢや、圓悟が此の通りの三つの著語を三ヶ所に下して、諸人還つて會すや有時は一輩ヒツ艸ソウを將て丈六の  
 金身となして用ゐ、有時は丈六の金身を將て一輩艸となして用ゆと云ふてある、丈六の金身コンジンと云ふは佛の  
 ことぢや、或時は佛陀世尊を一本の艸として使ふこともあり、又或時は草一本を佛陀世尊として禮拜供養  
 することもあるぞと云ふ、兎に角、佛と草とが同じ價値に違ひない、露のひぬ間の朝顔の夢一筋と壽命無



量の金剛不壞の身と相場に違ひは無いと見える、何でも實參實究が肝要ぢや、不得草々の下に放去收來とある、放去は無々と云つて出て行つた有様、收來は更に門頭で考へ直した様子、頭上太高生末後太低生とある、太の字と生の字には意味が無い、龍頭蛇尾と云ふたほどのこと、前にはエライ勢ひで有つたが今度は又甚だ御丁寧ぢやのと冷かしたのぢや、過を知て必らず改む能く幾人かある、然し前の勢ひに乗じたのが悪かつたと知つて、更に草々なることを得ずと改めたのが感心ぢや、さういふ心掛の人は誠に少いものと、是れも冷かしたやうに聞えるけれども、其實は門下の者に着實參究を諭されたものと見える、再入相見の下に依前として這の去就を作す、之は徳山が第二の手段として威儀を具して再び入て相見したのを圓悟は肯がはぬのぢや、矢張り様に依て胡盧を盡き其のやうな有りふれた所作をするかと罵しり、更に己に是れ第二重の敗缺と云ふた、前の粗暴も敗缺、今度の丁寧も敗缺、そんなことでは瀧山老人を勘破することが出来ぬのみで無く、峻あゝ危険なことでは有るぞ、瀧山坐次の下に冷眼にして這老漢を見る、徳山元來意地の悪い男であるなら威儀を具して再び入つて相見する時に、瀧山老人がチャンと坐つて居るのを見たとイヤな目付をして彼れを睥んだであらう、然し瀧山のやうな虎の鬚を捋ることは也た須からく是れ這般の人にして始て得べしサテ、冒険な仕事ではあるぞ、和尚の下に面を改め頭を換ふとある、前には無、無、今度は和尚調子が變つた、風なきに浪を起す元來大地に衆生なし問ふべき法も無ければ答ふべき法も無いに何をする事やらと圓悟が獨り言を云ふてツブヤいて居る擬那拂子の下に須からく是れ那漢にして始て得べしとある、瀧山は敢て徳山に答ふるでも無く、さりとしてボンヤリして居るでも無く、ソロリと拂

子を取りに掛つた、サスガは瀧山ぢや、劍も抜かず矢も放たぬ間に強敵を挫く手段があるぞと云ふので、箒を帷幄の中に運らすと評した、サア斯うあつてこそ妨げず天下人の舌頭を坐斷するに、徳山ばかりではあるまい満天下に唯一人此瀧山に向つてもの言へる者は無からうぞ、拂袖出の下に野狐精の見解この畜生めがと云ふたやうなアンバイ、中々一筋縄ではいかぬ奴ぞ、這の一喝また權ありまた實ありまた照ありまた用ありとある、長い着語は恐らく圓悟の下語では無くて後人が心覺えに書き入れなどをしたのが、着語の中に混じたのでは有るまいかと思ふ、權實だの照用だのと經論の注釋めいたことは面白くもないやうに思はれる、一等は是れ雲を拏らひ霧を攫む者中に就て奇特なりコレは徳山の活機を稱賛したのぢや、一等等と云ふは達磨以來歴代の禪祖だち誰一人としてエラク無い者は無いがと云ふので、雲を拏つらひ霧を攫むと云ふは龍の空中をかける有様を形容した詞ぢや、サテ其龍の多い中にも徳山はまた一段エライ者では有ると云ふので、中に就て奇特と言はれた、勘破了の下にまた錯と果然と點との三語を連下してある、ノウノウ、ヒヤヒヤ、チョンと言ひ續けた調子、著艸鞋便行の下に風光愛す可しと徳山が袖を拂つて出て行く有様の灑々落落たる景況を圓悟が羨ましさうに言ふて門下の者の顔を見まはしたらうかと思はれる、ソコで然し公案未だ圓ならずと更に一語を下し、其上に頂上の笠を贏ち得て脚下の鞋を失却すと云ふたのみならず已に是れ喪身失命し了れりと言はれた、徳山が一喝を下して拂袖して出掛けた活機は笠を捨て草鞋を失したやうなものぞ、其實は瀧山が拂子を取らうとした時に、徳山の頭を打ち落されたのよと評したのぢや、在什麼處の下に東邊に落節し西邊に抜本す、是れは瀧山を評したので、瀧山が前に徳山を接待し



やうとしては一喝で遁げ出され、今度は首座を接しやうと思へば無感で暖簾と脛押をするやうな有様、東邊では落節し西邊では抜本ぢや、抜本と云ふは商賣の資本を亡くすことで、落節と云ふは商賣の掛引に損耗することぢや、眼は東南を觀て意は西北に在りコレは瀉山が首座に適來の新到什麼處に在りやと問ふたのは、其實徳山の事を問ふたのでは無くて首座の識見を勘驗したのであるから、口と心とが違ふて居るぞと云ふ意味、出去也の下に靈龜尾を曳くとある、コレは何やら故事のあることで龜と云ふものは子を生むときに卵を沙の中に藏して置き、自己は窺と餘處へ往つて遊んで居る、其れは卵の在る所を他のものにつ知らせまいとての手段であるさうぢやが其の窺と餘處へ遁げて往くときに、尻尾を引摺た跡が沙の上につくことに氣が附かぬから、藏せば愈々其跡があらはれると云ふやうな意味のところに靈龜曳尾と云ふことを云ふのです、首座の答に力の無いのを誘つたのぢや、ソコで好し三十棒を興ふるにと叱りつけた、このやうな無感な首座はチト痛い目に遭はせてやるが好い、這般の漢腦後に多少を喫せしむべしドシ／＼打擲つて遣らねば成らぬぞと重々首座を呵嘖する、罵祖去の下に賊過後の張弓、瀉山が今さらに斯んなことを言ふのを圓悟が口惜しがつて何故彼の徳山が一喝して遁げ出すときに其う言はなんだぞ、盜賊の遁げてしまつた後で弓を引いたからと何にも成らぬではないか、とは云ふものの瀉山の眼は高いぞ天下の衲僧も跳不出いかなるものでも此の瀉山が張つた網の目をくぐることは出来まい、雪上加霜の下に圓悟が又錯と果然と點と三轉語を下した、例のノウ／＼とヒヤ／＼とチョンとの三點やつたのぢや、これが先づ圓悟の見かたよ、ソコで雪寶は何と見た。

頌 一勘破言猶在 二勘破公案 雪上加霜曾 嶮墮在 飛騎無傍人

將軍入虜庭再斬 不放過孤峯頂上草裏坐 急走過未爲奇特

○三十六策盡備 神通堪作何用 兩在草裏坐 咄 會麼 兩刃相傷 兩々三々 舊路行 唱拍相隨 便打

長短六句の古詩體の頌ぢや、六言が二句ある其れに三言四句と見る向もあるで有らう、第一句の一勘破二勘破これは雪寶が本則を舉揚したときに勘破了也と云ふことを二度云ふてある、其れを其儘また頌にして來た、彼の徳山が無々と云ふて飛び出した時に勘破了也と言つたが徳山が瀉山を勘破したと云ふのやら瀉山が徳山を勘破したのやら、又は雪寶が瀉山徳山兩人を勘破したのやら、何が何をドウ勘破したので有らう、次に徳山が一喝して飛び出した時にも同じやうに勘破了也と言ふた、ソコで圓悟の着語に言猶ほ耳に在りとも兩重の公案とも有つて、先刻本則で承はりましたと云ふアンバイの評ぢや、又過と云ふてある、此れはスギタと云ふ意味で、トウに濟んでしまふたと言ふほどのことよ、雪上に霜を加ふ會つて嶮墮すと云ふは、本則の瀉山が首座を勘驗して此子已後向孤峰頂上盤結艸庵呵佛罵祖去在と云はれた所で、雪寶が雪上加霜と云ふて置いたのを其まゝ頌の句にして會嶮墮と云ふ三字を加へたまでぢや、嶮墮と云ふはアヤウイことであつたぞと云ふ詞、圓悟が三段不同と着語した、一勘破と二勘破と雪上加霜との三段みな



其調子に差別が有るぞと云ふ詞であるが、此着語が三段不同であるばかりでは有るまい、月は月よ花は花よ凡そ宇宙間に不同ならぬものは無いぞ、在三什麼處と云ふ着語は雪竇が曾て嶮墮すと言ふてアブナイことよと頷したが、其アブナイ處はドコに在るぞと工夫して看よと圓悟が門下に注意したのであると申すことぢや、飛騎將軍虜庭に入る之は漢の時代の故事で漢の武帝の臣下に李廣と云ふ大將があつたが、馬に騎ることが達者であるので武帝から飛騎將軍と云ふ名をもらふたと云ふことぢや、又一説には天子から名けられたのでは無く敵の虜等が其う言ふて稱賛したとも云ふが、其の李廣が單子と云ふ虜に擒にされて酋長の前に引出された、其時李廣は少々手疵を負ふて居たが、虜等は李廣を馬と馬との間に寝かしておき已に斬殺さうとした、李廣は目を閉ぢて死んだふりをして居たが側に一人の虜が善馬に騎つて居るのを見て李廣はスカサズ飛び起きて其虜を付き落し、自分が其馬に飛び乗り剩さへ其虜の持つて居た弓矢を奪つて、一目散に駆け出してトウ／＼遁げのびて漢の本陣へ歸つて來たと云ふことが史記の李廣の傳に見えるが、今徳山が瀉山老人の虎の鬚をチョイと引張て見てアブナイ所を一喝して飛び出した様子が李廣に能く似て居るぞと云ふのぢや、ソコで圓悟が嶮と着語してアブナイゾと注意した、更に瀉山に建議して徳山のやうな敗軍の將を再び斬るには及ぶまいぞ、先刻の無々で大敗北ソレに懲りずに復た一喝、打捨て、置ても彼は已に喪身失命で御座ると飽くまで徳山を抑へつけた、再び完全を得る能く幾箇かあると雪竇は徳山をほめる、ソコで雪竇は死中に活を得たりと相鎚を打つ、急に走過す放過せずコレも一句と見ても三言二句と見てもよい、急に走過すと云ふは徳山の敵馬に騎つて遁げ出した有様、放過せずと云ふはサスガの瀉

山老人なか／＼徳山に謾着されぬと褒めた、圓悟が急走過の下に傍若無人と着語してある、徳山の一喝して拂袖し去つた勢ひは實に傍に人なきが若くであるとして云ふたので、更に三十六策汝が神通を盡すも何の用をか作すに堪えんと評した、兵法に三十六計を説いて遂に遁ぐるが第一の上策と成つて居ると云ふことぢやコレは徳山を抑へたので、其次に不放過の下に理能く豹を伏すと着語した、コレは瀉山が優柔の手段を以て強猛なる徳山を勘破した景況、鼻孔を穿却せよと云ふは鼻の穴へ綱を透せと云ふのであるから、荒れまはる牛を生捕にしたやうな具合、結局に孤峯頂上草裏に坐すとある、此一句に二様の意が見えると云ふ評判ぢや、然し其語は瀉山が徳山の後來を見ぬいて此子他日孤峯頂上に向つて艸庵を盤結し佛を呵し祖を罵り去ることあらんと云ふた詞を其儘七言一句にしたまで、有るが、其意は瀉山自身が孤峯頂上に草裏に坐して居るとも見える又やはり徳山の後來を言ふたとも聞える、雪竇の頷には本則の語を其まゝに持つて來てそして其意味は更に深く成つて居るのが多いからソコは人々の親しく参究すべき所である、孤峯頂上と云ふは草の生えぬ所で大智慧門超絶の地、草裏と云ふは草茫茫たる所で大慈悲門啓見忘醜の境界、其つもりで各自にドウとも解して見るが好いが、圓悟は果然と着語した、雪竇の此句に同意と見える、更に鼻孔を穿却するも也た末だ奇特と爲さずと云ふた、コレは前に鼻孔を穿却せよと云ふて置いたが、其れでさへも未だ／＼奇特とは言へぬものを、何故に草裡などに坐するのぢやと瀉山に向つたので、ソコで什麼として却て草裡に於て坐するぞと云ふ着語を連下した、其次に咄とある、この咄却は雪竇が頷の結末に置いたので圓悟の着語では無からうと云ふ説がある、成るほど其方が面白いやうぢや、其れならば前の草裏に坐



するのを咄却して叱り附けたと見える、會すやとある、コレは圓悟が門下の者に注意したので、ドウぢや合點が往つたかと云ふたまでのこと、兩刃相傷と云ふは英雄と英雄とが戦へば兩方の刀と刀に傷が附く、徳山と云ひ澗山と云ひ又それを評した雪竇と云ひ孰れも孰れぢや、兩々三々舊路に行く、と二人も三人も道づれに成つて格別塹新な事も無いぞと圓悟が言ふ、然らば何ぞ塹新なことの有るべき筈かと云ふに、元來宇宙に塹新なことの有るべき筈が無い、花はいつも花よ、月はいつも月よ、ソコで唱拍相隨ふと歌ふものが有れば手を拍つものが有る、徳山が歌へば澗山が踊る雪竇が囃やす、圓悟がドウするぞ、便ち打つ、この一棒には虚空も痛い痛いと言つて泣くやら笑ふやら。

第五則 雪峯盡大地

垂示 大凡扶豎宗教須是英靈底漢要殺人不貶眼底手脚方可立地成佛所以照用同時卷舒齊唱理事不二權實並行放過一著建立第二義門直下截斷葛藤後學初機難爲湊泊昨日恁麼事不獲已今日又恁麼罪過彌天若是明眼漢一點謾他不得其或未然虎口裡橫身不免

喪身失命試舉看

垂示は何れも皆佛果圓悟禪師が門下に對しての垂誡教示ぢや、今度は何を垂示せられたぞ、禪門の大宗匠が學人を接するやうす、實に人情を容れられぬ有様ぢや、宗教を扶豎すと云ふは人の師匠に成るにはと云ふほどの事、宗教は元來人々各自に具へて居るもので有るけれども、先覺者の扶助を得て始めて堅立することの出来るが多い、故に大凡そ人の爲めに宗教を扶豎させやうと思ふには並大抵のことでは出来ぬ、須からく是れ英靈底の漢なるべし、英は千人に勝るゝを英と曰ふとも申して拔群絶倫の人の事、靈は靈妙不可思議の靈の字で、人間普通の知識では無い、いかにも神か佛かと思ふほどの靈活の作用の有る人で無ければ成らぬ、漢は男字と云ふほどの俗語ぢや、然らば其英靈さ加減はドンなで有るかと云ふに、人を殺して眼を貶せざる底の手脚あるを要すとある、平生は如何にも豪傑らしい人で有つてもサアと云ふ時に成つて、人を手に掛けて殺すと云ふやうな場合に及んでは、餘ほどの馬鹿か大惡人か、さも無ければ眞の大豪傑で無ければ、幾分か心が動くに違ひない、其心の動く様子を眼を貶すと形容せられた、眼がチラ／＼とすること有らう、然るに今佛祖の大道を擧揚して人天の大導師と爲る人は、法の爲め道の爲めに毫髮ほども人情を加へず、露ばかりも我見を雜えぬに依て、之を世間の事に譬へて見れば、人を殺して眼を貶せざるやうなものよ、何も佛祖の宗教を扶豎するものが、人殺しをして平氣で居ると云ふわけでは無い、其れを下手に誤つて昔は妄りに棒チギリなどを振り廻して法の爲めに殺してやるぞなどと云つて、隨分雲水坊



主を打ち殺した云ふ話さへもある、トンでも無いことと申さねば成らぬ、受け難き人身を受け遣ひ難き佛法に遣ひながら、其位なことも分らぬ者に打ち殺されてタマルものか、然し此第五則の主人公である雪峰禪師は随分手荒いことをやらかす人であつた、其人情を容れぬ無慈悲のやうな大慈悲の手段が有つて方に立地に成佛せしむ可し、さも無いと一生虚しく過して切角佛法に遣ふた甲斐も無いことに成るのが多いぞ、然らば其立地に成佛させる手段と云ふはドウすることかと云ふに、所以に照用同時卷舒齊く唱へ理事不二權實並べ行ふとある、照用の二字は其機を鑑みるを照と云ひ、其機に應ずるを用と云ふと、古人が注したのもあるが、其れでも好からう、兎に角間に髪を容るゝいとまなく直接に活照活用することよ、照と云ふは心に考へること、用と云ふは其考へた通りを實地に行ふことで有るが、何事に對しても、先づ考へて其れから後にと云ふやうなノロマなことでは無い、ソコを同時と云はれたものぢや、卷舒齊しく唱ふと云ふのも詞が變つただけで、照用同時と意味に異りは無い、經論の講釋などで使ふ詞で言ふたならば、卷と云ふは折伏のことで、舒と云ふは攝受のことよ、又與奪と云ふも同じ意味ぢや、然るに其二つを或時は奪つて折伏し或時は攝受して與ふると云ふわけでは無く、齊しく唱ふと云ふのであるから、卷とも舒とも痕迹は見えぬ、箇様な提撕の仕方では有るから、教家などで理事とか權實とか色々むづかしい講釋することも、皆不二並行で理論と事實とが二つに成らぬ、權の方便も實の目的も別々には成らぬと云ふのぢや、然るにコレでは元來佛も無ければ衆生も無い、悟りも無ければ迷ひも無い、即ち生佛不二迷悟同時と云ふので謂ゆる向上の一著と云ふのであるから、更に其一著を放過して第二義門を建立して直下に葛藤を截斷す、

兎角に多くの學者が理事とか權實とか生佛とか迷悟とか色々な葛藤に纏綿されて、向上第一義の一著に到着することが出来ぬに依て、已むを得ず第二義門を開いて先づ直下に其葛藤を截斷して纏綿を解脱させることで有るが、それすら後學初機と云ふ並大抵の人では溘泊を爲し難し、中々寄り附くことが出来ぬ、溘泊はアツマル泊はトマルで大海を渡りてあるく多くの船が風波を避けて良い港へ集まり錨を卸すことださうな、ソコで昨日も恁麼なる事已むを得ず今日も又恁麼なる罪過彌天であるぞと云ふ、恁麼はドコでも此通りと云ふだけの俗語であるが、コで昨日も此通り今日も此通りと云ふのは、此通りに色々な方便を廻らして參禪辨道の手引をして居ることと有るかと云ふ意味ぢや、サテ其方便手引が實に已むを得ぬに起つたことで、元來宇宙の眞理と云ふものは口に掛けて彼れの此れのと辯論したり、所作に掛けてドウぢやコウぢやと形容したりすべきものでも無ければ、結局辯論し得べきものでも形容し得べきものでも無い、然るに今は向上一著の第一義門に直に到着し得ぬ後學初機の爲めに、萬々已むを得ず色々な方便手段を廻らすことであるが、元來無疵の美しい壁に疵を附けるやうなもので有るから、罪過彌天ぢや、彌天は天に彌ると云ふので身の置き所の無いほどの大罪であると云ふことぢや、チャに依て此道に參する學人が若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を諷することを得ず、實に萬々已むを得ざるの提撕を受けるので有るから、盲目で無い限りは毫髪ばかりも此間に我諷邪諷増上諷等を起すわけには往かぬ、眞實至誠に參究せんければ成らぬ、其れ或は然らず若しヒョツと其れが反對で有つたならば虎口裏に身を横たふ、猛虎の口の中へ飛び込むやうなもので喪身失命を免がれざらんとドウせ命は無いぞ、地獄の釜の底まで眞倒さまぢや、決し



て浮ぶ瀬は無いぞ、其れに就て雪峯禪師の示しがある試みに學す、看よ。

**本則** 舉雪峯示衆云○不爲引衆言盡大地撮來如粟米粒大○是手

段○山僧從來拋向面前○只恐放不下○漆桶不會○倚勢欺人○白領田○白領田打鼓○好

普請看○踏○打鼓○軍

雪峯和尚は此前の本則に有つた徳山禪師の弟子で、雲門大師の爲めには師匠ぢや、平生學人を接するに甚だ峻峻なことと有つた、或る時などは雲門が如何なるか是れ佛と問ふたところが此の和尚が一言に叱り付けて寐語すること莫れネゴトを言ふな、實に人情を容れられぬ接しかたぢや、然し今のところは垂示にある通り己む事を得ず罪過彌天と知りつゝの示衆であるから、少しはヤサしいことでも云ふかと思へば、盡大地撮し來るに粟米粒の大きさの如くであると言ふ、盡大地と云ふも三千大千世界と云ふも一天四海と云ふも其言葉はドウでも好い、何やら知らんが盡大地とでも云へば大きいものゝやうに思ふで有らうが、其れを撮し來ると云ふは指の先でツマんで見れば、粟米粒ほどの大きさぞと云ふ、粟と云ふは日本の俗語にモミと云ふので、また殻を除かない米のことださうな、盡大地は且らく置き吾々お互ひの五尺の身體はドウぢや、大きい小さいか、盡大地と聞いては何となく大きいやうな心もちがしたり、粟米粒と云へば何やら小さいやうな心もちがするやうでは、己れの身體の分量も分らぬぞ、トニカクに先づ大小の邊量を抛却して來んでは相談にはならぬ、ソコで雪峯が面前に抛何して見せられた、拋向と云ふはナゲダスことぢ

や、ナゲダサレたなら誰にも見えさうなものであるに、漆桶不會、漆桶と云ふは眞黒なと云ふ譬の俗語、不會は合點がゆかぬと云ふことで有るから、粟米粒の大きさの盡大地が鼻のさきにゴロンとして居るのに其れが少しも見えぬとは如何なることぞ、皆これ情識思量に驅逐せられて大小深淺迷悟凡聖等の邊量を超越することが出來ぬからのことよ、眞理は天井の上にもあれば椽の下にもあるぞ、ドウぢやマダ見えぬか、見えぬなら仕方が無い、鼓を打ちて普請して看よ、大勢よび寄せて惣掛りで探して見るが好いと言はれたのぢや、普請と云ふはアマネクコフと讀むので、多くの人を一同頼むと云ふ意味、コレは禪宗の寺に雲水僧が五十人も百人も居るのを寺中の大掃除などをするときに普請鼓と云ふ大鼓を打つ、其の大鼓が鳴れば一同出掛けて掃除なり何なりすることを普請すると云ふので、其れが遂に世間の詞に成つて、今では土木を起すことをばかり普請と云ふことに成つたが、元來は今申したやうなわけである、ソコで今も雪峯和尚が吾々に向つて、汝等愚昧で一人で眞理が見えぬなら大勢惣掛りで探して見ろと言はるゝので有るが、諸君コレはドウしたもので有らうぞ、先づ圓悟老人の了簡も聞いて見やう、圓悟は雪峯示衆云の下に○盲衆盲を引くと着語した、元來一法の人に示すべきは無いものを雪峯あながちに衆に示すなど出掛けたから、メクラドチ／＼引くものも引かれる者も溝の中へでも落ち込まねば好いがと云ふやうなアンバイ、然し其れも萬々己むを得ざる事もあれば分外と云ふわけでも無いと前の着語で奪つて後の着語で與へた、如粟米粒大の下に是れ什麼の手段ぞ、盡大地は盡大地よ其れを殊さらに粟米粒の大きさなどと妙な手品を使ふものぢや、何の爲めに其様なおかしいことをするぞ、山僧從來鬼眼睛を弄せず、この圓悟などは



生れつき其の様な子供威しに鬼のやうな顔をする事などは嫌ひで御座ると云ふのちや、抛向面前の下に恐らくは抛不下ならん。雪峯は面前に抛向すると言はれたが、實際果して能く抛向せらるゝやらドウだやらと言つて吾々學人の顔を見廻されたかと思ふ、トカク何事にも執着して抛下し得る癖のある凡夫の耳の甚だ痛い着語ではある、然し果して能く抛向し得たとしたところで其れが何の役に立つぞと云ふアンバイ、更に什麼の伎倆が有るツマラン藝よと評された、漆桶不會の下に勢ひに倚て人を欺むく、雪峯和尚は色々なことをして人を馬鹿にする、盡大地を粟米粒大であるなどと言ふさへ餘計なことであるに、其れを面前に抛向すると云ふやうな手品を使ふたり、また漆桶不會などと云ふて人を欺くと云ふものは勢ひに任せると云ふものちや、何の漆桶不會なことが有らうぞ、春になれば毎年百花爛漫と咲いて居る、十五夜の晩には毎月月が圓くなる、其れが見えない者があるものか、自領出去お前は自分で見えないと云ふなら御自分の御勝手にお持ち歸りなされ、如何に大衆が幼稚であるからとて餘りに諷して侮どらないが宜しいと云ふた、普請看の下に瞎とある瞎は盲目ちや、普請して看よと云ふたからとて其んなものを見る目は持たぬ、鼓を打てと言はるゝけれども鼓を打つといふことは三軍の爲めなり、ソレは戦争の時にこそ打つものよ、祖師門下は元來泰平ちや、鼓などを打つ用は無いぞと云ふアンバイ、圓悟の見やうは先づ斯うちや、雪竇禪師はドウ見たぞ。

頤牛頭沒閃電相似○馬頭回如擊石火曹溪鏡裏絕塵埃打破鏡來與汝相見○須是打

得始破打鼓看來君不見刺破汝眼睛○英輕易好處百花春到爲誰開法不二相鏡

○一場狼籍○葛藤窟裡出頭來

牛頭沒馬頭回は六言一句ぢや、又は三言二句と見ても宜しい、牛頭と云ひ馬頭と云ひ没すると云ひ回ると云ふ、皆兩端に迷ふ有様を言ふたものと見える、盡大地とか粟米粒とか生死とか涅槃とか還相とか往相とかトカク兩端に涉りたがるのが世の中の有様であるが、其れを面前に抛向するやうす間に髪を容れぬ、ソコで圓悟は閃電に相似たり撃石火の如しと着語した、分別に涉る暇は無いぞと云ふ、雪竇が没するとか回るとか云ふ、其の口うらに附いて廻ると蹉過了ぞ、ドコに没するものがあるドコに回るものがある、見んと擬すれば蹉過了ちや、曹溪鏡裡に塵埃を絶す、曹溪の鏡と云ふは彼の本來無一物何の處にか塵埃を牽かんと云ふた鏡ちや、この鏡には元來塵埃を絶して居るに依つて、牛頭も馬頭も月も花も歴々分明に能く見ると云へば又その鏡と云ひ絶塵と云ふところに取り附くものが有らうかと圓悟が心配して鏡を打破し來れ汝と相見せんと注意した、更に御丁寧にも須からく是れ打破して始めて得べしと云ふてあるが、この着語は無くもがなと思はれる、或は後人が鏡を打破し來れで講釋を聴きながら書き入れでもしたものが混入したのかも知れん、鼓を打て看せしめ來るに君見えす、曹溪鏡裡には歴々分明であるけれども、其れを見とめ得ぬものが多いに依て雪峯は鼓を打て普請して看よとまで、老婆心切を盡されたけれども、矢張り見えぬものには見えぬ、如何にも残念なことでは無いかと云ふやうに雪竇が言はれたのである、其れゆゑ圓悟が



其れを吾々に紹介して汝が眼睛を刺破す、それ貴様だちの目の先きにと注意してくれられた上に輕易にすること莫くんば好しと云ひ、又漆桶什麼の見難き所か有らんと云ひ重ねの注意ぞ、尤も漆桶什麼の見難き所か有らんと云ふ着語は、雪竇が君見えすと云ふたのに向つて何の見えんことが有らうぞと云ふたと見ても宜しい、百花春到りて誰が爲めに開く、雪竇の慈悲深さ、見よと云ふても見えぬなら、それ見せて遣らうかと云ふので、到頭樂屋を打ち明けて、百花春到りて誰が爲めに開くと云ふてしまふた、ドウぢや春の百花は牛頭と開くか馬頭と散るか、迷か悟か佛か衆生か、法相饒さすと圓悟が着語した、相饒さすと云ふは餘計なもの無いと云ふことぢや、山は高く水は長し一切諸法餘計なもの無ければ足らぬところも無いぞ、一場の狼藉これは雪竇があまりに説き過ぎるのを咎めたので、何と云ふ取り亂しやうぞと云ふやうなアンバイ、葛藤窟裡より出頭し来る、コレは雪竇の頌の文彩を賞美したので有らうと申すことぢや實に雪竇は翰林の才ありと世間の學者達にも評判された人であると云ふことであるが、文字を扱ふことが誠に自由であるから、向上の宗乗を何の苦も無く面白く言ひ顯はされる、しかし獨りで読んで居れば誠に面白けれども之を講釋させられては其文字の面白いところほど其講釋が面白く無くなる、ソコのところを能く／＼吞込んで居て聞いてもらはんでは甚だ不本意のことに成る、且つまた圓悟の着語の中には餘程おかしなものが混入して居るかと思はれるのが有るから、其の積りで聞いてもらはんければならぬ。

第六則 雲門十五日

本則 舉雲門垂語云十五日已前不問汝道裡不問汝舊曆日十五日

日已後道將一句來來日免從朝至暮自代云日日如流々是好

日風收〇鰓跳不出斗誰家無明月清

此一則は圓悟の垂示が無くて直に雲門の本則です、雲門大師は諱を文偃と申して雪峰禪師の法を嗣がれたが、門下に洞山の守初だとの徳山の縁密だの香林の澄遠だのと云ふ歴々の人が多く有つて、遂に一家の規模を立てたに依つて、禪宗五家と稱する中の雲門宗の高祖と仰がる人であり、此人は最初に睦州道蹤禪師に參禪しましたが、睦州は甚だ險峻な師家で誰でも參禪の人さへ來れば直に捉まへてサア言つて見るとイキナリに突掛る、ソコデ狼狽すれば直に室外へ押し出して秦時の轆轤と言つて罵る、秦時の轆轤といふのは、秦の始皇が阿房宮を建てた時の道具のことで今の用に立たない奴ぞと云ふことださうな、雲門も參禪に往くたびごとに例の如く押し出されたが、三度目に往つた時に門の戸をコツ／＼叩くと、睦州が内から誰だと云ふから文偃でありますと云ふ、睦州が少し門の戸を明ける雲門が飛び込む、睦州はイキナリ雲門を捉まへてサア言つて見る、雲門はモゴ／＼するうちに例の通り押し出して門の戸をピシヤリと閉めたが、其時雲門の片足がまだ室内に在つたから堪らない、雲門は痛い／＼と叫びながら忽ちに悟



が開けたと云ふことです、筒様な手殿しい師家の爐竈で鍛へられたので有りますから、後に自分が人を接する時にも他の師家とは大に様子の變つた所があつて、即ち一宗の高祖とも仰がれることにも成つたので有りますが、此垂語は亦た其平生の様とも違ふて誠に愛敬のある言ひやうで、雪竈も餘程面白く思ふたものと見え骨を折つて頰を作つて置かれた、十五日已前は汝に問はず十五日已後一句を道ひ將ち來れ、大慧禪師の説では之は四月八日の釋尊降誕會に雲門が上堂して此垂示をせられたので有ると云ふことぢや、ソコで十五日と云ふ中に八日と云ふことも含んで居るとか、イヤ釋迦誕生以前以後と云ふ意味で有らうとか色々ツキ廻つたことを云ふ向もあると云ふことであるが、十五日が二十日でも三十日でも何日でも好い、固より日で無くても好い、昨年已前は汝に問はず今年已後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い、過去以前は汝に問はず現在以後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い、大悟以前は汝に問はず却迷以後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い有頂天以上は汝に問はず無間地獄以下一句を道ひ將ち來れとも見るが好い、横からも見る堅からも見る、ソコで何とか言つて御覽と云ふのであるが、サスが雲門門下の衲僧だちも忽卒に口を開くことが出來ぬから、誰も何とも言ふ者が無かつたと見える、已むを得ず雲門大師自から代つて曰くとある、此の代語と云ふことは此後どの宗匠にも幾らもあるが、是れが其の濫觴であると聞いて居る、垂示と云ふことも別語と云ふことも雲門以來であると云ふことぢや、其んなことはドウでも好いが、雲門の代語は何と言ふた、何ぞ格別に驚くやうなことで有らうか何も驚ろくやうなことの有らう筈がない、日々是れ好日、この語を圓悟が評して此語古今を通貫す従前至後一時に坐斷すと言ふてある、然しながら

此れも復た語に隨つて解を生じたので、終に道理を作せば抗に墮ち墮ち落つる、ナゼかと云ふに雲門の語は一句の中に衆流截斷の句と函蓋乾坤の句と隨波逐浪の句とが備はつて居るぞと圓悟が言はれてある、結局理致が分つただけでは何の詮も無い、日々是れ好日と云ふたからとて、天地未開以前に何の日が有つたぞ、劫火洞然として大千俱に壞し去つた時に何の日がある、雲門の口先にのせられぬやうにせねば成るまいがソコは人々の工夫のしどころよ、圓悟の着語に十五日已前不問汝の下に半は河南にして半は河北とある、河と云ふは黄河のことで、其南北と云ふはアチラコチラと云ふほどのこと、雲門の語に以前とか以後とか云ふのが兩端に跨がつた言ひやうで言中に響があるぞ、這裏舊曆日を收めず這裏と云ふは圓悟の手許、舊曆日と云ふは古い曆本、去年の曆は今年の役に立たぬからソんな物は貯はへて置かぬに依て十五日以前だの十五日以後だのと云ふ曆の御相談は御免かふむると云つたやうなアンバイ、道將一句來の下に免かれず朝より暮に至る十五日以後もヤハリ朝から晩までよ、日は朝々東に上り月は夜々西に沈むのよ、何の不思議が有らうぞと云ふた、とは云ふもの、十五日以後と云ふ口車にのせられて明日は十六日で御座るなと云ふまいぞと、是よりは圓悟の婆心で吾々に注意してくれられた、月日は流るゝが如し少しも停滯は無いぞ、以前だの以後だのとドコで隔てを附けるぞと云ふたのと見える、日々是好日の下に收とある只此一句に無始劫來未來水劫を皆收藏して遺す所は無い鍛跳れども斗を出でず、誰が何と云つても此一句の外に出ることは出來ぬぞ、とは云ふもの、敢て珍らしいことでも無い、雲門にばかり言はせて置くわけでは無からうと云ふので誰が家にか明月清風なからんと著語した、然し明月清風はドコにもあるイツでもある



けれどもソレが見えんでは致し方が無い、盲者の見ざるは日月の咎に非すと云ふので還て知るやと門下に注意した、然るに世間一般の有様では海神の貴きを知て價を知らざる如くぞと誠められた、此れは海中に珊瑚珠のやうな貴い寶物を持つて居ても、只貴いと云つて海底へ藏して置いただけでは其價値が知れぬと同様で、只この公案の言句に付き廻つて雲門の垂示は別段であるとか、日々是好日鐵櫬子で齒がたゝぬとばかり云ふて居た日には何にも成らぬぞと云つて、實參實究を勸誡せられた、サテ次に雪竇の頌は

頌 去卻一七穿八穴拈得七拈不出上下四維無等匹似何

生〇上是天下是地〇下東西南北與〇四徐行踏斷流水聲〇打入葛藤窟裏〇去了也〇難爲體究〇一

縱觀寫出飛禽跡見裏亦無〇此消息〇野窟裏艸茸茸〇後拔〇隨在平實處〇一烟

冪々〇未出〇道窠窟〇生空生岳畔花狼藉〇在什麼處〇不唧彈指堪悲舜若

多〇四方八面〇盡法界〇向舞〇若多鼻莫動着〇前言〇在如何動著三十棒〇自領〇出去

雪竇の宗眼明徹なることは言ふにも及ばず、其文才の縦横なることも百則の頌古いづれオロカは無いつれども、中にも此頌などは聲朗らかに吟じて見れば何とも言へぬ妙味がある「一を去却し、七を拈得す、上下四維等匹なし、徐ろに行て踏斷す流水の聲、縱まゝに觀て寫し出す飛禽の跡、艸茸々、烟冪々、空生巖畔花狼藉、彈指して悲しむに堪えたり舜若多、動著すること莫れ、動著すれば三十棒」ドウも不立文

字の上に建立した文字は又格別な味ひがある、第一句は三言ぢや、一を去却し七を拈得す此句を十五日以前と十五日以後に配當してはツマらんどと圓悟が云ふて置いた、實に其通りであるけれども、一體に雲門が以前以後と兩端に掛けて言ふたものだから、雪竇も亦た兩端に掛つたやうな事を言ふて、そして其兩端を拂ひ徐けた、概を以て概を抜くと云ふ手段ぞ、一を去つたと言へば直に七が出る、一とも七とも言はれまい、日が西山に傾いたと思へば月が東山に上る、此の間に以前以後の論量は入らぬ、雲門の日々是好日に十五日以前もなければ十五日以後も無い只是れ日々是好日ぢや、さりながら十五日は十五日よ十六日は十六日よ其れがソツクリ日々是好日ぢや、畢竟差引勘定するには及ばない、ソレだから上下四維に等匹は無い、寒山の詩にも「吾心秋月に似たり、碧潭澄んで皎潔、物の比倫に堪えたるなし、吾をして如何が説かしめん」と云ふのが實に日々是好日の風光、吾をして如何が之を説かしめん、天地の間に等匹の物が無いに依つて何とも譬へやうも無いと云ふのぢや、コレで本則の頌は濟んだのでアトは例の雪竇が文才を弄する所で日々是好日の風光を提唱讃歎する、徐に行て踏斷す流水の聲、縱まゝに觀て寫し出す飛禽の跡、此二句一對は縱跡の無い處に縱跡を示す景狀を吟詠せられた、其句の意は如何ほど脚の達者な人でも水の流れる聲を踏み斷つと云ふことは出来まい、然るに今雲門の日々是好日と言ふたのは格別に脚に力を入れるでは無い、徐々として行動する時、浩々たる流水の聲も亦た應に踏斷すべしと圓悟は注釋を下された、サテ如何ほど畫を上手にかく人でも禽の飛ぶ跡を寫し出すことは出来まい、然るに今雲門の日々是好日と云ふたのは其の禽の飛ぶ跡を自由に看破して分明に寫し出したやうなもの、圓悟は目



を縦まゝにして一觀するとき、儼ひ是れ飛禽の跡をも亦た寫し出たすが如く相似たりと云ふてある、箇様にばかり申したならまた日々是れ好日の句にのみ取附いて行く人もあるかも知れず、また雲門の事とばかり他に譲る人もあるかは知れぬが、コレは雲門にばかり任せて置くべきことでは無い、日々是れ好日と云ふ言句に拘はつたことでも無い、人々各自に煩悩生死とか、菩提涅槃とか、悟りとか迷ひとか云ふて居る道中筋の山も川も足に任せて自由に奔走し、目に任せて自在に見渡すことが出来んでは何の所詮も無いことよ、それ故に圓悟は人多く末を逐ふて其本を得ず、先づ本正しきことを得れば、自然に風行けば草偃し水到れば渠成る。這裡に到つて鑊湯熾炭の地獄の火もフツト吹いて滅し、劍樹刀山の奈落の責道具もカアーツと一喝すれば皆メチャ／＼に摧けてしまふと云ふことにも成るのぢやと云ふてある、然し箇様にばかり云ふたなら理路ばかり辿り歩く者もあらうかとて更に雪竇の大慈悲心からチラリと目先をかへて艸茸々々煙霧々と前の風景を一言に引つくり返してしまふた、茸々は字典に草の多く生へた貌とある、霧々は物を掩ひ藏すかたちぢや、草は茫々と生ひ茂り大蛇でも出さうな有様、烟は幕を張つたやうに立ち籠めて一寸先は少しも見えぬ、之は一體誰のことであらうぞ何のことと有らうぞ、トカク世の中には早く極樂へ往つて如來さまの御弟子に成りたいと云ふ人は有つても、寧ろ地獄へ往つて赤鬼青鬼の師匠にならうと願ふ人は無いやうなもので、流水の聲を踏断したり飛禽の跡を寫し出したりする明白底の風景を愛す人は多く有つても草茸々々煙霧々の間に一段の光景を弄する人は少ないと云ふことぢや、コ、の様子を教家流義に講釋すれば前の流水飛禽の一對は眞空中に妙有あることを示し、草茸々々煙霧々は妙有中に眞空あることを示されたのち

や、ソコで或は復た空見に落ちては成らぬと云ふ注意から次の句の空生巖畔花狼藉が出て來た、空生と云ふは釋尊十大弟子の中で解空第一と言はれ空理を解することに妙を得たと云ふ須菩提尊者のことぢや、此尊者が或る時に或る處の巖中に坐禪をして頻りに空理三昧に入居られる所へ帝釋天が出掛けて來て華を雨ふらせて讚歎した、ソコで須菩提が之を見答めて華などを降らせるのは誰ぢやと云ふた、帝釋は之に答へて我れ尊者の般若を説くを重んずるに依て花を散らして供養讚歎すると云ふ、須菩提は只坐禪して居ただけのことで般若も何も説いた覚えが無いから、我れ未だ嘗つて一字も般若を説かぬ、何故に汝は其れを讚歎するや、ソコで帝釋の言ひやうが面白い、尊者無説、我乃ち無聞、無説無聞是れ眞の般若と云つてまた大に花を雨ふらせたと云ふ故事がある、其れを今雪竇が引いて來たので、須菩提は解空第一には違ひないけれども、謂ゆる偏空で妙有を知らぬから、空は空でも眞空とは言はれぬ、それだから帝釋などに親はれて華の雨の御馳走などに預かる、之れが眞實に眞空妙有片落のない大菩薩であつたなら帝釋などが冷かしには來ぬはずぢや、彈指して悲しむに堪えたり舜若多、この舜若多と云ふのは天竺の古俗に謂ふ虚空の神と云ふことで、虚空を以て身體として居るから虚空の外に身の無い神であると云ふことぢや、ソコで雪竇が前の須菩提と云ひ帝釋と云ひ又この舜若多と云ひ、只に空と云ふ方へばかり片落して居るに依つて彈指して悲しむに堪えたりと言はれた、彈指と云ふは指をパチリとハジクことで、人などを驚かしたり氣を附けたりする時にも彈指するが今は不淨彈指と云ふて穢らはしい物を見たり聞いたりした時に其れを拂ひのけるために彈指するので、サテもサテも偏空に片落して居る悲しさよと云ふところから彈指せられたの



ぢや、然るに彼の舜若多も佛の光明に照らされると直に其身體が顯はれると云ふことであるが、吾々も偏空の二乗根性では到底致し方が無いが、佛光明にさへ照らされば直に本身が顯はれる、然るにトカク十五日以前と云へば以前に取り付き、十五日以後と云へば以後に取り付き、有と聞けば有に落ち、空と聞けば空に落ちるから、雪竇老人が頻りに氣をもんで色々のことを言ふたが、ドウ落着を附けたもので有らうぞ、コ、でウロツクと地獄の釜の底へまつさかさまぞ、動著すること莫れ動著すれば三十棒、と慈悲片々たる勸誡ぞ、動著と云ふは心のピクシヤクすることであるが、動著するなといふたからとて死灰枯木のやうに成れと云ふのでは無い、尤も一度は無心無念離相絶對の所に入ることも有らうが、更に百尺竿頭に一步を進むるとき絶後に蘇生し來つて大活用を得る、其際に動の不動のと云ふ論量は入らぬ、サテ雪竇の頌を圓悟が何と評した其著語を調べて見やう、去卻一の下に七穿八穴とある、一を取りのけたと云ふから穴が七つも八つも開いたぞと云ふて雪竇の手段を讚歎した、何の處に向て去る、一を去つたと云ふがドコへ其一を持つて往つたか行先へ氣を附けると云ふアンバイ、これは門下への注意と見えるが、一體に一にもせよ七にもせよ取りのけべき物が有らうか有るまいか、六祖は何の處にか塵埃を惹かんと云ひ、南嶽は縦ひ將ち來るも著る處なしと云ふたぞ、一著を放過すとある、此れは碁を打つときに、相手に油斷させるためにチョイと一手をユルめるのださうな、雪竇の口先にウカリと油斷はならぬぞと云ふたやうに見える、拈得七の下に拈不出とある、七を拈得すと言はしやるけれども七どころで無い一つも拈じ出だすことは出來まいぞと云ふのぢや、拈じ出し得ぬのでは無い、元來拈得すべきものが無いのよ、又却て放過せずとあ

る、前には一を去却すなどと云ふて一著を放過するかと思ふたに、直に七を拈得すなどと反對なことを言ふて中々放過せぬ様子ぢや、イヤハヤ自由自在に勝手なことを云ふから頓と窺ひが附かぬぞと云ふやうな調子、上下四維無等匹の下に何似生とある、等匹が無いと云ふなら何に似て居るぞと云ふのぢや、月に似てるか鼈子スッポンに似てるか、承陽大師は鳥飛で鳥の如く魚行て魚に似たりと云はれたこともあるぞ、上は是れ天、下は是れ地、東西南北と四維と此れで謂ゆる十方であるが、皆各々個々獨立で何の等匹も無い天は天に似て地は地に似て居るまでのことよ、然しながら正偏回互して如何と見れば、庭の築山ツキヤマが富士の山に似て居て華嚴の瀑布ハツホが牛の小便に似て居るぞ、争奈イカンせん拄杖我が手裡に在り、拄杖と云ふは長さ七尺あるのぢや、マゴくするとドシンと擲ぐるために圓悟の手にチャンと持つて居る、ソコで此七尺の拄杖と雲門の日々是れ好日とは等匹せぬかドウぢやと云ふたやうなアンバイぢや、除行踏斷の下に脚跟下を問ふことを莫れと云ふ踏むと云へばとて直に脚のことばかり思ふては成らぬぞ、手でも行き頭でも踏まねば自由がきかぬ喫茶喫飯糞尿アシホウネウ放尿ホウネウみな是れ流水の聲を踏斷するので無ければ、茶に吞まれ飯に食はれると云ふものぢや、然しコ、の所が中々チョイとの仕事で無いぞと云ふので體究を爲し難しと言はれた、これ等の着語は皆圓悟が吾々に向つて拈提して見せられたので、其次の葛藤窟裡に打入し去り了れりと云ふのは雪竇に向つての言ひぐさよ、モハヤ本則の頌は澤山であるのに色々と文筆を弄して葛藤窟裡に飛込んで何とするのぢやと云ふたやうな調子ぞ、縦觀寫出の下に眼裏に亦た此消息なしとある、縦觀とは云ふもの、眼裏に於て觀るの觀ないのと云ふ沙汰のあるべきでは無いぞ又野狐精の見解と云ふた、雪竇が色々な手品テウナを使ふに



依つて、此の老野狐に魔魅されてはイカンぞと學者に注意しつゝ雪寶を抑揚した、又依然として只舊窟裏に在り、コレは全く雪寶を抑へて色々文才を弄しつゝ落草の手段を用ゐるのを冷評したものと見え、艸茸々の下に腦後に箭を抜くとある、之は支那の五代の時に王殷と云ふ人が杜重威と戦かつて矢が腦後に中つて矢鏃が口から突き出したけれども、其矢を直に引き抜いて敵へ射かへしたとか云ふ故事があるさうな、必死の所を助かつたと云ふことで、今雪寶がガラリと局面を一變させて艸茸々と云ふた有様を形容して讚歎したのぢや、更に是れ何の消息ぞと云ふのも、イヤ案外なことを言ひ出したぞと云ふやうなアソバイ、平實の處に墮在すと云ふは、何も不思議のことは無い、コレが雪寶の平生の持前でソコが即ち凡聖に落ちぬところぞ烟羅々の下に未だ這の巢窟を出でずとある、前の艸茸々と此の烟羅々と同じであらうが違つて居やうが、圓悟は舊窟を出でぬと云ふたぞ足下雲生すイヤハヤ雪寶は自由自在にドコでも奔り廻る人であると讚歎した、空生巖畔の下に何の處にかある其空生と云ふものがドコに居るぞと咎めて、花狼藉の供養などに預かると云ふはイカにも不啣喙の漢よと空生を抑へ、遂に勘破了也と云て偏空に落ちて居る空生を彈呵し盡した、之は他の須菩提尊者の事とばかり思ふては居られぬぞ、彈指堪悲の下に四方八面盡法界とある、之は舜若多即ち虚空神の有様を言ふたが彈指の音も悲しむ聲も亦たヤハリ盡法界であらうぞ、然し悲しんで居るよりは舜若多の鼻の孔の裡に向て一句を道ひ將ち來れ、此の偏空に沈落した所から活機輪を轉じ出して見よと云ふのぢや、活きた一句が言ひ得られて諦當で有つたなら、即ち舜若多が活きて働くのよ、何の處にか在る其の舜若多とか云ふものが、一體ドコに居るのぢやと門人に一撈し

た、莫動着の下に前言何くにか在る、コレは全く雪寶を咎めたので、お前は人に向つて動着するなと言はれるが、先刻からお前こそ動着しぬいて居るでは無いか、一體に動着すれば何故悪いのぢや動着する時如何サア動着したがドウするぞと突き込んで雪寶が、三十棒と云ふ其言下に自領出去、三十棒ならお前こそ自分で受けるが好いぞと言ひながら、ピツシヤリと便ち打つた、コ、ラの着語には一分も隙がない、圓悟の腕力はコンな所でチラリ／＼と見てゆかねば成らぬ。

第七則 法眼答慧超

垂示聲前一句。千聖不傳。未曾親覲。如隔大千。設使向聲前。辨得截斷。天下人舌頭。亦未是性燥漢。所以道天不能蓋。地不能載。虚空不能容。日月不能照。無佛處獨稱尊。始較些子。其或未然。於一毫頭上透得。放大光明。七縱八橫。於法自在。自由信手拈來。無有不是。且道得箇什麼。如此奇特。

復去大衆會麼。從前汗馬無人識。只要重論蓋代功。今事



且致雪竇公案。又作麼生看取下文。

此垂示は中々長いが、眼目とする所は無佛の處、獨り尊と稱すと云へる六字に在るかと思はれる、先づ冒頭に聲前の一句と提起した、凡そ言句と云ふものは先づ音聲にあらはれて、次に文字に寫し出されるもので有るが、今は其音聲と云ふものゝ未だ無い前の一句と云ふのぢや、コレは如何なる言句で有らうぞ、三世の諸佛のまだ出世せられない前に八萬四千の法門があるが、其れを禪宗の套言に那一句と云ふ、其那一句は本より誰れも説いたことも無ければ教へたことも無いから、千聖不傳ぢや、聖と云ふは佛祖のことで、即ち千聖と云ふは三世の諸佛も歴代の列祖もと云ふことになる、聲前の一句は諸佛も列祖も傳授すること出来ぬと云ふのぢや、ナゼかと云ふに那一句は人々各自冷煖自知するより外に致し方は無いからのことよ、未だ親觀せざれば大千を隔つが如し、親觀の觀の字は諸侯が天子に朝拜するのたさうなが、今は只相見と云ふことに見れば宜しい、何者に親しく相見するや自家の獨尊佛に親しく相見せんければ、大千を隔つるが如くに遠くして遠い、大千と云ふは三千大千世界と云ふことを略したので、佛教では十方三世の一切諸佛と云ふて佛と云ふものが限りも無く多くあるが、其佛が一佛毎に一國土を化土と定めて其一國土と云ふのが即ち三千大千世界であるが、先づ此に一つの須彌山と云ふ山が有て其山の四方に地球のやうなものが四つあるのを一須彌界と云ふ、當節の言葉で云ふたら一つの太陽系と申しても宜い、サテ其太陽系を一千あつめたのを小千世界と云ひ、其小千世界を更に一千あつめたのを中千世界と云ひ、又中千世界を一

千あつめたのが大千世界ぢや、即ち小千と中千と大千と三つあつめるから三千世界とも又は三千大千世界と重ねても云ふ、十呂盤の達者な人は勘定して御覽なさい、何でも一萬億ほどの太陽系を一つにしたのが大千であらう、其れが即ち一佛の化土であると云ふことぢやが、阿彌陀如來の極樂世界までは其一佛土を一つや二つでは無い、十萬億の佛土を隔つとあるから、何ともハヤ心も言葉も及ばない遠い話よ其れを今は大まけにまけて大千を隔つが如しと言はれた、然し親しく自家の獨尊佛に相見さへすれば、觀無量壽經に阿彌陀佛は此を去ること遠からずとある如く脚下も頭上も皆佛土よ、然らば其那一句を聲前に向て辯得して天下人の舌頭を截斷すると、三千諸佛の未だ口を間かざる以前に那一句を辯明し得ることが出来たのみならず、世の中の都べての人にも口を開かせぬと云ふ力が有つたなら其れで好いかと云ふに圓悟老人は決して許さない、亦た未だ是れ性燥の漢ならずとある、性燥と云ふは性質の鋭敏なことを云ふので伶俐と云ふも同じことであるから、中々まだ伶俐の漢とは許さぬぞと云ふのぢや、ナゼかと云ふに聲前と云へば聲前に付き廻つて辯得たの不辯得たのと云ふのがハヤ第二第三ぢや、サテ吾人本分の事と云ふものは簡様なわけであるに依て故に道ふ天も蓋ふこと能はず地も載ること能はず虚空も容ること能はず日月も照すこと能はずとある、法性法身の如來さまは天地日月よりも廣大なくらゐるでは無い、十方虚空もまた法身佛の鼻の穴の片隅よ、サア此に至て其法身佛もまた無い處が即ち無佛の處ぢや、無佛の處は本より無衆生の處よソコで獨り尊と稱すとある何を相手に尊だの卑だのと云ふことで有らうぞ、其れは各自の參究に任せるとして圓悟は是れでこそ始めて些子に較れりと云ふた、少しは許せるぞと云ふのよ、先づコゝまでは元



來佛だの法だのと問ふべきものではないぞと云ふことを示して、本則の慧超の問話を豫かじめ論評せられたものと見える、然しながら己に言句にあらはして如何なるか是れ佛と問ひかけた上にはと云ふ所から更に一線路を開いて、其れ或は然らざればと緩みを付け、サテ一毫頭上に誘得して大光明を放たねば成らぬぞと云ふた、前の一段では實に一毫を立つる餘地もないが、コ、に少しく血路を開いた所で一毫頭と云ふたのは、暗に本則の法眼の答話を示したものと見える、汝は是れ慧超と云ふ一言の下に忽ち大光明を放つ、大光明と云ふは大智慧と云ふことよ、七縦八横一切諸法の上に於て自在自由ならば手に信せ拈じ來りと不是あること無し、如何なる事に出合ふてドンなことを仕やうとも、如何なる時に臨みてドンなことを言はうとも御勝手次第ちやと云ふのよ、且らく道へ箇の什麼を得てか此の如く奇特なる、一體コレはドウ云ふわけかと門下の者に向て復た云く大衆會すやドウちや、一同は合點が往つたかと移着した、復云と云ふ二字は記者の辭で、此時に圓悟が前の垂示を言ひ畢つて一段落を付け、更に端を改めて又言ひ出された有様を書きあらはした、ソコで圓悟が従前の汗馬、人の謬る無し只要す重ねて蓋代の功を論ずることを言ふた、之は武將の軍功に譬へて佛祖の修證に骨を折られたことを示されたのちや汗馬は馬に汗をか、せたことで、三世の諸佛も歴代の祖師も皆命がけて煩腦塵軍と戦つたことは實地を踏んだことの無いもの識らぬことで有るが、能く従前の軍功を調査して見るが好い、實に蓋代と一世を蓋ふほどの功のあることぞと云ふて、暗に慧超が一言下に大悟したのを豫言したものと見える、然し表向は従上佛祖の事を云ふたものとして即今の事は且らく致く雪寶の公案また作麼生、ソレはさておき此に又……と云ふたやうな具

合、致の字は、置の字と普通でオクと讀ませる、下文を取らせよと云て本則を呼び出した。

**本則** 學僧問法眼道二什麼 慧超咨和尚如何是佛道二什麼 法

眼云汝是慧超依二機 就身打劫鐵

法眼の文益禪師は五百人の善知識と稱された人で、常に五百人以上の衆僧が從學して居たと云ふことぢや、其中の一人で慧超と云ふ人が或る時の問答に慧超、和尚に咨如何なるか是れ佛と問ふた、サア此の佛と云ふのは一體何佛であらうぞ、木佛か金佛か、乃至法身か報身か、然し如何なるか是れ佛とも問はず又如何なるか是れ杓子とも問はず、いかめしくも如何なるか是れ佛と問ふた、コレには慧超も従前幾多の光陰を費やし參究工夫に力を入れたことであらうが、圓悟は問法眼の下に直に着語して什麼と道ふぞと答めた、元來他人に向つて問ふべき事の無いはずでは無いかと云ふのぢや、然るに何やら問はうとするのは擔枷過狀と云ふものよ、枷は手カセ足カセなどと云つて罪人を束縛する器機ぢや其れを自分から擔つて過狀は罪狀と云ふも同じことで罪過を白狀することよ、我國の俗諺に「言ふに落ちず語るに落ちる」と云ふことがあるが、其れと同じことで人に物を問ふと云ふのがハヤ無佛の處に獨り尊と稱することの出来る者で無いと云ふことが自づと知れるぞと云ふのよ、如何是佛の下にも又什麼と道ふぞと着語した、問ふことに事を缺いて佛を問ふと云ふは何としたことぢや、然るに自分では一所懸命の間であるから眼睛突出と目の玉が飛び出したやうな具合、鴨が螺螄を丸呑にしたやうな有様ぞと愚弄した、然しながら誰にもせよ此



の如何なるか是れ佛と云ふ問題が明らかに答辯し得られて妥當で有つたら、謂ゆる七縦八横自由自在手に  
信せ拈じ來りて不是あること無しと言はれるのぢや、理論や義解では何とでも言はうけれども實地に釋然  
たることは容易で無いと云ふことぢや、然るに法眼禪師は聲に應じて平氣に答へた、何と答へたぞ、汝は  
是れ慧超、これが即ち千聖不傳の那一句ぞ、法眼禪師には此のやうな答が多いと云ふことぢや、或時の上  
堂に或僧が如何なるか是れ曹源の一滴水と問ふた法眼が之に答へて是れ曹源の一滴水、この答も今の答へ  
も同じやうな答へかたぢや、然るに今の答を義解して佛と云ふ者は外に無い汝が即ち佛よといふ意味で、  
汝は是れ慧超と答へられたので有ると云ふ者もあるが、法眼には其の様な思慮分別を入れた言句は無いの  
よ、只是れ汝は慧超と云ふので有る圓悟は横に依て脱出すと着語した、例の啐呀同時に間に髪を容れぬ答  
へぶり、法眼和尚の紋切形よと云ふたアンパイぢや、其れが直に鐵餤餤ぞ、鐵餤餤と云ふは鐵でこしらへ  
た餤頭と云ふほどのことで沒滋味なと云ふこと又齒のたぬ様子を云ひ顯はした、就身打劫と云ふ着語に  
二説ある、一説は碁の手に打替と云ふことのあるのを云ふのぢやと云ひ、又一説には身に就て劫やかすと  
云ふので有るから巾着切とかチボとか云ふ類のこと有らうと云ふので有るが、何れにしても法眼の答に  
一分も隙の無い所を讚歎した辭と見える、人々各自に汝は是れ某と參究して佛と汝と是れ同か是れ別かと  
工夫し、又或は如何なるか是れ某と問ふて、汝は是れ佛とも答へて見るが好い、サテ又雪竇は何と云ふた  
ぞ、願に曰く

頌 江國春風吹不起

消息大地那裏得這鷓鴣啼在潑花裡又被風吹別

調中○登二級浪高魚化龍通這一路○莫慢天癡人猶辱夜塘水摸一壁○接門傍○納僧

此の頌は七言四句即ち絶句の體ぢや、例の如く前の二句で本則の頌は済んで、三四の二句は此本則を邪解  
する者の小言よ、一二の二句を二つに分けて慧超の間と法眼の答とに掛けて見たりする説もあるけれど  
も、圓悟は二句を一句にして見よと云ふて置かれた、謂ゆる宛轉回互して言外に眞意を悟らねば成らぬと  
云ふことぢや、然し一往は文字の意味だけは分らねば成らぬが、江國と云ふは揚子江の南の方はゆる江  
南と申す所で春さきに尤も景色の好い處と見える、向島の春風でも東山の春風でも好いのよ、春風は天地  
の間に充ち満ちて居るが未だ吹き起たぬぞ、春風は吹き起らんでも鷓鴣は面白く啼いて居る、鷓鴣は啼い  
て居るけれども深花裏に在て形は見えぬ、形は見えんでも聲はタシカに聞える、聲はタシカに聞えるけれ  
ども風は未だ吹きたぬ、風は吹き起たんけれども春風は已に十分ぢや、此事を般若心經には色即是空々々  
即是色と説いてある、參同契には「明暗各相對して比するに前後の歩の如し」とも云ふてある、法眼門下碎  
呀同時の機鋒で、如何なるか是れ佛、汝は是れ慧超、江國の春風吹き起たず鷓鴣啼て深花裏に在り、只こ  
の通りの端的よ、繰り返して朗吟して見るが好い、自分で吟じて自分の耳に聞くうちに獨りニコリと笑ふ  
所が無ければならぬ、其れを江と云ふは水の流れる所で、國と云ふは其水を載せて居る所ぢや春と云ふは  
物の發育する時で、風と云ふは動搖の姿であるなど云ふやうに、賣卜者が易學小筮を研究するやうなこ



とを幾ら云ふて見たからとて、何の役にも立つことでは無い、圓悟が第一句に盡大地那裡に這の消息を得たると着語してある、元來春夏秋冬など云ふ沙汰は無いはずであるに、春風が吹くとか吹かぬとかドコから其様な音信が有つたのぢやと聞き咎めた、又文彩已に彰はると云ふた、雪寶は吹き起たぬと云はれるけれども、春の色どりはトウに十分に彰はれて居るぞと云ふたの見える、第二句に喃々何ぞ用ひん、喃々と云ふは鷓鴣の聲を形容したので、鷓鴣の啼く聲を聞いて初めて春を知るにも及ばぬはずぢや、圓悟などは鷓鴣の喃々に御用は無いぞとの言ひぐさよ、又風に別調の中に吹かる之は全く法眼の汝は是れ慧超と答へた妙處を讃歎して、さすが法眼禪師はまた別段よと云ふたの見える、又豈恁麼の事あらんや其様なことは無いはずぢやかと云つて、人の鷓鴣だの深花裡だのと云ふ聲色中に狼狽するのを奪ふた、第三句は三級浪高うして魚龍と化す、コレは龍門の故事で河南府の龍門縣に龍門山と云ふがある、夏の禹王がソコの瀑布を三段に切り落して水を排除したと云ふ所から、禹門とも三級とも云ふのであるが、俗説に毎年三月の三日に鯉が其瀑布を溯ぼりて龍門を透り抜けることが出来れば角が生えて龍に成る、若し途中で力が盡きて登り得ぬものは點額して回ると云ふことが有る、今其れを引いて來て僧の慧超が法眼の一言下に、汝は是れ慧超と聞く、碎呀同時に豁然として悟りが開けた所を形容して三級浪高うして魚龍と化すと言はれた、それ故に圓悟の着點に大衆を慢すること莫んば好しとある、元來龍でないものは有るまい、然るに今さら魚が龍に化したなど、人を馬鹿にしたことは言はぬが好いぞと雪寶へ突き掛つて置いて、更に龍頭を踏著すと自家の見識を述べられた、其の魚の化したと云ふ龍は、雲に乗つて虚空はるかに飛び去るかと云ふ

に、現に圓悟の脚下に踏み附けてあるぞと云ふのぢや、諸君の脚下にも龍は居るぞ、能く踏み附けて置かないと角で突き殺されるぞよ、誠に危険千萬なことぢや、結句に痴人尙ほ辱む夜塘の水、之は此公案の落處を知らずに知解分別する連中が、法眼の答へを色々と邪解する小言で、魚はトウに龍に成つて飛んで往つてしまふたとも知らずにドコに居るであらう、コゝに居るかカシコに居るかと龍門の泄壺の下流の水の中を頻りに搜して居るやうなものぞと云ふたのぢや、辱の字はクムと訓むので水を汲み出す事、夜塘は暗夜の堤塘と云ふほどのことであらう、其れだから圓悟の着悟にも扶籬摸壁とある、扶籬摸壁と云ふは竊根に取り附いたり壁をサグつたりと云ふことで暗夜に物を尋ねる有様よ、門に接し戸に傍ふと云ふのも同じ意味ぢや、納僧何の用處か有らん苟くも納僧たらんものは歩々黄金の地を踏まねば成らぬに、夜塘の水を辱んで何にすると云ひ、又株を守りて、兎を待つ、コンな着語は無くても好いやうに思ふ、恐らく圓悟では有るまい、餘りにツマらんことをシツコイやうぢや。

第八則 翠巖夏末示徒

垂示會則途中受用。如龍得水。如虎靠山。不會則世諦流布。羝羊觸藩。守株待兔。有時一句。如踞地獅子。有時一句。如金剛王寶劍。有時一句。坐斷天下人。舌頭。有時一句。隨



波逐浪。若也途中受用。遇知音。別機宜。識休咎。相共證明。若也世諦流布。具一隻眼。可以坐斷十方。壁立千仞。所以道大用現前。不存規則。有時將一莖艸。作丈六金身。有時將丈六金身。作一莖艸。用且道。憑箇什麼。道理還委悉麼。試舉看。

この一則は垂示も本則も皆長文句ぢや、垂示が自づから五節ほどに分れて見える、第一節には參禪する者の得失を論ぜられた、凡そ誰にもせよ參禪する者が會すれば即ち途中受用、會すると云ふのはイツも申す通り俗に合點すると云ふほどのこと、こゝでは眞實に悟りが開けたときにはと云ふ事になる、眞實悟りが開けさへすれば途中受用ぢや、途中受用と云ふはドコでも自由に御用に立つと云ふことよ、其自由の様子を龍の水を得るが如く虎の山に靠るが如しと譬へられた、龍は元來エライもので有るさうなが、水が無くては小蛇も同様であると云ふことぢや、虎も猛獸には違ひないが、町中へ生捕れて来ては見世物にされる、吾々人間も其通り本來成佛で人々各自に圓滿具足の如來さまには違ひないけれども、悟りが開けるでは底下薄地の素凡夫よ、然るに今は悟りが開けて途中受用と云ふのであるから龍の水を得るが如く虎の山に靠るが如くぢや、さて又これと反對で會せざるときは世諦流布、悟りが開けぬとした日には、口に下

のやうな高尚なことを論じ身にどのやうな殊勝なことを行ふても、皆これ世諦流布と申すもので、諦の字のことは第一則で申して置いたが審實の義で俗に謂ゆる道理とか主義とか云ふほどのことぢや、悟りが開けるでは何を言ふても世俗の有様よ、其自由を得られぬ様子を譬へて羝羊藩に觸れ株を守りて兎を待つと言はれた、羝羊觸藩と云ふは儒書の易經にある辭で羊が垣根に角を引つ掛けて進むことも出来ず退くことも出来ぬと云ふ難澁な有様、株を守ると云ふのは宋の國の百姓が田を耕やしに往つて、兎が株に突當つて死んだのを拾ふた、そこで農業するよりも兎を拾ふのが利益であると思ふて毎日株の傍へ往つて兎を待つて居たと云ふ話、いづれにしても非常に馬鹿げた様子を示されたもの、次に有時一句から隨波逐浪までが第二節で、之は人の師匠と成つて參禪する者を接待する作略を言はるゝ、有時の一句は踞地獅子の如しとある、地に踞るの獅子と云ふのは今まさに飛び掛らんとする勢ひ、氣力が十分に備はつて如何なる者も寄り附くことは出来ぬぞ、禪祖の言句にはコウ云ふのが多い、次に有時の一句は金剛王寶劍の如し、コレは鋭どい方から申したのぢや、同じ鐵の刀でも寶劍と言はれるほどのものなら能く斬れるで有らうに、コレは金剛で作つた寶劍ぢや、八萬四千の煩惱の賊を只一言下に殺し盡す作用が有る、有時の一句は天下人の舌頭を坐斷す、コレは人に閉口させて一言も吐かせぬと云ふ方から言はれたので、只一言に世界中の人の舌の根を斷ち切ると云ふ、以上三句は皆把住と申して奪ふばかりであるが、宗師家の作略は奪ふばかりが妙でない、ソコで有時の一句は隨波逐浪いはゆる臨機應變で笑ひもすれば泣きもする、千萬無量に碎けては散り散りては寄せる浪のまに／＼天上の月影は揺られながら碎けながら影のうつらぬと云ふ波は無いやうな



ものよ、コレで師家の方にも色々と方便があり参禪する弟子の方にも會する者と會し得ぬ者とのあることが分つたに依て、ソコで第三節に前の第一節を承けて若し也た途中受用ならば、謂ゆる會する底の者で有つたならば、之は互ひに知り合ふて居ることであるから知音に遇ふて機宜を別ち休咎を識りて相共に識明するまでのことよ、何の造作も無いことぢや、機宜と云ふは心にチラリと働きの兆すのが機で、其れを事實上に程よく行ふのが宜ぢや、休咎と云ふは、休は好なり美なりでヨイと云ふこと、咎はトガと讀む字で、ワルイこと、即ち互ひに會する底の人でさへあれば機宜も休咎も雙方から能く識り別けて居るに依つて、相共に證明すと互ひに其れに違ひないと證據人になり合ふまでのことぞと云ふのぢや、然るに之と反對で未だ會せざる底の謂ゆる世諦流布の者に遇ふたときには、更に一段峻峻にして寄り付けぬやうに接してやらねば成らぬ、ナゼかと云ふに世諦流布の者は大抵さまざまの理窟や知解を貯へて居て妄想が甚だ深いもので有るから一雙眼を具して以て十方を坐斷して壁立千仞なる可し、一隻眼と云ふは一つの眼と云ふこと、左右の二つの眼は誰にもあるが、其外に更に右とも左とも片寄らない眼を一つ具へんければ成らぬと云ふこと、即ち更に眼の著け處を別にしてと云ふほどのことぞ、十方を坐斷すると云ふは、ドチラの方角からも寄り附く路のないこと、壁立千仞と云ふはマツスグに高く突立つて手の掛け處の無いやうす、サテ簡様に厳格な取扱ひに遇へばモハヤ知解も分別も理窟も學問も用に立たぬことが始めて知れるに依つて、ソコで眞實に参禪する氣にも成るぞと云ふのぢや、サテ簡様なわけで、相手の利鈍次第縦横自在に接化するのであるから、所以に道ふ大用現前軌則を存せず、コレは第三則の垂示にも有つた通り佛祖が衆生を濟

度する作略の上にはコワせねば成らぬとかソウせねば成らぬとか云ふ軌則はない、手に任せ來りてドウでも好い、婆さんが赤ん坊の守をするにさへ軌則は無いものぞ、或はソツと抱きしめたり、或はユラ／＼と揺つたり靜にしたり歌ツたり起たり居たり歩いたり、只其子が機嫌よく笑つたり眠つたりするのが目地的ぢや、すべて大機大用には杓子定規は入らぬものよ、其自由自在のやうすを有る時は一葦草を將て丈六の金身と作して用ゐる時は丈六の金身を將て一葦草と作して用ゆと言はれた、丈六の金身と云ふは佛のことで、釋迦如來は身のたけ一丈六尺その色は紫磨金色と申して金色の光を放たれたとある、其の丈六の金身が野原に茫々と生ひ茂つて居る草の葉と交互融通自由自勝手ぢや、且らく道へ箇の什麼の道理にか憑る、サア是れは一體ドウしたワケぞ、此れには何ぞ子細が有らう、遷て委悉すやよく吞込が附いたかな、兎に角雪竇老人の拈提せられた公案がある、試みに擧す看よ。

**本則** 擧翠岳夏末示衆云。一夏以來爲兄弟說話開口馬看知惡麼

翠岳眉毛在麼只贏得眼晴也落地保福云作賊人心虛灼然

賊賊長慶云生也舌頭落地雲門云關走保福云作賊人心虛灼然

翠巖と云ふは、明州翠巖の令倭禪師と申し彼の雪峰和尚の弟子ぢや、保福と云ふのも長慶と云ふのも雲門と云ふのも皆雪峰の弟子であるから、此公案は兄弟四人の見識を一處に見るので、夏と云ふは天竺以來佛家の規則として夏期九十日が間は各自相當な處へ集まつて修行をする、其れを結制とも云ひ安居とも云ひ



夏安居とも云ひ、又は只略して夏とばかりも云ふ、今は夏末とあるから其夏安居九十日も済んでモハヤ解制になる、即ち七月十五日の事と見える、其日に令修禪師が同安居の大衆に示して言はるゝには、一夏以來兄弟の爲めに説話す看よ翠巖が眉毛在りや、コレは佛法を誤まつて説いた者は其罰で眉も鬚も墮落すると云ふ故事が有るので、翠巖が九十日以來諸人の爲めに色々なことを言ふて説法したことで有るが、ドウちや私の眉毛がマダ在るかドウか諸君見てくれと言ふたのちや、一體に佛法と云ふものは他人の爲めに口を開き舌を動かして説くべきもので有らうか有るまいか、マサカ翠巖が其んなことをしたわけでは有るまい、兄弟の爲めに説話すと云ふは一體に何のことで有らうぞ、腹が減つては飯を食ひ、眠くなつては横になる、手で物を持つて足で歩いたとでも云ふことで有らうか、外に何ぞ五時八教とか頓漸顯密とかでも云ふやうなことを説法したので有らうか、先づ其穿鑿をして來てからで無ければ眉毛の有る無しは相談に成るまい、サテ又おのれの眼の上には在るはずの眉毛の始末を他人に見てもらはねば、在るか無いか分らぬもので有らうか、其れが又一つの大問題ぢや、圓悟老人が爲兄弟説話と云ふ下に口を開かば焉くんぞ恁麼なるを知らんと着語せられた、説話と云ふたからとて口を開いて舌を動かしたのならコウ云ふことは言はれまいと云ふたので有らう、コウ云ふたなら佛教の説法と云ふものは口を開き舌を動かさないでドウして説法するぞと云ふ人もあるかは知らんが、マサカ木偶の如く啞人の如くにして居ると云ふわけでは無い、釋迦如來が四辯八音で五十年が間しやべり通しに説法なされても、其儘に一字不説よ、東坡居士などは山色如來の溪聲の説法を八萬四千偈聽聞したと云ふが、山色の眉毛が落ちたか落ちないか、圓悟が眉毛在慶の下

に只眼睛も也た地に落つることを贏ち得たりと評した、眉毛どころか眼玉まで落ちて無くなつたぞ、其上に鼻孔に和して也た失ひ了れり、鼻の孔もつぶれてしまつた、説法の罰は恐ろしいものよ、元來翠巖に最初から眉毛や眼玉が有つたのであらうか無かつたのであらうか、何だか翠巖に馬鹿にされるやうな心持がするぞ、人々各自の眉毛が有るか無いかを點檢して置くのが肝要ぞ、保福曰く賊と作る人は心慮はる盜みをする奴はウツをツクと俗に言ふ通りの詞ぢや、之が翠巖に向つての御挨拶よ、圓悟が灼然と云ひ又是れ賊賊を知ると云ふた、灼然は分明と云ふ事で保福の云ふ通りに違ひない然し盜人仲間で能く内幕を知つてゐると云ふたのちや、圓悟もヤハリ仲間と見える、ドウぞ吾々お互ひも其お仲間入を願ひたいものぢや然しナゼ保福がコウ云ふたので有らうぞ、元來他の爲めに説法すべきでも無ければ、眉毛の有無の論辯は入らぬはずであるに、翠巖がおかしなことを言ふから保福が其舌の根を引き抜いたので有らうか、長慶曰く生ぜりコレは又調子が違ふた、翠巖が眉毛が有るか無いか見てくれと云ふ詞の下から、生えたぞ生えたぞ、兎の角のやうに生えたぞ火の中の蓮花のやうに生えたぞと云ふたやうなアンパイぢや、コレは一體何物がドコへ生じたと云ふことで有らうか、圓悟が舌頭地に落つと云ふた餘りに言ひ過ぎるぞと云ふたので有らう、又錯を將て錯に就くと云ひ更に果然と云ふた、翠巖が衆に示すなど出掛けたのが抑も大間違ひであるに長慶がまた餘計なことを云ふ、大間違の道連れぢやと云ふのよ、然し長慶はコンなことを言ふで有らうと思つて居たが果して其れに違はなんだと云ふので果然と云ふた、雲門曰く關、此人は一字の禪と云ふて、時々コウ云ふ工合に一字を吐き出す、關と云ふは今では無いが、昔は日本でも箱根の關所だ



の新居の番所だのと云ふて旅人の往來を厳しく検査したもので有つたが、雲門は翠巖と保福と長慶と三人で色々なことを云ふのを聞いて居て、コレは怪しい奴らである、タダは通せぬぞと云ふので新たに關門を一つ鎖した、サア通れるなら通つて見ろと云ふアンバイ、圓悟が走つて、何の處に在つて去らん、翠巖等三人がドコへ逃げて往くで有らう、天下の衲僧も跳不出、この關所は中々ドンな者でも容易に通れまいと云ふた、三人は昔のことよ即今お互ひに此關門をドウして通つたもので有らうぞ、ヘタに狼狽ると忽ちに眉鬚墮落するぞ、ソコが工夫のしどころぢや、然るに圓悟老人は慈悲深い人で敗也、この難關を撃ち敗つたぞと言はれる、サア關門は開いたぞ通るものはサツサと通れ、コレから雪竇の頌ぢや。

**頌** 翠巖示徒這老賊○教二女○千古無對千箇萬箇○也有一節 關字相酬道不信

**抑揚難得** ○放行把住○誰是同生死 滌倒保福同行同伴○猶作 分明是賊

**白圭無玷** ○莫誇他好○且喜沒交涉 誰辨真假多只是假○山僧從 長慶

**眉毛生也** ○在什麼處○從二頂門上

**相語** 始得○未得一○半在 眉毛生也

翠巖が眉毛ありやと衆に示した此一言の示徒は、八萬四千の法門をも皆奪ひ去り一切衆生の命をも奪ふて居る、ソコで圓悟が這の老賊と云ひ又人家の男女を教壞すと著語した、諸君も亦た膽玉を奪ひ去られぬや

うにするが好い、實に此老賊に對して千古無對むかしから誰れ一人も應對したものは無いと雪竇は言ふたが、一體にコレは相對すべきもので有らうか有るまいか、翠巖は看よ老僧が眉毛ありやと問ふたのであるぞ、之に對して有ると應對したもので有らうか、又は無いと應對したもので有らうか、マサカに此處で有無に渉るものは有るまい、千古無對は勿論のことよ、然るに圓悟は之に對して千箇萬箇と云ふた、ナニ千古無對なことが有るものか、幾らも有るぞ、千も萬もある、看よ日は朝々東より出で月は夜々西に沈んで居るでは無いかと云ふたやうなアンバイ、然しながら翠巖が眉毛ありやと云ふたのと雪竇が千古無對と言ふたのと誠に能く符號を合せたやうであると云ふので分一節と云ふた、何處が其やうに能く似て居るやら昔から眉毛ありやに應對する者は無いはずで有るに、雲門がノコノコと出掛けて關字相酬ふた、此の關と云ふ一字が千古萬古に透徹した應對ぞ、ソコで圓悟が妨げず奇特なりと評した、此の關の字がドコに奇特なところが有るぞ、眉毛ありやと問ふたのに答へて關と云ふただけのこと、コレが眉毛ありと云ふことか、又は無いと云ふことか、唯いふ關、その奇特な所を搜して見ねば成るまい、イヤハヤ失錢遭罪よ、コレは唐朝の頃に、凡そ錢を失ふた者が有れば罪科に處すると云ふ法律の出たことが有つたと云ふ話である、錢を失ふた其上に罪科に處せられて、誠に引き合はぬ次第であるが、今コ、で失錢遭罪したのは誰で有らう、雲門の關に遭ふて翠巖が失錢遭罪したので有らうか、又は雲門の失錢遭罪で有らうか、或は雪竇も圓悟も皆失錢遭罪の仲間かも知れぬ、ソコで圓悟は氣を飲み聲を呑むと云ふた恐れ入つた有様ぞ、誰がそのやうに恐ろしがるや雪竇も也た少なからずと云ひつゝ聲に和して打つとある、誰に何の罪が有つて箇



様な目に遭はせるので有らうぞ、一體に罪と云ふものは有るものか無いものか、善いことか悪いことか、ソコも工夫のしどころぞ、潦倒たる保福は抑揚得難し、潦倒と云ふは老倒と云ふも同じ意味で、老耄頭倒して居ると云ふ事ださうな、保福が賊と作る人心慮ると云ふたのを評して、オイボレの保福めが抑とソツタのやら揚とホメタのやら分らぬことを云ふたぞと云ふたので有るが、此の二句も亦た雪寶が保福をホメタので有らうかソツタので有らうか、圓悟は同行同伴と云ふた、翠巖も雲門も然う言はれた、雪寶も皆好い道連ぞと云ふたのと見へる、猶ほ這の去就を作す之は雪寶に向つてお前は保福を老耄したと言はれるけれどもマダ此の位なことはやりませまい、そのやうに世の中に人の無いやうなことはかり云ふものには無い、兩箇三箇ふたりや三人は無いでも無いと云ふて置き直に次の句の下に把住放行と云ふた、其の抑揚し得難き所が即ち取るも捨てるも自由なところぞ、誰か是れ同生同死この保福と同生同死する者は誰で有らう、雪寶は實に能く保福を見ぬいて居るから、其れこそ借老同穴よと云ふたと見ても好し、又は保福と翠巖とが生涯を共にすると見ても好からう、又他を誘ふこと莫くんば好しと云ふた、之は全く雪寶に向ひ潦倒だの抑揚難得だのと保福を誹謗せぬが好いぞと云ふたらしい、且らく道へ没交渉ツマリ頓とツチツマが合はぬぞと評した、こゝらの着語も何やら穩やかで無いやうに思はれる、恐らくは後人の妄添もあるで有らう、嘯々たる翠巖分明に是れ賊、嘯々は多言の貌とある、眉毛が有るか無いかのと餘計なことを取れば好し、黙つて居れと翠巖を讚嘆供養した、保福が云ふ通りに翠巖は分明に是れ賊である、盡十方法

界を皆盗んだぞと雪寶が云へば、圓悟は之にノウ〜と出掛けて何が悪いと云ふので有るぞ、眉毛ありやと衆に示したからとて何の差支へがある、釋迦老師などは五十年もシャベリ續けたぞ、消着するも也た妨げずナニ其れが賊であると云ふのか、其んなら圓悟が生け捕りにしてやるといふので捉敗了也サア捉まへたぞ、白圭玷なし誰か眞假を辨ぜん、この賊の妙なことに一點の玷も無いこと白圭の如くぢや、着語に還て辨じ得るやサア其玷があるやら無いやら能く分る者があるかドウぢや、恐らくは天下人未だ價を知らず誰も此玉の價を知つた者はあるまいと圓悟は云ふたが、雪寶は誰か眞假を辨ぜん價の多少よりも先づ其玉の眞偽を能く見分けねば成らぬ、ドウぢや翠巖と云ふ玉は眞玉か偽玉か、圓悟は多く只是れ假と云ふた大抵は偽物よとコレが圓悟の辯じかたかと思つたら山僧從來眼なしと云ふ、眼が無くては眞假の辨じやうは有るまいが、碧眼胡僧すなはち達磨ならば其の眞假を辨じ得るで有らうと他に譲つた、一體コレは眞假の論量に涉るべき者で有らうか有るまいか、メツたに雪寶や圓悟の口うらに載せられぬやうにせねば成るまい、然るに雪寶は長慶相ひ語んぜりと云ふた、長慶は其眞偽を能く語記して居ると云ふのぢや、圓悟が是れ精にして精を識る化物のことは化物が知つて居ると云ふた、須らく他に始めて得べし長慶ならば能く知つて居るで有らう、然し未だ一半を得ざることあり半分は知つて居ても半分は知らぬと云ふので有るが、何が半分で有らうぞ、兎に角其長慶がドウ知つて居るか云ふに眉毛生ぜり、圓悟は何處の處にか在ると云ふた、ドコへ眉毛が生へたぞ、足の底へ生へたか鼻の先へ生へたか頂門上より脚跟下に至るまで一莖も也た無しドコにも一本も無いでは無いかと云ふた、諸君ドウぢや最初からの問題が翠巖老僧に眉



毛が有るか無いかと云ふので、保福は賊と作る人心虚はると云ひ長慶は眉毛生ぜりと云ひ、雲門は之に關と云ふ一字を答へ、雲寶は白圭玷なしと云ひ、圓悟は一草もまた無しと云ふた、コレは人々各自に皆見る所が違ふので有らうか、又は同じなのであらうか、先づ第一に人々各自の眉毛から空鑿して見ねば成るまゝ、一體に吾人の眉毛はドコに在るか、匆卒に從來眉毛眼上に在りなどと言ひますまいぞ。

第九則 趙州東西南北

垂示明鏡當臺。妍醜自辨。鑊錮在手。殺活臨時。漢去胡來。胡來漢去。死中得活。活中得死。且道到這裏。又作麼生。若無透關底。眼轉身處。到這裏。灼然不奈何。且道如何是透關底。眼轉身處。試舉看。

明鏡妍醜の二句は、師家の智見を言ひ鑊錮殺活の二句は師家の作略を言はれたのちや、凡そ佛祖の門庭に於て一切衆生の導師と爲るべき人は明鏡の臺に當るが如き知見が無ければ成らぬ、心境に一點の曇りさへ無ければ一切衆生の妍醜すなはち迷悟邪正が自然にアリ／＼と辨見せらる、サテ其迷悟邪正の一切衆生を濟度するには或は折伏或は攝受、時に臨み變に應じて殺すとも活かすとも自由に扱ひ得られる鑊錮の賣

劍を手に持つてゐねば成らぬ、其明鏡さへクモリなければ漢去り胡來り胡來り漢去るドンなもの映つて來ても少しも滯ふりなく、去來自由に任せて妍醜分明ちや、元來明鏡の方には去來の相は無只向ふから映つてくる、胡にせよ漢にせよ、花にまれ月にまれ、向ふ次第に任せるのぞ、手に鑊錮の賣劍さへあれば死中に活を得させやうとも活中に死を得させやうとも自由自在に出来る、元來賣劍に死活は無い、只これに觸れるものに死活が在るぞ且らく道へ這裏に到て又作麼生、サテ箇様な場合に臨んでドウしたもので有らう、コレは人の師となる者も人の弟子となる者も同じことで若し透關底の眼すなはち佛祖が經歷し來られた所の道中の險難、むかしの箱根山や大井川のやうな難所を通り抜け來つた眼力も無く、又轉身の處と云ふて進退これ谷まると云ふ所へ行き當つてもヒラリと身を轉じて自由に働らくと云ふことが出来ぬやうでは這裏に到て灼然として奈何ともせず箇様な場合に臨んで何とも致しかたの無いことは誠に明らかに分つたことで有る、サア其の透關底の眼と云ひ轉身の處と云ふは如何なることで有るぞ、各自ドウぢやと拶着して、サテ本則を引き出し試みに舉す看よ。

本則 舉僧問趙州如何是趙州。河北河南○總說不著○爛泥裏。州云。

東門西門南門北門。開也○相罵饒爾接嘴相唾饒爾潑。見成公案○還見麼○便打。

この問は妙な問ぢや、コレを試問と云ふと申すことぢや、趙州と云ふはモト地名であるけれども、世間の人が皆この從諗禪師のことを趙州和尚とばかり云ふて居る、山陽道生れの儒者に山陽と云ふ人あるやうな



ものぢや、然るに或る僧が其趙州和尚に向つて如何なるか。是れ趙州と問ふた、此僧なか／＼食へぬヤツぞ、趙州和尚がこの問を自分のこととして答へればイヤお前のことではない趙州城のことを問ふたのであると言ひ、又趙州城のこととして答へれば、イヤ土地のことを問ふたのでは御坐らぬと言ふつもりぢや、問話の語脈が兩端に跨がつて居るから、圓悟老人が河南北と着語した、ドチらを問ふのかトンと分らんぞと云ふので、更に總て説不着と云ひ又瀾泥裏に刺ありドロ／＼した中に針があるやうな問ひ方で、メツタに足を入れられない、然し河南に在らずんば正に河北に在りドチラかのうちに答へせねば成るまい、生死と涅槃、煩惱と菩提、地獄と極樂、みな此通りのことよ、コ、で下手にマゴツケばモハヤ其れぎりぢや趙州がコ、を何んと切りぬけるぞ州云く東門西門南門北門、コレは果して趙州城のことであらうか、又は趙州和尚のことで有らうか、趙州城の城門はタシカに東西南北の四門がある、然し趙州和尚の方も發心、修行、菩提、涅槃の四門が有つて、東西南北に配當されてある、實に此外にも理入門だの行入門だの聖道門だの淨土門だの、有門だの空門だのと幾らも門があるけれども、今は只四門だけを答へたものと見える、彼の趙州城の四門の出入は馬も通れば牛も通る、官吏も通れば罪人も通る、今此の佛祖の關門も彌陀も通れば閻魔も通る、八萬四千の法門を八萬四千の塵勞が出入する、サア此趙州和尚の答は何を何んと答へたので有らうぞ、イヅレにても門は開いたと云ふので圓悟が開也と着語した、諸君遠慮なしに通つて見なされ、但し此門はサトリと云ふ鳥の虚音は許さぬと云ふことぢや、拙老の拙詠に「ふみまよふ人の心はさゝねども悟のそらね得やは許さん」と云ふたのもある御参考の一端になれば幸甚ぢや、圓悟は此趙州の答話

にアキレたと見えて相罵し、ることは、汝に任す、嘴を接け相唾することは、偏に饒す、水を潑けと云ふた、何とでも言ひたいやうに勝手に言ふが好いと云ふたやうなアンバイ、然し之が實に見成公案ぢや、石頭大師の、參同契には「門々一切の境、回互と不回互と回して而して更に相渉る、然らざれば位に依て住す」とある、盡十方法界ありのまゝの一大公案ぞ、還て見るやその見成公案が諸人に見えたかドウぢや、マゴツクと擲ぐるぞ、便ち打つ。

頌句裏呈機劈面來

○響○魚行水濁

爍迦羅眼絶纖埃

○撒○沙○撒○土○

地作什麼 東西南北門相對

○開也○那裏有許多門

無限輪鎚擊不

開

○不自是開也

コレが雪竇禪師の見かたちぢや、問ふたヤツも問ふたヤツなれば、答へも答へであるが、中に就く、如何なるか是れ趙州と言ふた勢ひは句裡に機を呈して劈面に來ると云ふもので、大低なものではコレをスカリと切りぬけると云ふことは容易に出來ない、圓悟が、響と着語したのもソコぢや、問ふたものゝ聲にはソレと言ひあらはして無いけれども、タシカに包裡に、響があるぞと云ふのぢや、ソレが即ち魚行けば水濁ると云ふものぞ趙州を誘する莫くんば好し、コレは此の問ひ掛けた僧に向つて句裡に機を呈するなどは失禮では無いかと云ふたものと見ても通ずるがコンな着語は無くても好いと思ふ、第二句に爍迦羅眼纖埃を絶す爍迦羅と云ふは梵語で、漢譯すれば堅固と云ふことに成るさうぢや、サスガに趙州和尚の眼玉はタ







ことよ」などと珠敷つまぐる婆さんもあれば「佛法はありけるものを隣なる老爺がさげた火燧袋に」と歌ふ老僧もあるのぢや、所以に道ふ若し向上に轉じ去れば直に得たり釋迦も彌勒も文珠も普賢も千聖萬聖も天下の宗師も普ねく皆氣を呑み聲を飲む、菩提も涅槃も何の役にも立たぬぞ、此時に餓鬼や地獄の衆生はドウぢや、ドンな面附で何をして居るぞ、山の高いときには谷はドンなぢや、智慧の鋭いときに慈悲はドウなる、ソコは各自に工夫して見るが好い、若し向下に轉じ去れば醜鷄も蠅蝶も蠢動含靈も一々に大光明を放つて一々に壁立萬仞ならん、アラ不思議や豔雜と云ふて鹽辛や醬油樽の中にワイて居る蟲けらも、蟻蟻と云ふやうな細かな蟲も、其他のウヨ／＼して居る都べての動物蛭・蜂・蜻蛉に蟋蟀・芋蟲・ゲジゲジ蟹蛙の類に至るまで皆光明赫耀として偏ねく十方を照らし、三十二相八十隨好のおん姿、これを仰げば愈々高く、即ち壁立萬仞であらうと云ふ、コレは一體ドウしたことぞ、其實は最初から此通りなので今さら驚くべきでは無い、然し箇様に兩々相對して申したのでは中道第一義諦にかなはぬと思ふやからも有らう、ソコで儻し或は不上不下、即ち向上でも無ければ向下でも無いとしたときには又作麼生、一體ドウしたもので有らうぞ、別にむづかしいことも無い條あれば條を攀ぢ條なければ例を攀づ何やら當今の法律家の云ふやうな申し分ぢや、條例とは何を云ふぞ、天はイツでも高く地はイツでも低い、蚯蚓は土を食ひ螢の尻は光る、然レコ、に一つの昔し話もあるぞと云ふので、試みに擧す看よ。

**本則** 擧睦州問僧近離甚處探筆僧便喝作家禪客明頭也解懸塵去且莫許州云

老僧被汝一喝陷虎之機僧又喝看取頭角州云三喝似則似是則

四喝後作麼生遺水之波僧無語未是州便打云若使

盡令而行盡大地這掠虛頭漢放過一着

睦州和尚のところへ、或る僧が初めて参問した時のこと、見える、直ちに睦州の方から問ひ掛けた、近離甚の處ぞ、お前は近ごろドコを出立して來たのぢやと云ふ、コレは試験の間ひかたで、此の僧の識見がドコまで往つて居るかを點檢するのぢや、今までドコに居てイツ何處を離れたぞ、臺灣から來たか、遼東から來たか、煩惱をイツ離れた、又は菩提をも離れて居るか、ドウぢやなと云ふやうなアンバイ、それだから圓悟が探筆影草と着語した、コレは古語に探筆在手影草隨身とあるので、睦州老人が此僧の脚底をサグられるのぞと云ふのぢや、サスガに此僧もマンザラの者では無いと見えて便ち喝す大喝一聲エライ勢ひぢや、圓悟も作家の禪客と評した、作家だの作者だのと云ふ事は詩人の稱から出たので有らうけれども、唐宋のころは詩文が大流行であるから、作家とか作者とか言へば人を稱賛する套語に成つたものと見える、そこでサスガはエライ禪客ぞと一旦ホメはホメたが、然し詐明頭なること莫しやと駄目を押した、詐明頭と云ふは知りませんことを知つたふり、することぢやさうな、睦州の試験に逢ふて、臺灣から來たとも言はず遼東から参りましたとも言はぬ所は、サスガ作家の禪客らしいけれども、其一喝が眞實自分の力量



から出たので有れが好いが、一時の間に合せて詐明頭ではツマランぞと圓悟が念を入れたのぢや、州云く老僧汝に一喝せらる、ドウぢや此の陸州の一言は之が向上であらうか向下であらうか、ヤア貴様なか／＼エライな老僧も其一喝にはビツクリ致したぞとドンな面して言はれたので有らうかと思ひやられるよ、圓悟が陥虎の機と云ふた此れでいよ／＼此僧の實力があるか無いか分る恐ろしい所ぢや、人を探して作麼コレは陸州に向つて其やうに人をタブラカシテ何にするのぢやと云ふた、此僧も中々油断はせぬから僧又喝すと再度の大喝をやらした、コ、で此僧が眞實の龍であるやら、又は蛇のバケたので有るやらを見て取らねば成らぬぞよと云ふので、圓悟が頭角を看取せよカシラに角があるか無いか調査して見るが好い、然し恐らくは龍頭蛇尾であらうぞと預言した、然るに陸州は百尺竿頭さらに一步を進めて三喝四喝の後作麼生、お前は頻りに大喝して一喝再喝エライ勢ひであるが、更に三喝も四喝もやらした後はドウするつもりぢや、サア何となりとも言ふて見なさい、陸州ます／＼猫なで聲であるが其氣は已に狼虎を丸呑にして居る逆水の波と圓悟が着語した、コ、で此僧に實力があれば死中に活を得る手段が無ければ成らるのであるが、ソコが誠におぼつかないから、圓悟が更に那裡に入り、去ると云ふた、此僧ドコヘドウ遁げるであらうか、其足下に氣を付けて見て居よと吾々に注意せられたのぢや、然るに僧無語コ、に至つて閉口しては前の一喝再喝みな虚喝となつてしまふた、圓悟に果然として摸索不着と罵しられても一言が無い、ソコで陸州の一棒を食つた便ち打て云く道の掠虚頭の漢、斯ろ無ければ成らぬ、何でも胡説亂道はいかん、別して生死の一大事を決定すべき肝要の場で似て非なる一喝再喝、たとへ陸州は許して置いても臘月三十

日に至つて閻摩老子から宿債の催促にあづかつた時には一言も無からう、ソコで圓悟は陸州が掠虚頭と叱つた位で一棒食らはせたばかりでは手ぬるいと云ふ所から一着を放過して第二に落在せりと評した、打つて打つて打ちつゞけて宿債を償却し盡させれば好いのにと云ふたのぢや、實に眞箇の參禪は命がけで無ければ成らぬと云ふことも、コ、ラでトツクリ呑み込んで置かねば成らぬ。

**頌** 兩喝與三喝 雷聲浩大雨點全無 作者知機變 若不是作家爭驗 若謂騎虎頭 人恁麼會 虎頭如何騎 多一俱成瞎漢 親言出親口 何止誰瞎漢 教誰辨 泊手賺殺人 拈來天下與人看 着眼看則兩手拈空 恁麼舉

且道是第幾機

カアーツ、カアーツと大きな聲ばかりするだけのことなら誰にも眞似が出来るけれども、それでは全く胡喝亂喝と云ふものぢや、それだから臨濟大師には四喝と云ふことが有る、或る時の一喝は一喝の用を作さず、有る時の一喝は却て一喝の用を作す、有る時の一喝は踞地獅子の如く、有る時の一喝は金剛王寶劍の如しと言はれた、今此の僧が陸州に向つて兩喝を食らはせた、ソコで陸州に三喝四喝の後作麼生と彈ねられてアトは一言も無い其様子を一句にまとめて兩喝與三喝と言はれた、圓悟が之を評して雷聲は洪大なれども雨點は全く無し、カラ神鳴りで雨が降らんでは苗勃然として此に起きんと云ふわけにも往かぬぞと云



ふたが、睦州が三喝四喝の後作塵生とハネノケた様子を評しては古より今に至るまで人の恚麼なる有ること罕なりと讃歎した、作者機變を知る此の句は此の僧が最初に睦州の近離甚の處ぞと云ふ拶問を受けてスカサズ一喝を下した様子と云ひ、又さらに再喝したアンバイと云ひ、中々の舊參と見えるが、尤も感心なことには彼の三喝四喝の後また作塵生と云はれた所へ往つてはマタと喝は發しないのみならず、モハヤ慎んで一語も出さない、コ、が即ち機變を知ると云ふものぢや、法を知るものは懼ると云ふも斯う云ふ場合のことである、圓悟が若し是れ作者に在らずんば争でか驗得せんと云ふのは睦州の方へ掛けて見たのかも知れぬ、ソコで次の着語に只恐らくは恚麼ならざらんと云ふたのが、再喝の僧を仰へたものと見える、ソウすると此の前の着語は睦州ほどの作家で無ければ、これだけに機變を知つて居る僧を驗得することは出来ぬと褒めたのであらう、コレでモハヤ此の公案の頌は済んでしまつたので第三句以下は世人が此の公案を邪解して居るのを勘檢せられたのぢや、若し虎頭に騎れと謂は二俱に瞎漢と成らん、之は世人が此の公案を評論して、此の僧が睦州に三喝四喝の後また作塵生と彈ねられた時に、マタ大喝一聲やらかしたなら好かつたらうなどと云ふものが有るが、若し其様なことをしたなら其れは二人ともに盲目と云ふものぢや、圓悟も虎頭如何が騎らんと云ふた、又次の句に何ぞ止だ兩個のみならんと着語した、二人ばかりでは有るまい、盲目ドチ〜幾らも有らうぞと云ふ自領出去は自分で持つて往けと云ふのだから、之は圓悟が雪竇に向つて外に瞎漢は無いぞお前こそと云ふたやうなアンバイ、然るにコ、で又ガラリと幕がかはつた誰か瞎漢なるぞサア兎頭に騎れと云ふたのが瞎漢か、又騎れと云ふのに騎らないのが、瞎漢か、今この雪竇

が瞎漢と云ふたのはドウ云ふわけで有るか、能く辯論して見るが好い、大抵のものは瞎漢と聞いたらイヤな心持がするで有らう、そんなことでは相談に成らんぞ、盡十方法界一大瞎漢とあらはれ来ることも有るまゝいものでも無い、サア其の瞎漢を拈じ來つて天下の人に看せてヤルが好いと云ふた、コレは一體にドウしたと云ふことで有らうぞ、圓悟は誰をして辯せしめんと云ふた、コレは雪竇が誰か瞎漢なるぞと云ふたのに答へたので、誰が瞎漢であるやら其れを誰れに辯論させやうと云ふのぢやとカラカツた、コレは人々各自に辯じて見ねば成るまいよ、又結句の着語に看ることは無きに非ず觀着すれば即ち瞎すとある雪竇は拈じ來つて天下人に與へて看せしむと云ふたが、看ろと云はれたからとて見やうとしたなら目が潰れやうぞと云ふのぢや、目がツブれては悪いか知らん、一法を見ざるを觀自在と名くとも聞いたことが有るが、ソウして見ると觀音もヤハリ盲目では有るまいか、サア畢竟何者か是れ瞎漢なる、圓悟は此の斷案を下して、開眼も亦得たり合眼も亦た得たりと云ふた、諸君は何と見るぞ。

第十一則 黃檗酒糟漢

垂示 佛祖大機。全歸掌握。人天命脈。悉受指呼。等閑一句。一言驚群動衆。一機一境打鎖敲枷。接向上機。提向上事。且道什麼人曾恁麼來。還有知落處麼。試舉看。



圓悟の垂示が三節に分れて、黄檗禪師平生の活機を稱揚せられた、第一節が黄檗の大智慧門で、佛祖の大機三世の諸佛代々の祖師の洪大なる活機を、一部分では無く全く掌握に歸す、藥師如來の十二大願も、阿彌陀如來の四十八願も、乃至釋迦の拈華も達磨の西來も花の紅も柳の緑も、全分黄檗の手の内に握つて居る、そこで人天の命脈梵天帝釋四大天王を始め凡そ世界中に蠢々として限りもない人間どもを殺さうとも活かさうとも悉く指呼に受く御主人様が下男下女を追ひ使ふも同様ぢや、次に第二節が黄檗の大慈悲門で衆生濟度の様子と見れば、等閑の一句一言別段に考へも工夫も要せず、フンと云ふてもエヘンと云ふても、泣いても笑つても其れが悉く群を驚かし衆を動す那波翁や豊臣秀吉が進めつと一聲かければ百萬の兵が夕立の雲が瞬間に忽ち一天に滿ち寒がるやうに猛進するも同様ぞ、一機一境前は言句であるから口で言ふ方、これは機境で揚眉瞬目舉手投足、寝るも起るも鎖を打し枷を敲く、鎖は罪人などを縛するもの、境は罪人の首や足へはめて動かないやうにするもの、參禪學道の僧にもせよ、俗にもせよ、文字言句の理窟に縛されたり、己れの獨斷臆想を悟りのやうに思ふたりして己れと己れの首も足も動かないやうになつて居るのを、黄檗禪師は一機一境で打撃し敲破して自由を得られるやうにして下さる、其れが即ち向上の機を接し向上の事を提ぐるると云ふものである、向上と云ふは今さら云ふまでもないが、獨一眞神のゴツドに車を挽かせて毘盧舍那如來に後押させる檀那殿の身分のことぢや、次は第三節に其れを今の公案拈提に結歸させた、且く道へ什麼人が曾て什麼にし來る、昔から誰れぞ今言ふたやうな人物が有つたかナ、還て處を知るありや何處等邊が落著の處であらうぞ、それには適當な話がある、試みに舉す看よ。

**本則** 舉黄檗示衆云、打水得盆不出天 汝等諸人盡是噇酒糟漢。  
恁麼行脚道着踏破草鞋○掀天搖地 何處有今日用今日爲什麼○不妨驚動衆 還知大唐國裏無禪師麼老僧不會○一口吞盡○也是雲居羅漢 時有僧出云、只如諸方匡徒領衆又作麼生也好與二一抄○臨機不得不恁麼 檗云、不道無禪只是無師直得分疎不下○瓦

解水消○龍頭蛇尾漢

黄檗は名を希運と云ふて、達磨大師十世の法孫である、法を百丈大智禪師に嗣いで、弟子に臨濟義玄禪師が出た、身の長七尺、額に圓珠ありとあるから、肉體も餘程異常なる人であつたと見える、天性に禪を會すと申して生れながらに悟つて居るといふ評判である、或時門下の衆に示して云く、圓悟は直にこゝへ著語して水を打して盆に碍えらると云ふた、水を打すと云ふは水を汲むことで、水は幾らでも井戸の中に澤山あるけれども、其水を汲む盆すなはち水桶には限りがあるから、限なき水も限られることになる、今黄檗が謂ゆる佛祖の大機全く掌握に歸するの大力量を以て示しても言句には限りがある、況んや其示しを受ける衆徒が凡庸では示しがひもあるまいぞと冷かした、しかし更に又語をかへて、天下の衲僧も跳不出、此の黄檗に口を開かれては如何なる名僧でも知識でも自由を得ることは出来まいぞ、汝等諸人盡く是れ噇酒糟の漢恁麼に行脚せば、身のたけ七尺の大入道が手の下の罪人たる坊さん達を睨みつけた有様はどんな



で有つたらうかと思はれる、汝等は誰も皆ことごとく酒の糟ばかり食つて居る、本統の正宗や劍菱の味を知らない奴等だ、其様なことで支那四百餘州をウロウロ行脚してあるく、これは支那の昔の話では無い、今日の學者は滔々たる天下皆悉く糟食ひで、三乗だの一乗だの、顯教だの密教だの自力だの他力だのと議論ばかり騒々しくて、禪宗坊主までが看話だの默照だの、五位だの四料簡だのと言ふてゐるはまだしものこと、哲學だの科學だのと云ふことを直指單傳の正法眼藏のやうに思ふてゐるのが多い、圓悟がこへ着語して道着そりや言ひ出したぞといふアンパイ又草鞋を踏破すとある、恁麼に行脚せばと叱られるけれども、さう馬鹿にしたものではない、處々方々をあるくためには草鞋を澤山に踏み破つて居ますぞと云ふのぢや、これが當今ならば隨分學資は多く費やして居るぞと云ふのよ、實に其れに違ひない學資だけはたしかに十分つかつて居る、何の處にか今日あらん、どれほど草鞋を踏み破り幾ら學資を費やして諸方をうろつきあるいても、どれほどの學問をしたからと云ふても、どこに今日こそ悟りが開けたと云ふ日に遇ふことが出来やうぞ、圓悟がこへ口出して今日を用ひて、什麼にかせん、黃檗は今日とかいふことを大切らしく言はれるが、其の今日とかいふものを何にするのであるぞ、悟りは父母未生以前から有るのである、今更に今日も明日もあつたものかと云ふのぢや、しかし斯う叱り飛ばされては妨げず群を驚かし衆を動すことを、誰でもびつくりするで有らうといふのであるが、此の着語は圓悟の無くて誰ぞ後の人の下語を誤つて入れたのであらうかと思はれる、還て大唐國裏に禪師なきことを知るや、一體に汝等は此の大唐國裏四百餘州廣しと雖も禪師と言ふべき者は一人も無いといふことを知つて居るか、恐らくは知らぬに

依て、草鞋を費やして尋ねあるくのであらうと言はれた、圓悟は之を評して老僧不會といふ、拙者などは一體に其の禪師とかいふものか有るものやら無いものやら、最初から存ぜぬに依つて、お話が頓と合點がゆきませぬといふのぢや、又一口に吞盡すとある、恐ろしい大言ぢやのうと云ふたやうなアンパイ、更にまた是れ雲居の羅漢とある、これは雲居寺の羅漢堂に安置してある羅漢のうち、大肩鼻の高いのがあるので、都べて高慢なことを言ふ者のことを雲居の羅漢と云ふのが此時代の俚諺であつたと申すこと、果して黃檗が斯ういふたのが高慢であらうか大言であらうか、それは後に分ることになる、時に僧あり出で、云く只諸方の徒を匡し衆を領するが如き又作麼生此僧は唾酒糟黨の代表者と見える、あなたは大唐國裏に禪師と言ふべき者が一人も無いと言はれるけれども、隨分處々方々に立派な御寺があつて、多くの坊さんを集めて坐禪たの、接心だの、入室だの、工夫だのといふて居るのが幾らもありますが、あれは何としたもので御座る、只一言に禪師なしとは申されますまいと突つ込んだ、着語にまた好し一撈を與ふるにと此僧を擲掄した、又機に臨んでは恁麼ならざるを得ず、斯様な場合になつては是非とも斯うなければなるまいと益々おだてる、さすがに黃檗もコレには閉口かと思へば、一向平氣で巽云く禪なしとは道はず只是れ師なし、只此の一言が此一則の公案の眼目ぢや、そなたは禪師なしと云ふことを何と聞いて居るぞ、禪といふものは宇宙に先立つて有り、萬物滅盡しても無くならないものであるから禪が無いとは言はぬぞ、只是れ師なし、其禪といふものは人から教へられるものでも無ければ人に教へることの出来るものでも無い、それぢやに依て禪の師といふ者は無始劫來未來永劫までも決して有るべきはずのものでは無い、然る



に何處にか禪を授ける師匠でもあるかのやうに思ふて、處々方々の酒の糟を貰ふてあるくと云ふは、何たる卑劣なことであるぞと云ふのが、黄檗禪師の佛祖の大機を掌握に歸せしめて向上の機を接する所である、圓悟の短評に直に得たり分疎不下、何だか申しわけが立ちさうも無いぞと云ひ、又龍頭蛇尾の淡と抑へたやうに聞えるが、これは吾々お互ひに向つて更に大疑團を起させやうとの圓悟の大慈大悲ぞ、畢竟するところ師教を待つべからざるの禪とは果して何物ぞ。

**頌** 凛々孤風不自誇 猶自不知有 端居寰海定龍蛇 也要別編素

分大中天子曾輕觸 說什麼大中天子 三度親遭弄爪牙 也也要白

死蝦蟆○多口作什麼○未爲奇特○猶是小機巧○若是大機大用現前盡十方世界乃至山河大地盡在黃檗處乞命

雪竇の此の頌を圓悟が評して、黄檗の肖像の讚のやうであると言はれてある、本則を直接に頌したのでは無く、全く黄檗の平生を頌出したのである、凛々たる孤風自から誇らず、身のたけ七尺にして額に圓珠あり、宣宗皇帝をビシヤリとなぐりつけた有様が見えるやうぢや、凛々は清寒のすがた、孤風は卓立して居る様子、そうして自ら誇らずと宏量大度喜怒色に顯はれないといふアンバイ、老木の梅花が風雪の間に香氣を放つて居るやうに見える、着語に猶ほ自ら有ることを知らず、誇るの誇らないのと云ふ沙汰ではない、黄檗自身には己れに此の如き天稟あることを御存知ないのである、本分の境界は都て此の如きものよ、水みづから物を濕ほす事を知らぬ、火みづから物を焼く事を誇りはせぬ、仁義でも忠孝でも本統のものには痕

跡がないぞ、また是れ雲居の羅漢といふは大層に鼻が高いぞと冷かした、これは雪竇の此一句が能くも黄檗を僅々七字に言ひ盡したぞと褒めたのであると見える、寰海に端居して龍蛇を定む、之は更に黄檗の大機大用を頌出した、寰海とは寰は寰中と申して幾内といふも同じことで、天子の直轄の處を云ふ、海は海内で一國全體を示す、今黄檗の立場は實は海寰ぐらゐることでは無い、十方法界に端居して居るのぢや、天子が九重の奥に手を拱して居て萬乗の國を治め億兆の民を安んずる如く、龍蛇を定む、謂ゆる人天の命脈指呼に受くで、一切衆生の迷悟昇沈を判断する力があるといふのぢや、圓悟が也た縑素を別つを要すと着語した、縑素といふは常に僧俗のことに使ふこともあるが、今は只雪竇が黄檗に龍蛇を定むる眼があるのと云ふたのを聞き答めて、本統に其うかナ能く眞偽を取調べて見ねばならぬぞと云ふたものと見るが好いと申すことぢや、也た兒白分明ならんを要すとあるのは、これは前の着語の注を後人が書入れたのを誤つて混じたのであるかと思はれる、大中の天子曾つて輕觸す、それには確實なる證據があると云ふので、龍蛇を定むる様子を故事を引いて證明せられた、大中といふのは唐の宣宗皇帝の年號である、宣宗は最初一旦出家して香巖志閑禪師の弟子となり、後に鹽官の齊安國師に參じて居られた頃黄檗が國師の會下の首座であつた、或日の事であつたが黄檗が禮佛して居る處へ往つて「佛に着て求めず法に着て求めず衆に着て求めずと云へり禮拜して何の求むる所かある」と問ふた、この問は一往尤なこと前にもあつた禪といふものは師匠から教へて貰ふべきものでは無いと言ふのが當然であるから、佛に求むべきでも無ければ法に求むべきでも無い、然るに今黄檗が頻りに佛を禮拜して居るに依つて何を求めるのであるぞと問ふ



たのである、ところが黄檗の答が面白い、佛に着て求めず、法に着て求めず、衆に着て求めず、常に禮すること、是の如しと言はれた、こゝが即ち黄檗の黄檗たる所以、イヤ佛法の佛法たる所以を説き盡して老婆深切な所であるけれども、宣宗には尚ほ悟れなかつたと見えて、更に禮を用ひて何か爲んと云ふと、黄檗はビシヤリ宣宗の横面をなぐりつけた、宣宗驚いて太龜生、亂暴なことをする男ぢや、と云ふのを、黄檗が這裏河の所在ぞ、龜と説き細と説く、亂暴だの丁寧だのと云つてゐる所では無いぞと言ひながら、又ビシヤリ、これは幾らなぐられても致し方が無い、すべて何事でも求むる所があつては本統の事にならぬ、たとへば君に忠義を盡し親に孝行をすると云ふても、もとより何も求むる所のあるべきものでは無い、然るに汝は親に孝行をする君に忠義を盡す全體何の求むる所があると問ふものがあつたならどうであらうぞ、火に向つて何の求る所あつて焼くぞと問ふたならば、求むる所なくして常に焼くこと此の如しと答へるであらう、それを更に焼くことを用ひて何かせんと云ふたらどうであらう、ビシヤリとやられるのは當然ではあるまいか、さて宣宗と黄檗との話はまだ面白いこともあるが其れはお預りと致して、今此頌に會つて輕觸と云ひ三たび爪牙を弄するに逢ふと云ふたのは此事である、大中の句の着語に何の大中天子とか説かんといふたのは、此の黄檗にかゝつては大中天子どころではない、宇宙も虚空も亦ビシヤリとなぐりつけるであらうぞと云つたアンバイ、又たとへば太なるも也た須からく地より起るべしといふは、太とは泰山のことで、泰山といへば日本の富士のやうに此上も無い山としてあるけれども、山が幾ら太くても地の上の疣でしかない、又更に高きも天あるを奈何せん、幾ら高いといふても其上に天があるぞといふたの

で、天子が何ほど尊とくても佛祖が如何に勝れてあつても、各自本具の妙心から見れば何でも無いものと云ふのである、又結句の着語に死蝦蟇これは宣宗を罵つたので、三たびビシヤリとやられた男振のわるさ、死んだ蝦蟇のやうで見られたものではない、多口にして什麼をか作す、一體に宣宗はおしやべりであるから役に立たぬと仰へつけ、猶ほ是れ小機巧これは黄檗が宣宗をなぐりつけたぐらゐなことは何も全力を盡したわけでは無い、ほんの小細工に過ぎないので、若し是れ大機大用現前せば盡十方法界乃至山河大地盡く黄檗の處に在つて命を乞はん、もしも本統に力を出したならば天地も萬物も皆なぐりつけられるぞといふのであるが、是の如きの力を以て千年以前支那の黄檗山に居た希運老僧の事とばかり見てはすむまい、即今お互ひに其力をどうしたものぢや、一説に此の若是云々の着語は前の小機巧の注で後人の加へたのであらうと云ふことぢや、其うであらう。

第十二則 洞山麻三斤

垂示 殺人刀。活人劍。乃上古之風規。亦今時之樞要。若論殺也。不傷一毫。若論活也。喪身失命。所以道向上一路。千聖不傳。學者勞形。如猿捉影。且道既是不傳。爲什麼却有許多葛藤公案。具眼者試說看。



都べて事物は皆兩面のあるものであるから、兩面互ひに宛轉無礙にして始めて事物の真相實用が顯はれるのである、今は刀劍と殺活とを以て其道理を説き明かされた、殺人刀といふは消極の方で空とも云へば無とも云ふ、事業の上で云へば破壊する方、掃蕩する方、抑へ付けて働らかせない方、活人劍と云ふは積極の方で、色とも云へば有とも云ふ、事業の上で云へば建設する方、成立させる方、打ち任せる自由にさせる方、かやうに二方面あるけれども、共に銳利にして間に髪を容れることを許さないのは同じであるから、一つの刀劍に譬へたのである、さて斯く兩面相依て事物を圓滿ならしむることは、乃ち上古の風規で三世の諸佛も歴代の祖師も皆同様の風俗とも規則とも云ふべきぞ、佛祖に限つたことでは無い、花の咲くも紅葉の散るも風の吹くも雨の降るも、皆同一風規である、亦今時の樞要、むかしばかりでは無い今の時節でも、これが樞機である肝要であるといふのぢや、さりながら殺と聞けば死ぬことのやうに思ひ、活と聞けば生きることのやうにばかり思ふであらうが、若し殺を論ずるも一毫も傷けず、殺といふのが直に活であるので、之を經文には空即是色とも平等即差別とも云ふてある、秋に木の葉の散るのは新芽を出すのであると云ふが其うであらうよ、若し活を論ずるも喪身失命、之を經文には色即是空とも差別即平等とも云ふてある、十五夜の圓くなつたのは缺け初めである、圓と缺と望と晦との姿はかはつても、月はどこまでも何時でも月よ、所以に道ふ向上の一路千聖不傳と、之は盤山寶積禪師の古語を引いて證據にした、向上の一路すなはち眞實の道といふものは、如何なる聖人でも賢者でも之を他人から傳ふることも出来なければ、又他人に授けることも成らぬものぞ、然るに滔々たる世上の學者だちが文字言句や技倆動作を以て、

眞實の道を得やうと思ひ、形を勞して徒に葉を摘み技を尋ねて居る、譬へて見やうならば恰かも猿が水中の月影を促らへやうとして騒ぎ廻るやうなものよ、且らく道へ既にはれ不傳ならば何としてか却て許多の葛藤公案あるや、いかなる聖人も傳へることが出来ぬといふなら、言句も技倆もないはずであるのに、何故むかしから一切經を始めてとして多くの葛藤公案があるのであるぞ、具限の者は試みに説く看よ。

**本則 舉僧問洞山如何是佛**

鐵蒺藜○天下 納僧跳不出

**山云麻三斤**

灼然○破草鞋○指

槐樹罵三柳  
樹爲秤鏡

洞山の守初禪師と申して、雲門大師の法嗣である、其人が或時臺所で麻の目方を掛けて居たところへ、一人の坊さんが往つて、如何なるか是れ佛、佛といふはどんなもので御座るかと問ふた、此の問は昔も今も屢々ある問題である、古人にも色々なる答があつて學人を惑はせることであるが、諸君は何とお答へなさるぞ、他はともあれかくもあれ、洞山は麻三斤と答へた此麻は目方が三斤あるといふのぢや、麻が佛であるか、佛が麻であるか、一體に何の爲に佛を尋ねてあるくのであらうぞ、佛といふは麻三斤に限るか、米一升は如何、大根一本は如何、味噌一樽は如何、參究の範圍が甚だ廣いぞ、如何なるか是れ佛の間に、圓悟が鐵蒺藜と着語した、これは戦争の時に鐵丸に針を植えたやうなものを路へ振りまいて置いて、敵兵を近づけぬやうにする物のことだそうな、此の如何なるか是れ佛といふ問には、如何なる勇兵強卒でも容易に寄り附けまいぞといふたのぢや、そこで更に天下の納僧も跳不出いかなる坊さんでも斯の大問題に對して



は手も足も出されないと先づ間に力を入れて置いて麻三斤の答には先づ灼然と着語した、ハツキリと能く分りました、眞佛の光明いかにも赫灼たることで御座ると揚げて、更に破草鞋と抑へた、破れた草鞋が何の用に立つものぞ、麻三斤と破草鞋の價値高低如何、又更に槐樹を指し柳樹を罵しりて秤鎚と爲すといふた、風外老人が此の着語を評して、江戸の輕口に此野郎打殺して熊の膽を取るぞと云へばナニ馬ぢやあるまいしと云ふたやうなことぞと言はれてある、如何なるか是れ佛に答へて麻三斤と云ふたのが、如何にも木に竹を接いだやうなことであるが、そこが此公案の骨目とする所であると申すことぢや、一體に都べて狂犬が塊を逐ふて走るやうに、佛と言へば直に佛に附いて廻はり、麻と聞けば直に麻に付き廻るから、洞山や雪竇や圓悟に色々とからかはれるので有らう、然らば雪竇は此の公案をどう見て居るぞ。

**頌** 金鳥急 左眼半斤○快鶴起 玉兔速 右眼八兩○短 善應何曾有輕

觸 如三鐘在扣 展事投機見洞山 自領出○同坑無異 花簇簇錦簇簇 領過○依舊一般 南地竹兮北地

木 公案○頭上安頭 因思長慶陸大夫 癡兒率伴○山僧也 解道合笑不

合哭 呵○呵○蒼天夜 唳 嘯○〇〇便打

金鳥急に玉兔速、これは三言二句で、金鳥玉兔といふは太陽の中に金の鳥が居て月の中に玉の兎が居ると

いふ支那の昔話を以て日月を言ひあらはした、其日月が代る／＼に矢より早く過ぎ去ることを借りて来て、洞山の答への電光石火の如く麻三斤と言はれたのを形容したのである、唯麻三斤の答の速かな所を形容したばかりではなく、如何なるか是れ佛の間に對して雪竇は金鳥急にして玉兔速なりと答へたものとも見るべきである、麻の三斤と烏兔の急速と是れ同か是れ別かとも參究して見ねばなるまい、圓悟は金鳥急に着語して左眼半斤と云ひ、玉兔速には右眼八兩と云ふた、四文目を一兩と云ひ、十六兩を一斤と云ふから、八兩が半斤で半斤が八兩ぢや、どちらを見ても目方が同じであると云ふのであるが、更に麻三斤は六十四文目とも云ふべきであるやら、又快鶴趕へとも及ばず、金鳥の急なることは快活なる鶴、すなはち非常に飛ぶことの早い隼鷹ハヤブサが命がけになつて逐ひかけても到底おひつくことは出来ぬ、大抵の者は金鳥と聞けば直に太陽に付き廻り、太陽の火焰の裏に身を横たへて喪身失命するものもあらうぞと注意せられた、又玉兔と聞けば月に取り付き廻る娥宮裡イナヅナに窠窟を作すものもあらうと、輒もすれば言葉に付き廻る者を誡められた、姮娥の事は淮南子に見える怪談で、羿といふ人が西王母から不死の薬をもらふたのを其妻の姮娥が盗み之を飲んで仙人になり月の世界へ赴いたといふのである、善應何ぞ曾て輕觸あらんといふは善應はよき答で、洞山が佛の間に麻三斤と答へたのは如何にも善い應答である、何ぞ曾て輕觸あらんコレは中々輕々しく相手になつたわけが無いといふのである、そこで圓悟が鐘の扣に在るが如し實に此の麻三斤の答は鐘が鐘木にあたつて忽ち鳴り出したやうである、又谷の響を受くるが如し彼の山彦の聲に應じて響くやうであると着語した、これで麻三斤の頌は済んだので、あとは此公案を參究する學人の心得を示されたの



である、事を展べ機を投じて洞山を見れば跛鱉盲龜空谷に入る、之は洞山が或時の上堂に「言は事を展べず語は機を投ぜず」と言はれたことがある、すべて言語といふものは間接に其事柄機合の様子を大凡に示すことは出来るけれども、決して言語を以て直接に其事を展開し其機に投契する事の出来るものでは無いといふのである、然るに若し此の洞山の答、すなはち麻三斤といふ言葉に付き廻つて其れで洞山の洞山たる所を見やうとしたならば、恰かも跛鱉や盲龜が空谷に入つたやうなもので、進退に窮することにならうぞよと吾々お互ひに對しての注意である、それに圓悟が着語して錯て定盤星を認む、盤星といふは權衡の目方を示す目盛のことで、これは其の品物次第に重ければ重いやうに輕ければ輕いやうに決して其の分銅の留り處が一定したものではない、然るに其れを一定したものゝやうに思ふのが即ち錯つて定盤星を認めるので、柱に膠するとか杭を守るとかいふのと同じ意味である、今も其通り佛と云へば佛に取り付き麻三斤と云へば麻三斤に取り附いて居たならば、決して洞山を見る事が出来ないぞといふのぢや、更に自らは是れ圓悟に見るといふた、圓は阿闍耶の略で和尙といふも同じこと、今は雪竇を指したのと見える、イヤ汝僧圓悟などは事を展べ機を投じて洞山を見るやうなことは致さぬが雪竇圓は御自分で左様に見られるのかナと冷かして吾々後進の者を警誡されたのぢや、それと同じ筆法で次の句に自領出去といふた、自領出去といふは他人の世話をやくよりも御自分で持つて往かつしやれと云ふ俗語であるさうナ、同坑に異士なし一つ穴を幾ら堀つたからとも異つた土のありやうは無いのさと云ふ、雪竇お前も御同様よと冷かす、何誰か僞か鶴子を打て死せる一體に何者かお前方の持つて居る隼鷹を打ち殺して跛鱉盲龜にしたのであるぞ

決して他人の仕わざではあるまい、よく自分の脚下を省みるが好いぞと、之は全く吾々後世の參學者へまでもかゝるお叱り、花簇々錦簇々、これは開福の德賢禪師と云ふ人に或る僧が洞山麻三斤の意旨如何と問ふた時、德賢禪師が花簇々錦簇々と答へて更に會すやと言はれた、然るに其僧が不會、どうも合點がゆきませんと云ふたとき、德賢が更に南地の竹北地の木と言はれたことがある、雪竇が今其を引き來り麻三斤の意旨を明かす材料とせられた、其實は花や錦に限つたことではない、山層々も水潺々も猫ニヤ／＼も犬ワン／＼も、盡天盡地恐らく麻三斤の常體ならぬものは無い、圓悟が兩重の公案と云ふたは其れは德賢から聞いたのであつたが、二重に賣るのが一狀に領過す德賢も雪竇も同罪であるから一つ宣告よ舊に依て一般いつでも同じことかと、此の着語も亦た舊に依て一般であるが、是等は後人の語が混入したので悉く圓悟の着語とは思はれない、更に南地の竹の下に三重も也た有り、洞山と德賢と雪竇と三人ともに麻三斤といふたり、金烏急と云ふたり、花簇々といふたり、又南地の竹と云ふたりして四重の公案ぞ頭上に頭を安するのぞと重ね／＼の着語で古人の同道唱和を示された、それに就て思ひ出したと云ふので因て思ふ長慶と陸太夫道ふことを解す笑ふべし哭すべからず、これは唐の陸亘といふ人は南泉禪師の弟子で在家ながらに中々たしかな悟道者であつたが、師匠の南泉が死んだといふことを聞いて、南泉の寺へ往つて追弔の供養を營み呵々として大笑したといふことである、そこで其寺の院主すなはち執事が之を聞き咎めて、お前は先師と師弟の間柄であるから、哭すべきが當然であるのにゲラ／＼笑つてゐるとは何事で御座ると云ふた、さうすると陸亘は院主に向つて道ひ得ば哭せん、貴僧の見處を一言いふて見なされ其の一言が果して



佛祖の道に契ふたなら拙者が哭するで御座らうと云ふた、然るに其院主の僧は閉口して一言もない、そこで陸亘は聲を揚げて嗚呼蒼天々々、先師世を去ること遠しと云ふて大に哭したといふことである、それを後に長慶和尚が聞いて笑ふべし哭すべからずと評したのを、今雪竇が引いて来て、都て眞實の道は人情分別を以て判断の出来るものではない、陸亘太夫が笑ふのも哭するのも、長慶がそれを笑ふべし哭すべからずと判決したのも、皆人間の常情を以てあれのこれのと幾ら考へて見ても、決して其當を得られるものではない、今この麻三斤も亦た其通りで文字言句の間に人情分別を加へて悟らるべきものではないぞと云はれたのである、着語に癩兒伴を牽く、俗諺にどん栗の長くらべといふのと同じ事で、乞食が乞食仲間を引きつれてあるくやうに、雪竇が洞山徳賢その上に長慶に陸亘とお連れが多い、山僧も也た恁麼雪竇も也た恁麼御賛成御同感の仲間が幾らもあるぞといふた、呵々といふたは笑ふべしに答へたので蒼天夜半に更に冤苦を添ふと云ふたは此の笑ふべし哭すべからずの意旨が悟れない者は、歎息の上に悲歎をますであらうと學者を警誡したのに見える、嘆、この字は禪語中に時々見る字であるが、此字は提起の意でコレを見よといふた所にも使ひ、又冷遇する心で俗に鼻であしらふといふやうな所にも使ひ、又微笑の貌でニコリと笑ふ意味もあると云ふ、今、こゝでは果していづれであらうか、圓悟は評唱の中に雪竇還つて洗得脱すやと云つて其の嘆と云ふた、御自身いかゞで御座るとなじり、大智和尚は只この一字妨げず會し難しと云ふてある、天桂和尚は是れほどに言ふても分らないかと云ふ意味で、嘆といふたのであると言はれた、着語に咄、今更に其やうなことを言ふなと叱つた、是れ什麼ぞ、それは一體何ぢや、もはや此上は口では言は

ない手でピンヤリと便ち打つ。

第十三則 巴陵銀碗裏

垂示 雲凝大野。徧界不藏。雪覆蘆花。難分。朕迹。冷處冷。如冰雪。細處細。如米末。潑潑處。佛眼難窺。密密處。魔外莫測。舉一明三。即且止。坐斷天下人。舌頭作麼生。道且道。是什麼人。分上事。試舉看。

初めの雲と雪との一對は、平等一味の本體すなはち眞如法性の無差別なる様を述べられた、中に就て雲大野に凝ると云ふは法性の盡十方法界に充滿してゐる景況、無限の空間そのまゝに雲ならざる所は無いに依つて、徧界不藏である、露堂々、明歴々、いさゝかも覆ひ藏す所なく全體丸出である、次の句に雪蘆花を覆ふて朕迹を分ち難し、其一味平等なる有様は白妙の雪が白妙の蘆花の上に積つたやうで、白いものに其の差別を見分けることが出来ぬ、朕といふは吉凶の兆を朕といふと申して、其きさしは確かに有りながら未だ形にあらはれないこと、迹はアトといふ字で已に其形が明瞭にあらはれたのであるが、今は雪と蘆花と全く一つかといへば、雪は雪なり蘆花は蘆花なり、迹は見えねども、朕はある、然らば孰れが雪の色



で孰れが蘆花の光りかといへば、全く同一色にして其の迹を認められぬ、此際に於て凡聖だの迷悟だの、善惡邪正だの、地獄極樂だのといふ差別はないぞ、楮又更に其の景状を形容して見れば冷處は氷雪よりも冷かに細處は米末よりも細かなり、凡そ冷たいものといふたら、氷雪ほどの冷たいものは無い、凡そ細かいものといふたら米末ほど細かいものは無いと人間の情識では思ふて居ることであるけれども、今此の徧界不藏にして朕迹を分ち難い所の平等一味なる本體は、冷といへば氷雪よりも冷で、細といへば米末よりも細であるぞといふ、之に例して廣いといふたら虚空界よりも廣く、高いといふたら九霄よりも高い、結局形容すべき詞は無いといふことも知られるのである、それ故に其深々たる處は三世諸佛の法眼を以ても窺ふことが難く其密々たる所は一切の邪魔外道の徒が如何なる神通力を逞しくしても決して測ることの出来るものではない、此に至つては舉。一。明。三。すなはち一を舉れば三を明めるといふ性燥伶俐の漢はさて置き、天下人の舌頭を坐斷して如何なる人も最早ヤノノともヒヤノノとも口出しの出来ないやうに作麼生か道はん、且らく道へ是れ什麼人の分上の事ぞ、それは如何なる人の仕事であらうぞ、試みに舉。看。よ。

**本則** 舉僧問巴陵如何是提婆宗 白馬入蘆花○ 巴陵云銀碗

裏盛雪 塞斷備叫喚  
○七花八裂

これは岳州の巴陵といふ處に新開院といふ寺があつて、顯鑒禪師といふが住して居られた、其人は雲門大

師のお弟子で、當時名高い人であつたから、名を言はないでも巴陵とさへ言へば通つたものと見える、是れより先きに江西の馬祖大師が、凡そ言語あるは是れ提婆宗と云ふことを言はれたことがある、それが當時參禪者の一問題となつたのを、此の巴陵禪師が弟子たちに示された三點語といふものの中の第三點に、「如何なるか是れ提婆宗、銀碗裏に雪を盛る」と言はれてある、是れが一時の大問題で、難透の公案であるといふことであつたのを、雪竇禪師が頌古百則の中の一題とせられたものと見える、然らば其の提婆宗といふは如何なることかといふに、印度に於ける第十五祖、すなはち達磨大師より十四代前の祖師を迦那提婆尊者と曰ふ、此人は初め外道の碩學で、中々豪傑であつたが、第十四祖の龍樹菩薩に教化せられて遂に附法藏の祖位を嗣ぐ人となつたが、非常に議論が達者で且つ能辯で、如何なる外道も皆降伏せられ、一時これを提婆宗と名けて大層な勢ひであつたと云ふことである、然るに元來眞實の佛法は議論や辯説を超越したもので、即ち教外別傳不立文字であるべきを、第十五祖は議論辯説を以て宗風を作したのであるから、そこで馬祖の凡そ言句あるは是れ提婆宗といふ事も起つたので、更に其れが言句と宗旨とは如何なる關係であるかと云ふ疑問となつたのであらうと思はれる、我國の曹洞宗祖承陽大師は言語道斷といふは一切の言語なり、心行所滅といふは一切の心行なりと言はれたことがある、之を俗譯すれば「何とも言へないと云ふのは何とも言へるのぢや」と云ふことになる、其の何とも言へないと云ふこと、何とも言へると云ふことは、是れ同か是れ別か、面白い問題ではないか、圓悟は如何なるか是れ提婆宗といふ本問題の下に着語して白馬蘆花に入ると云ふた、これは巴陵が銀碗裏に雪を盛ると答へるのに先立ちて歌がるたで鼻



をこすつたような遣りかたぢや、更に什麼と道ふぞと答めた、提婆宗などと云ふ宗名は是れまで聞いたことも無いが、さなきだに小乗だの大乗だの、顯教だの密教だのとゴタ／＼したものの多い中に、餘計なことを言はぬが好いぞと云ふたやうなアンパイ、もう一つ點とやつた、此點を點破と見れば此の間を排斥したのであが、點定と見れば前に什麼と道ふぞと答めて置いて更に其間も亦面白からうと合點した様子にも見える、そこで巴陵の銀碗裏に雪を盛る、圓悟の白馬蘆花に入るも、垂示の雪蘆花を覆ふも皆同工異曲で、謂ゆる徧界不藏のところ、に踪迹を分ち難い景狀ぢや、かつて洞山悟本大師は、其著の寶鏡三昧歌の中に「銀碗に雪を盛り明月に驚を藏す」と言はれ、其次の句に之を説明して「類して齊しからず混すれども處を知る」と言はれてある、宇宙萬象の眞理實相只此一句に言ひ盡されてある、之を通俗に解釋すれば、すべての倫理も宗教も、乃至政治も法律も皆此の山脈の小起伏に過ぎぬ、圓悟の着語に備の咽喉を塞斷す、誰も彼も此一句に異議を容れることは出来ぬぞと云ふのぢや、七花八裂と云ふた七通八通と云ふも同意義であると古來多くの人は見て居るが、風外老人は其うでは無い、此一言の答で提婆宗の議論が七花八裂に紛碎されたぞと云ふて居る。

**頌老新開** 千兵易得一將難 **端的別** 是什麼端的 **解道銀碗裏盛**  
雪 **天邊月** 遠之遠矣 **九十六箇應自知** 兼身在內 **不知卻問**  
案 **提婆宗** 道什麼 **提婆宗** 這裏 **赤旛之下起**

清風

百雜碎 打云 打著了也 備

さて雪竇の頌は初め三言二句、あと七言五句の歌體である、老新開の新開は前に申した如く岳州巴陵の新開院で顯慶禪師の住持して居た寺の名である、それに老の字を加へて巴陵和尚を尊敬し、端的別なりと稱讚した、端的は眞實の義であるから之を日本の俗語で云へば、新開老人は本統に別段であると云ふたのである、圓悟も相鐘を打つて千兵は得易きも一將は求め難し、どん栗の長くらべといふやうな和尚達は幾らもあるが巴陵の如き宗匠は實に得難いとほめた、けれども直に其口で多口の阿師と抑へた、餘計なことを饒舌すぎる人だと云ふたのである、是れは巴陵が存命中に鑿多口と綽名されて、顯慶和尚は口の多い人であると評判されてあつたと云ふことである、彼の迦那提婆が議論辯說に長じて居たといふのと、おのづから宿縁のあるわけかも知れぬ、第二句の下に圓悟が是れ什麼の端的ぞと雪竇が端的別と云ふたのを聞き答めて、何が端的であるぞと抑へたものとも見られるが、又は門下後生に對して雪竇が巴陵を端的別と云ふた其の端的の處はどこで有るぞ、能く審細に參究するが好いぞと注意せられたとも見える、頂上の一着夢にも見るやまた未だしや、巴陵禪師の頂門の一着、その見識の非常に高い處は、夢にも見ることは出来まいぞと策勵せられた、然らば其の端的別なる點は何處に在るぞと云ふに、道ふことを解す銀碗裡に雪を盛ると、此の提婆宗といふ問題に就ては古人の答案が色々あるけれども、今此の巴陵の答は實に特別であるぞと云ふ、これで本則は頌了つたので、あとは例の雪竇の拈弄ぢや、九十六箇應に自から知るべ



し、此の巴陵の師匠の雲門大師に向つて或る僧が如何なるか是れ提婆宗と問ふた時に、雲門は之に答へて九十六種汝は是れ最下の一種と言はれたことがある、九十六種と云ふは即ち釋迦在世のころ、印度に九十六派の外道があつたと云ふことで、つまり多くの外道の種類と云ふまでのことである、前に申した如く、提婆尊者も元は外道の一人であつたのが、龍樹大士の弟子になつてからは多くの外道を説き伏せて、如何なる論議にも負けたことが無いと云ふのである、しかし其の九十六種のみかは八萬の大衆も三世の諸佛も、此の一大事は自から知るの外は無い、他人に問ふて教へてもらふて持の明くべきことでは無いと云ふのぢや、吾々お互ひの尤も身にしてみても参究すべき所ぞ、そこで圓悟は身を兼ねて内に在りと着語した、自分の身も亦た其九十六種の仲間よと云ふのである、更に闍黎還つて知るや、闍黎とは前にも有つたが阿闍黎の略語で、人を敬つて稱するのであるが、それが平生の言葉になつては御前がとか貴様はとか云ふやうなことになつて、今は雪竇にむかひ、御前は能く知つて居るなと言ふたのである、更に之を抑へて、一坑に埋却せよ、イツソ九十六種も雪竇も一つ穴へ埋めてしまへと云ふのぢや、知らずんば却て天邊の月に問へ自から知ることが出来ぬならば天邊の月に問ふて見る、これも古人が如何なるか是れ提婆宗と云ふ問題に答へて「天邊の月に問取せよ」と言ふたのがあると言ふので、それを引合に出されたのである、自から知ることが出来ないで月に問ふたら、月が果して何と答へるであらうか、其月の答が解れば自から知つたと同じ價值があるであらう、行誡上人が般若といふ題で「何をかは照せるものと冬の夜の嵐のあとの月に問はゞや」と詠じた歌があつたが、今は恰かも同じ場合のやうである、圓悟が遠くして遠しと言ふた、天

邊と云ふては大層に遠いと冷かした、遠くて問はれぬなら、眼上の眉毛に問ふて見よ、脚下の草鞋に問ふて見よ、自領出去雪竇は天の月に問へなどと言ふが、圓悟には問ふ必要がないに依て雪竇お前が問ひたければ自分で問ふが好いと云ふたのぢや、空を望んで啓告す、コレは天上を抑いで月に問ふ形容、すべて此處の着語は抑へる方のばかりである、然るに雪竇はコ、で更に一轉して提婆宗提婆宗と唱へ出して、十方法界只此の提婆宗の一點張りとしてしまふた、九十六種も雪竇も圓悟もイヤ三世諸佛も歴代の祖師も皆悉く提婆宗ならぬものは無い、圓悟が什麼と道ふぞと咎めて山僧は這裡に在り、十方法界悉く提婆宗の門徒のやうに雪竇は言ふが、山僧すなはち圓悟は此處に居ると云ふた、更に満口に霜を含むと云ふは、霜を口一杯に含むことが出来ないと同様に、モウ此上には何とも言ふことが出来まいぞと云ふのである、然るに雪竇は更に聲ほがらかに唱へて曰く赤旛の下清風を起す、赤旛と云ふは昔し印度で外道と佛弟子と論議をする時に、勝つた者が赤い旛を建て、凱歌を奏する慣習であるさうな、そこで今雪竇が提婆宗提婆宗の號令の下に宇宙萬象を悉く征服して大勝利の赤旛を建てたのであるから、宇宙萬象そのまゝに皆赤旛の下に錦簇々花簇々で、其の風光いはんかたなき有様を清風を起すといふ一言で諷ひおさめたのである、そこで圓悟は百雜碎と云ふた、圓悟はどこまでも圓悟の見識で、雪竇の赤旛を百雜碎と打ち砕いた、更に打着了也それ打ち砕いてしまふたぞ、コレは後人の妄添であらうかと思ふ、備且らく去て頭を斬り髻を截り來れ、備が爲めに一句を道はん、頭と云ひ髻といふ皆凡夫の智解分別、それを悉く斬り去り截り來りて始めて此上の一句を聞く分があらうと云ふのぢや。



第十四則 雲門對一說

**本則** 舉僧問雲門如何是一代時教直至如今不了○座 雲門云。

對一說無孔鎖鑰○七花八一  
裂○老鼠咬○生靈一

此の一則には圓悟の垂示が無くて、直に本則である、雲門大師のことは前にも出て有つたが、青原行思禪師七世の孫で、達磨大師からは十三代にあたる、雲門宗の高祖で名は文偃と曰はれた人である、如何なるか。是れ一代時教、斯う雲門に問ひ掛けた僧は謂ゆる教家の僧で、華嚴とか天台とか、自力とか他力とか、いづれ經論の言葉に着き廻はつて居る心から、禪宗の教外別傳不立文字などと唱へるのを心にくく思ひ、さすがに釋尊の一代時教と問はれたならば、それを一言に言ひこなすわけには往くまいと思ふやうな所から、かやうな問題を提出したのであらうと云ふことである、實に之を教家の方で解釋すると云ふことになつては大層な事である、一代と云へば釋尊の一生八十年間、その中で五十年の說法、之を五時に分けたり三時に分けたり、教家の祖師だちが色々議論をして居るのが即ち時教である、唐の開元年間には已に五千四十八卷と云ふた一切經、追々と増して今は一萬に近い經文、それを今こゝで雲門大師に一言に答へさせやうと云ふのである、圓悟は此の間に着語して直に如今に至りて了せずと言ひ、又つゞけて座主不會と言ひ又葛藤窠裡と言つた、座主と云ふは禪宗以外の經論ばかり研究して文字言句の間に佛法を求めて居

る人だちのことで、其の謂ゆる座主連中は葛藤窠裡に埋もれて居るのであるから、何程研究しても直に今に至るまで不了である不會である、氣の毒なことよと抑へたのである、しかし教家者流は且らく惜く、自から教外別傳の參禪をすと稱する人だちは如何であらう、華嚴經には微塵の裡には大經卷が有ると言ひ、金剛經には一切の經教みな斯の經より出づと言ふてある、斯の經と云ひ微塵と云ふは、彼の釋迦老人が五十年の間に饒舌した謂ゆる一代時教の中であらうか有るまいか、法然上人は專修念佛を勧めた人であるけれども、人々各自に人々各自の一切經があると言はれたさうな、吾々お互ひ人々各自の一代時教、はたして如何と參究して見ねばなるまい、昔般若多羅尊者（達磨大師の師匠）は人が責僧はナゼ御經を讀まれないかと問ふた時に、吾は日々には是の如き經を轉ずること百千萬億卷と言はれたこともある、是の如きの經とは何であらう、顯教か密教か、自力か他力か、大乘か小乗か、行住坐臥、運作顛倒、腹が減つては飯を食ひ、喉が渴けば水を飲む、それが其の儘に是れ我が一代時教と言ひ得る時節が無ければならぬ、雲門大師は果して何と答へられたぞ、對一說。コレは何と云ふことぞ、一に對して説くと讀む人もあれば、對する一説と讀む人もあり、一説に對すると讀む人もあらうが、對とは何に對するのぢや、一とは何のことであるぞ、説とは何うすることであらうか、其のやうな字引の穿鑿をして居る場合にはあるまい、何にかは知らんが對一説が一代時教ぞ、五千四十八卷八萬四千の法門が只この三字ぞ、只この三字これが頓教か漸教か、聖道門か、淨土門か、圓悟は無孔の鐵鎚と着語した、コレは何とも手の着けやうの無いことを形容した宋朝の俗語であると云ふことぢや、七花八裂は、此の答の自由自在をほめたと言ふ説もあるが、さう



では無く破壊の形容であるから、此の對一説の一言に一代時教の妄想が紛碎し盡くされた意味とも云ふ、老鼠生薑を咬むは吞吐不下といふ事で、吞むことも出来ず吐くことも出来ないといふ形容の俗語である云ふことちや、考へられた鼠が生薑の辛いのを咬んだなら何のやうな顔をするであらうぞ、五時の四教のと妄分別して居る座主連中が、此の對一説を聞いて吞むことも吐くことも出来ない時の顔色も思ひやられるぞと云ふのである。

**頌對一説** 活潑々々言猶在 **太孤絶** 傍觀有分豈有二態麼事 **無孔鐵鎚重**

**下楔** 泥糞洗土塊 **閻浮樹下笑呵呵** 四州八縣同道者方知

**昨夜驪龍拗角折** 非止驪龍拗折 **別別** 讚歎有分 **韶**

**陽老人得一椽** 在什麼處更有一椽又作麼生

初めは例の三言二句で、中に二字句をさしはさんだ歌である、雪竇慣手の筆法で、先づ第一に本則の骨子たる對一説を諷ひ出して、太だ孤絶と歎美した、圓悟の着語に活潑々々、之は誰も知つて居る通り鯛や鯉などのやうな魚が勢ひよく跳ね躍る有様、實に雪竇がこゝへ直に對一説と言ひ出した調子は、誠に活きて働いて居る、そこで更に言猶ほ耳に在り此の對一説といふ事を本則で雪門から聞いたのが、いつまでも耳に留まつてゐて忘れられないと圓悟非常に賛成の意を表し、又妨けず孤峻と實に此の一句は孤危峻峭で寄り附

けないと讚歎しぬいた、第二句の下に傍觀に分あり雪竇が雪門の對一説を太孤絶と稱揚した、其の見かたがサスガに雪竇であると褒め、更に其の孤絶さは何ぞ止だ壁立千仞のみならんやと相鎚を打つ、しかし例の語句に喰ひつき廻る者があるを恐れて、豈恁麼の事あらんや何も其のやうに褒めるほどの事も無いのさと奪つた、第三句に無孔の鐵鎚かさねて椽を下す、無孔は穴なしであるから穴のない鐵鎚は使ひやうがないのであるけれども、それに椽を下し柄を附ければ用立つ、今彼の如何なるか是れ一代時教と云ふ問題は甚だ難題であつて、謂ゆる無孔の鐵鎚で中々に手の附けやうも無いのであるが、それを何の苦も無く對一説と椽を下したる雪門の力量は大層なものであると頌したのである、圓悟の着語に錯りて名言を會すコレは雪竇の語句の餘りに巧みなるを裏面から許したので、無孔だの下椽だのと餘計なことを言ふたものぞと抑へ、更に雲門老漢もまた是れ泥裏一體に雲門が對一説と言ふたのが已に泥裏に陥つたので言詮に渉るべからざる眞乘を言句に掛けて、疵の無い玉に疵を附けたやうなものであるに、更に其れを雪竇が頻りに褒め立てるのは恥の上塗であるぞと云ふので雪竇も也た是れ粧飾と着語した、然るに雪竇益々面白さうに閻浮樹下笑呵呵と諷ふ、閻浮樹と云ふは天竺の古説の須彌山説に依れば、須彌山の南側に閻浮樹と云ふ大木があつて、其木が此の南閻浮提の天を蓋ふてゐると云ふのであるから、今其の樹の下で笑呵呵と云ふは、到底人間の往けない最高の地位に立つてカラ／＼と打ち笑ふて居ると云ふのである、圓悟の着語に四州八縣曾つて箇の漢を見すと云ふた、四州は南閻浮提ばかりでない、東弗婆提も西矍陀尼も北狗盧も(即ち東西南北の四州)八縣と云ふは語路のはづみで言ふたまでのことであると云ふことちや、其の四州にも八縣にも、



此の雪竇のやうに笑ふものは無いぞと云ふ、即ち雪竇の此の呵々大笑が直に是れ對一説で、それが其儘に雪老の一代時教ぞ、更に同道の者方に知る、雲門と雪竇は好い道連であるから、此の呵々大笑があるのである又能く幾人ありてか知ると云ふた、謂ゆる同道の者は幾人も無からうと云ふて、門下後生を警醒せられた、吾人も諸共に笑ふ仲間に入らねばならぬのである、然らばそれは何がそれほど可笑のであるかと云ふに昨夜驢龍が角を拗して折つた驢龍と云つたは此の無孔の鐵鎚のやうな問題を提出した僧のことで、一代時教と云ふ二本の角を拵けて来たのを、對一説と其の角を折られてしまふた、それが可笑ので呵々大笑すると云ふのぢや、圓悟が誰ありて見來ると云ひ又還つて證明するありやと云ふ、其の驢龍の角を拗折した實地を誰れが能く見届けて、誰が其の證據人になるぞと云ふのである、此の公案の徹底し易からざる様子を、重々丁寧に吾々に訓戒せられたことと思ふ、圓悟は更に、啞の一字を下した、啞の字は説文に笑也とある、即ち圓悟が雪竇の呵々に和して諸共に笑ふたのである、然るに雪竇は更に別々と一轉した、雲門對一説は實に比類なき一代時教の答案ではあるけれども、尙ほ其上に別々すなはち更に一段特別の宗旨があるぞ、讚歎するに分ありと圓悟が言ひ、尙ほ須らく是れ雪竇にして始めて得べしと言ふた、其の別々の所を讚歎することは雪竇で無くては外に其人が無いと擲論した、そうして置いて、什麼の別處があると抑へたやうに言ひ、吾々に其の別處を參究させる手段を運らされた、韶陽老人一槩を得たり一代時教の驢龍の角を雲門が對一説で拗折したには相違ないが其れは二本の中の一本だけであつた、あとの一本は誰が何うして折るぞ、圓悟は其一槩什麼の處にか在ると言ひ又更に一槩あり阿誰にか分付すと云ふた、吾々お互ひ實

參實究すべき所ぞ、圓悟は更に徳山臨濟も也た須らく退倒三千すべしと言ふ、參じて此處に至りては、佛祖も退倒三千里よと云ふのである、然らば其の那一槩又作麼生、其の角を何うするぞ、圓悟は斯うして拗折し得るぞとピシヤリ便ち打つ、モハヤ那一槩に取り着くべき所は無いぞ。

### 第十五則 雲門倒一説

**垂示** 殺人刀活人劍。乃上古之風規。是今時之樞要。且道。如今那箇是殺人刀活人劍。試舉看。

此の垂示は前の第十二則の垂示の前半と全く同文であるに依て、再び解釋する必要は無い。

**本則** 舉僧問雲門。不是目前機。亦非目前事。時如何。  
倒退 三千里 門去倒一説 平出○款出○因人口○也不 得放過○荒艸裏構身

此の間は呈解問とも藏鋒問とも云ふ種類の問ひかたで、己れの悟りを人に呈示するとき、又は言葉の裡に他を遣り込めやうと云ふ意趣を含んだ時の問ひやうであると云ふことぢや、目前の機と云ひ目前の事と云へば現在目前そこに顯はれて居る事柄(即ち事又心の作用(即ち機)であるから、誰にも辨見することが出来べきわけであるが、それさへ遲鈍な者には俄に應對が出来ないのが通例である、例へば上杉謙信が川中島



で武田信玄に斬り掛けた時、「正當恁麼の時如何」と言ひつゝ刀を振り下したと云ふことであるが、これは全く目前の機目前の事であるが、然るに信玄がスカサズ「紅爐上一點の雪」と答へながら軍扇で其刀を受け流しヒラリと身をかはして通れたと云ふ、實際にソンの問答が有つたか無かつたかといふ歴史的研究は且らく置き、信玄の一機一境なか／＼端的別なりである、然るに今は其の正當恁麼といふやうな目前の機境を超越して、是れ目前の機に非ず亦目前の事に非ざる時如何と云ふのである、機に非ず事に非ずと云へば、宇宙萬象の未だ形をあらはさざる以前か、若しくは天地萬物みな其形を隠した後か、そこが此の問題を提出した僧の悟りの立場で、亦た此問ひが頗る難問である所ぞ、圓悟が之を奪つて躡跳して什麼をか作す、目前の機も事も躡跳と排ひ除けて而して何うすると云ふのちや、かう問者を叱つて置いて更に倒退三千里、然し此の難問に遭つては誰でも退却するより外に致し方があるまいと言つて、次の答話を引起した、門云く倒一説コレは雲門の一辯で、前には對一説と答へ今度は倒一説と答へた、一説と云ふ言葉には別に用は無い、對の一字、倒の一字が肝要である、倒は顛倒の倒の字で此の問題が即ち顛倒である、目前の機や目前の事に何の過が有つてそれを排斥し、物めづらしさうに是れ目前の機に非ず亦目前の事に非ずなどと悟りを鼻に懸けたやうなことを言ふのであるぞと、倒一説の一言に其の問ふた僧の鼻を打ち折つた、圓悟が平出と着語した、問も難問であるが答も亦た難答である、賣り言葉に買ひ言葉、さし引き残りが無いと云ふたやうなアンバイ、款は囚人の口より出づ、款といふは罪人の罪状を書いた文書の事で、雲門大師が此の難問に對して思はず知らず其力量をあらはされたのが、罪人の白狀のやうであると評したの

である、也た放過するを得ざれ、之は圓悟が門下への注意で、此の公案を等閑に附してはならぬぞと云ふた、放過と云ふは東京あたりの俗語にウツチャルといふほどのことぢや、荒艸裏に身を横たふ、之に二様の見かたがあると云ふことである、其一は雲門の答が謂ゆる落艸で兒を怒んで醜を忘れた姿ぞと見ると、其一は雲門が此問に對して倒一説と答へた様子は猛虎が荒草の裏から威力を示すやうであると見る説ぢや、選びは各自の參究に一任する。

頌 倒一説 放不下○七花八裂○須彌 分一節 在爾邊○在彼邊○半河 同生同

死爲君訣 泥裏洗土塊○著甚 八萬四千非鳳毛 羽毛相似○太熱減三人

三十三人入虎穴 唯我能知○一將難 別別 賣弄○一任躡跳 擾擾忽忽

水裏月 青天白日○迷頭認 影○著忙作什麼

此の頌も前則の頌と同じ體裁で、例の如く本則の例一説を拈起し來つて分一節と承けた、分節と云ふは符節のことで、問と答とがカチリと間に髪を容れる隙もなく能く合つたと云ふのちや、圓悟が第一句に放不下と着語した、放不下とは手ばなし得ないと云ふ意味で、雲門の答話を雪竇の手に握つてゐる形容、七花八裂は例の如く七通八達の義とすれば雪竇の文才の自由をほめたのである、次の着語二つを一つにして須彌南畔卷盡五千四十八と続け、之を前の第十四則の答話對一説の下へ置くべきである、それを後に錯



つて此處へ入れたのであらうと風外老人が言はれた、實に其うであるかと思はれる、第二句の下に圓悟が備が邊に在り我が邊に在りと云ふた、符節であるから双方に同じものがあるわけよ、然るに半は河南半は河北で、若しもソチラはソチラ、コチラはコチラと云ふやうであつたら何うしたものぞ、然し雲門と雪竇は好い道連ミチツレぞと云ふので手を把て共に行くと云ふた、第三句に同生同死君が爲めに訣す、この句を圓悟が評して敢て備が爲めに泥に入り水に入り同生同死すと云ふてある、即ち雲門が彼の僧の問題に向つて倒一説と答へたのは、彼れが爲めに慈悲深重なる所だと云ふのである、着語に泥裏に土塊を洗ふ泥の中で土塊を洗ふといふも、親が子の相手になつて老を忘れて袍をついたり獨樂を廻はしたりして居ると同じやうな形容、甚の來由をか着く、君が爲めに訣するなどと言はれるが、それは何ういふ謂れ因縁かなとからかひ備を放ち得ず何もお前がたに訣してもらはねばならぬ様な疑問は無いに、其様なことを言ふなら故さぬぞと云ふた様子、コレで頌は済んだが、あとは例の雪竇の文才が溢れるのである、八萬四千鳳毛に非ずといふは、釋尊在世のお弟子は常に八萬四千の大衆と稱するが、それが皆釋迦の嫡子といふわけには往かぬ、只摩訶迦葉尊者一人正法眼藏を傳へたのである、鳳毛といふことは宋の謝超宗といふ人が文章を善く書くので、孝武帝が超宗に鳳毛ありと稱讃せられた故事が本になつて、子能く父の美を繼ぐ者を鳳毛と稱すと云ふことであるさうな、即ち八萬四千の佛子が皆悉く佛の美を繼ぐわけには往かぬと云ふ意味である、そこで圓悟は羽毛相似たりと言ふた、どれもこれも似たり合つたり謂ゆるどん栗の長セイくらべよ、けれども鳳毛に非ずなどと言ふては太然人の威光を滅す、佛弟子のねうちが無くなるでは無いか、然し昔も今も同じ

ことで漆桶のやうな目も鼻も分らない坊さんは麻の如く栗の如くいくらでも多く居るぞと云ふ、然るに其中から三十三人虎穴に入る、之は第一祖の摩訶迦葉尊者から達磨大師まで二十八代それから更に曹溪の六祖慧能大師まで六代合せて三十三代の祖師だちは孰れも皆尋常一様の修行では無い、命がけで虎穴に入つて虎兒を捕ふるやうな參禪辨道の辛苦艱難を嘗められたのである、圓悟は唯我れ能く知ると着語した、其の辛苦艱難の味ひは實地を踏んだ者でなくては知れぬ、雪竇も圓悟も皆同道の伴侶である、吾人お互ひは果して如何と反省せねばならぬ所ぞ、一將は求め難し謂ゆる麻の如く栗の如き漆桶連中の兵卒は幾らもあるが、それを指麾する一人の大將は容易に得られない、然るに今三十三人の列祖の如きは皆野狐精の一隊よ、此の精の字は斯ういふときには一字で化物バケモノといふ意味である、かやうに三十三祖を稱揚して置いて更に尙ほ一段特別の處があるのよと云ふので別々と言ふた、圓悟が什麼の別處か有らんと云ふ、三年に一聞あり鶏は五更に向つて鳴く、何も殊更に別段な事は無いはずだと抑へて更に少賣弄、やゝもすれば雪竇は色々なことを言ふて押し賣りする小賣人よと言ひ、しかし何となりとも言ふが好いと云ふので、蹄跳ヒツヒに一任すおどるともはねるとも御勝手よと云ふ、いよゝゝ結句に擾々ユルユル忽々トク水裏の月、その別々な味ひは是の如くぢや、斯様な句に至りては智解分別を以て彼れの此れのと論すべきでは無い、たゞ聲ほがらかに靜かに何度も誦ふて見ろ言ふに言はれぬ妙味を合點する時節があらう此れが雪竇の宗旨であると言ふ評判ぢや、そこで圓悟は青天白日と着語した、擾々忽々一點の雲烟も無い、然るに若しも文字の上に彼れの此れのと煩悶して居たならば頭に迷ふて影を認むと云ふものぞ、これは昔し演若多といふ人が暗い處で鏡を見て己れ



の頭が無いと云つて騒いだ故事、青天白日天地萬物歷々分明であるに、著忙して什麼をか作す、何も其様にワイ／＼騒ぐには及ばぬぞと云ふ。

第十六則 鏡清艸裏漢

垂示道無横徑。立者孤危。法非見聞。言思迴絶。若能透過。荆棘林。解聞佛祖。縛得箇穩密田地。諸天捧花無路。外道潜窺無門。終日行而未嘗行。終日說而未嘗說。便可以自由自在。展啐啄之機。用殺活之劍。直饒恁麼。更須知有。建化門中。一手擡。一手擲。猶較些子。若是本分事。上且得沒交涉。作麼生。是本分事。試舉看。

道に横徑なし、道といふは佛祖の大道ぢや、佛祖の大道といふは宇宙萬象の全體ぞ、此の道は帝京に到る國道のやうなもので、天子も通れば乞食も通る、汽車も通れば草鞋も通る、牛も通れば馬も通る、本より無限の空間全體の大道であるから、横徑や小徑のあるべきで無い、乃ち盲目でも蹇足でも自由自在に通れるはずである、其事を三祖大師は至道無難と言はれた、至極の大道は少しも難澁なことは無いといふこと

ぢや、それ故に立者孤危である立者といふは此の大道を通る者といふこと、即ち宇宙の間に立つて居る者は皆孤危ぢや、孤危といふは獨立自尊といふも同じことで、實に日月星辰山川草木みな悉く孤危獨立、決して他の支配は受けぬ、花も獨立月も孤危、眉毛は眼上に横たはつて獨立、鬚髯は鼻下に端居して孤危ぢや、此間に行はるゝ一切諸法すべての事物は皆天真爛漫で人天鬼畜の支配は要せぬ、此事を法は見聞に非ず言思迴かに絶すと言ふた、人間の目に見たり耳に聞いたりして、氣に入つたとか氣に入らないとか、迷つたとか悟つたとか、口に言ふたり心に思ふたりして居ることゝは、迴絶すなはち大層な隔たりのあることぞ、若し能く荆棘林を透過し佛祖の縛を解開し、荆棘林といふは前に謂ゆる見聞言思のことと凡夫の情識を以て彼れの此れのと妄想分別するのが、彼の大道の往來を妨げるから荆棘である、佛祖の縛といふは凡夫の妄想すなはち荆棘林をば透過し得ても、更に佛經や祖錄の名目言句に束縛されて悟りに腰を掛けて居るのを言ふ、其の縛をも解開とトキヒラいて箇の穩密の田地を得れば已に迷悟を超脱し凡聖を通りぬけて大安心の場處に至つた上には諸天花を捧ぐるに路なしコレは故事がある、釋尊直門の須菩提尊者が真空般若の悟りを開いて坐禪して居る處へ、帝釋天が現はれて來て花を散らして供養したと云ふことが有つて、前の第六則の頌の空生嚴畔花狼藉といふ句の下で話して置いた通りの事である、結局須菩提の悟りが未だ穩密の田地といふ處へは到り得なから、帝釋天などに窺はれたので、眞參實究の人としては慚ぶべきことである、然るに今は其の諸天も花も捧ぐるに路なし、況んや九十六種の外道輩などが何のやうに潜かに窺がはうとしても窺ふべき隙間がない、已に此の立場に到り得た上に於ては、終日行ふても而も未だ嘗て



行はす、終日説いても而も未だ嘗て説かず、朝な夕な寝ても起きても都べて皆其儘に佛祖の大道であるに依つて、これが道であるとか此れが法であるとか痕迹の見るべきものは無い、味噌の味噌くさき匂ひがスツカリぬけてしまふたのであるから其味ひ言ふべからざる妙がある、かうなつてこそ初めて便ち自由自在を以て啐呀の機を展べ殺活の劍を用ふ可し、啐呀といふことは此の公案の眼目であるが、コレは鶏が卵を温ためて孵化させる時に、已に卵の中の子が殻を破つて出やうとするとき、内からコツ／＼とつ／＼の音が啐で、其時に寸分の時間もたがへず母鳥が外からもコツ／＼とつ／＼き破るのを啐といふ、即ち啐呀同時であるのを、今禪宗の師家と參學の弟子との間に譬へたので、例へば釋尊が花を拈じたのを迦葉が莞爾と微笑した、此の間に分厘の隙間もない、即ち啐呀同時である、此の機合が得られてこそ門下の學人を殺さうとも活かさうとも、否な悟らせやうとも迷はせやうとも、自由自在に働けることになるぞと云ふのちや、しかし尙ほ直饒無憂なるも、前に言ふた程の處に到り得たにしても更に須からく建化門中に一手は擡け一手は擲ること有ることを知りて猶ほ些子に較るべし、コレは衆生濟度の方便で、建化門といふは化導の方法を建設する側といふことぢや、兩手を垂れて衆を接するのであるけれども時としては其手を上げて人を進めたり又は其手を下げて抑へつけたりしなければならぬ、さりながら若し是れ本分事の上ならば且得没交渉方便を離れて衲僧本分の働きとしては前に言ふた一手は擡げ一手は擲るといふやうな手ぬるいことはして居らぬぞ、且得没交渉といふは俗にヨツテモツケヌと云ふほどのことぞ、作麼生か是れ本分の事試みに學す者よ、其の本分の事は本則で知るが好い。

**本則** 舉僧問鏡清學人啐請師啄無風起浪作什麼清云還得活也無割○貫○不○可○總○恁麼僧去若不活遭人怪笑相○帶○累○撐○天○地○擡○板○漢清云也是艸裏漢果○然○自○領○出○去○放○過○即○不○可

鏡清道行禪師は雪峰和尚の法嗣で、前則の雲門とは兄弟弟子である、常に啐呀の機を以て後學に開示するとあつて、前に申した雞の子と母とが卵を内外から同時に打ち破るが如き機合がなくては、眞實の禪味を味ふことは出来ぬと言はれてあつた、そこで今此の問を起した僧も其の機合を以て學人啐す請ふ師呀せよ、學人といふは自分をさしたので、私が卵の中からコツ／＼やりますからどうぞ貴方は外からコツ／＼とおやり下されと云ふた、即ちモウたしかに悟りが開けるばかりに成つて居りますからどうぞ貴方の御方便で早く悟らせて下さいと云ふたのである、こゝで若しも母鳥たる鏡清のツ、キ様が一つ間違へば卵の中の雞が死ぬか活きるか分らない、又いくら母鳥が能く機合をはずさず外から啐しても中の雞が未だ啐し得ないやうなことでは、是れまた其雞の育ちやうは無い、君臣の間も、父子兄弟の中も、夫婦朋友の交はりも、其實は皆この機合一つである、さりながら垂示に謂ゆる本分の事から言ふときには、一切衆生本來成佛で、今さらに悟るも悟らせるも有つた話では無いのに、此の僧が事めづらしそうに學人啐す請ふ師呀せよなどととは誠につまらぬ事であると云ふので、圓悟が風なきに浪を起して什麼か作さんと叱り、又許多の



見解を用ゐて、什麼をか作すと抑へた、果して母鳥の鏡清が還つて活を得るや也た無やと答へた、一體本統に碎啄同時の機であつたならば、水さへあれば招かずとも月影がチラリと映るが如く、どちらが先きでどちらが後といふやうな次第のものでは無い、然るに學人啐師啄せよなどと他力を求むる様では、たとへ此の母が啄つてつかはした所で、生きて働き得ることやら死んで生れることやら覺束ないぞと言はれたのである、他力を本旨とする念佛宗でさへも「たのむ一念のとき往生一定おんたすけ治定」と申して、吾々が助けたまへと頼む心の決定するのが先きで、彌陀が其れを助けてつかはさうぞと云ふのが後であるといふ様なわけのものでは無い、況んや自力の極點たる參禪の衲僧が請ふ師啄せよとは何たる遲鈍ぞ、圓悟の着語に割と一字を下した、割は竹の針で物を刺すことださうぢや、此僧果して痛痒を感ずるやら、更に帽を買ふに頭を相すと云ふた、頭の寸法に相當した帽子でなくては役に立たぬから、鏡清が問者の頭相當の帽子をかふせたぞ、然し本分の上から申せば鏡清が還つて活を得るやなどと云ふのも間違ひぞ、何を死ぬる活きると言ふたのであるかと將錯就錯間違ひと間違ひとの衝突よと双方を抑へた、更に總べて、恁麼なる可からず、誰も彼も皆死人ばかりとも言はれまいぞと鏡清に對するやうにして門下後學の吾々までをも圓悟が見廻はしたかと思はれる、吾人お互ひ果して能く活を得るや也た無やと反省せねばならぬ、然るに此僧も亦たさるもので中々屈しない、若し活せずんば人に怪笑せられんと突込んだ、活きられるかと仰せられるけれども活きないで何と致しましやうぞ、若しも活きられなかつたならば世間の人の笑ひ草にされるでは御座らぬかと、十分生きて働いたつもりであるが、元來活も不活も無いはずの事を笑ふの笑はれるの

とは何たる愚かさぞと云ふので圓悟が相帶累すと着語した、其様な馬鹿を言ふてゐては其方ばかりでなく他人の迷惑になるぞと叱つた、しかし活を得るやと威嚇されたるにも驚かず、人に笑はれまらずと厚顔に出かけた勢ひは、なか／＼天を撐へ地を狂ふる力があるぞと冷かし、其口で更に擔板漢と叱りつけた、板を横に擔ふた男が狭い道を通る時には、前方へ進むばかりで横を見ることは出来ない、日本の近頃の俗諺で言はゞ馬車馬と云ふべき所、即ち向ふ見すと云ふことぢや、清云く也た是れ草裡の漢、此の僧自分では十分に生きて働いて孤峰頂上に向上し得るつもりであらうけれども、氣の毒なことには草裡の漢で、啐啄同時の場合には中々遠い、圓悟が果然と言ふた疾うから其う思ふて居たが、果して其の通りであつた自領出去は例の如くお手前御自分でお持ち歸りなされと云ふのであるから、圓悟が鏡清に對してお前も好い加減に此の様につまらぬ僧を打ち棄てたがよからうに、いつまで相手になつて御座るぞ草裡の漢は却つてお手前のことになるぞと抑へたとは云ふものゝ、此の公案を放過しては不可、かりそめに思ふてはならぬぞと門下後生を警醒せられた。

**頌 古佛有家風** 言猶在耳 千古榜樣 **對揚遭貶剝** 鼻孔爲什麼却在山僧手裏 八到棒十三

**子母不相知** 既不相知 爲什 **是誰同啐啄** 心切碎 老婆

**啄覺** 道二什麼 猶在殼 **重遭撲** 案〇三重四重了也 **天下衲**



僧徒名邈

也。放過了也。○不須舉起。○還有名邈得底麼。○若名邈得。

古佛といふは近くは釋尊をさし、廣くは三世諸佛を謂ふけれども、概して歷代の列祖も皆古佛ぢや、即ち佛祖家傳の風習が古佛の家風である、それは如何なる家風かと云ふに、即ち啐呀の機で、對揚貶剝に遭ふ對揚といふは人に對して其道を舉揚するといふ意味、即ち問答商量といふ場合になれば、閃電光擊石火といふ機合で間に髪を容るゝことを許さぬ。圓悟は其例に釋迦と雲門との對揚を擧げて居る、釋尊が初めて生れたとき、直に天地を指さして天上天下唯我獨尊と言はれたと云ふのは、これが今の禪宗で謂ふ所の公案の濫觴であらう、然るに雲門は千數百年の後に生れて之と對揚し、釋迦は生れながらに其様な言はずも好いことを言ふて人を騒がす、若し吾雲門が其の時に居合はせてあつたならば、一棒に打ち殺して犬に喰はせて了ふのであつたに、其うすれば佛だの法だの悟りだの迷だのと云ふ面倒なことが無くて、天下泰平であつたらうにと云ふたことを引合ひに出して、これが乃ち對揚貶剝に遭ふと云ふものぞと言はれてある。貶はオトシメル義ソシル義、剝はハグと云ふ字で俗に面の皮を引きむくなどと云ふやうな意味である、これが歷代佛祖の家風であるから、今鏡清が此の問題を提起した僧に對揚して還つて活を得るや也た無やと貶剝したのも家風の實行に外ならぬのである、故に圓悟が言猶ほ耳に在りと言ふた、釋尊以來歷代の祖師たちの貶剝のやりかた耳に聞き覚えのあることよと云ふのである、それが千古の榜樣で後來參禪學道の標準手本とすべき所ぞ、釋迦老子を誘ふること莫くんば好し、それが古佛の家風であるなど、言ふては何や

ら釋迦の胸中に一物あるやうに聞えるに依て、佛を誹謗する事に成りはせぬかと云ふ、なぜかと云ふに天真爛漫のところには、家風だの軌則だのと云ふべきものゝ有るべきでは無いからである、第二句の下に圓悟が鼻孔什麼としてか却て山僧が手裡に在ると言ふた、コレは雪竇が貶剝を古佛の家風であると言ふが其の古佛どもの鼻孔も皆われ圓悟の手の裡に在り、殺さうとも活かさうとも自由にするが何うぢやとの大氣焰、即ち圓悟の貶剝のしかた碧巖窟の家風を示した、八棒十三に對す、八棒といふも十三棒と云ふも皆支那の昔の治罪法で罪科の輕重に従ひ棒で撃つ數に多少がある、其れを借りて今雪竇が一言で此の公案を頌した妙處を稱賛した言葉である、鏡清が二度も三度も言葉を弄して遂に草裡の漢と言ふたよりも、雪竇が對揚貶剝と言ふた意味が優れて居ると云ふことに見える、備作麼生コレは門下及び吾々までに圓悟が示されたのである、貴様だちが此のやうな剝貶に遭ふたら何うするぞと言ふのぢや、實に工夫を要する所ぞ、更に一着を放過す、しかし也た是れ草裡の漢と云ふ位の貶剝は未だく手緩い放過のしかたよ、もしわれ圓悟ならばと言ふので便ち打つ、子母相知らず是れ誰れか同く啐呀す一體に子が啐し母が呀すと云ふけれども、其母は卵の殻の内に居る子の境界を知るはずが又其子が卵殻の外に居る母の境界を知るはずもない、互ひに相知らずして而して同時に内から啐し外から呀すると云ふ、是れは一體誰れが啐呀させるのであるぞ、只々互ひに自己の本分を天然自然に實行するので、本より他の事に關はるのでは無い、乃ち師が弟子を悟らせることも出来ねば弟子が師に悟らせてもらふことも出来るものでは無い、自悟自得の外は無いのである、圓悟が既に相知らず什麼としてか却て啐呀あると言ひ更に果然と言ふた自問自答のやうである、果



然と云ふ一語に不可思議不可説不可商量の意を十分に説明せられて居る、百雜碎と打ち推いた、啐の啐のと面倒な只一打ちにと云ふアンパイ、それを雪寶が是れ誰か啐呀するなどと指注するは老婆心切よ、しかるに其の老婆にひかされて且らく錯て認むること莫れと門下へ注意した、啐すれば覺すコレは鏡清が還て活を得るやと啐すれば此の僧が活せずんば人に怪笑せられんと覺した様子を言ふ、圓悟が什麼と道ふぞと咎めた前に、誰れか啐呀すと言ひながら、又啐すれば覺すとは自語衝突では無いか、第二頭に落在すモウ何も言はぬが好いのに、色々と言ふから第一義を失ふてしまふたぞ、猶ほ殺に在り彼の僧が鏡清の活を得るやと言ふ、啐に應じて活せずんば人に怪笑せられんと覺したから、耶の殺から飛び出したかと思ふたに、お氣の毒なことには猶ほ耶の殺の中にヒョ／＼して居る、一體に此の僧が活を得るやと言はれた時に、直に其の活といふ言葉に取り附いて、謂ゆる句下に死在したのであるから、自由の轉處を得られないで、活せずんばなどと言ひ出したのである、圓悟が、何ぞ出頭し來らざる、ナゼ早く殺を飛び出さないぞと言ふ、重ねて撲に遭ふ、撲は打撲の撲の字でウツと云ふ字であるが、こゝでは啐の字の代りにツ、クと見れば分り易い、雖が殺を出ないから母の深切で又ツ、イた、何と撲したぞ、也た是れ草裡の漢と貶刺せられた、着語に、錯それは見込違ひであらうぞ、我ならば斯うちやと便ち、打つ、兩重の公案三重四重し了れり、啐だの撲だのと踏んだり蹴つたりよ、然るに此の草裡の漢と貶刺せられた機合が中々容易に合點がゆかぬので、天の柄僧徒らに名貌す、多くの參禪の人たちが彼れの此れのと色々の名を附けたり、貌を想像したりして眞實徹底し得ぬぞと結ばれた、着語に放過了也、まことに雪寶の言ふ通り大方は此の公案を放過してしま

ふて居る、舉起すべからず、モウ幾ら言ふても役に立たぬから、しかし還て名貌し得る底ありや、若し名貌し得るも也た是れ草裡の漢、ナゼかと云ふに元來名貌し得べきものでは無いからである。

第十七則 香林西來意

**垂示** 斬釘截鐵始可爲本分、宗師避箭隈刀焉能爲通方、作者針筭不入處則且置、白浪滔天時如何、試舉看。

釘を斬り鐵を截ると云ふは、銳利なる刀劍の如何なる堅き物に遭ふても、豆腐を斬るが如くにスラリと斬れる様子、其れと同じ様に如何ほど難透の問題に遭ふても自由自在に樂々と答へ得て、再び人に口を開かせないのを斬釘截鐵の機と謂ふ、其れでこそ始めて達磨門下の本分を全うした宗師と謂はれるのぞ、然るに若し箭を避け刀に隈ると戦ひに臨んで巧に敵の箭を避け、ヒラリと刀の下を潜ると云ふ様なことをするもの、才子とか伶俐とかは謂はれるかも知れぬが、焉んぞ能く通方の作者と爲さん、前の句に隈刀とある、隈の字は廻の字と同韻で通用する、即ち廻避と續く熟字を分けたのであると云ふことであるが、大かたはカクレルと訓む慣習になつて居る、又こゝの通方は百方に通達する意味で、事に當りて自由自在の義作者と云ふは前にもあつたと思ふが、唐宋の頃は詩文が盛んに行はれたために、格別に秀逸なる人のことを作家だの作者だのと稱したものと見える、針筭不入の處は則ち且らく置く、針を刺すべき隙間もない



深密の場合は別として白浪滔天と大議論の湧きあがつて来た時には何うしたものぞ、試みに擧す看よ。

**本則** 擧僧問香林如何是祖師西來意大有三人疑著○猶有這箇消息在 林云坐

久成勞魚行水濁鳥飛落毛○合取狗口好○作家眼目○銀解稱鏡

益州青城の香林院澄遠禪師は雲門大師の弟子で、十八年の間雲門に隨侍して居られた、住山の後四十年を経て示寂せられたのが八十の年であつた、愈々臨終といふ時に病も何もなく常に外護してくれてあつた知府事の宋公瑞と云ふ人に暇乞して、老僧は是れから行脚に出かけますと云ふた、大通判の某と云ふ人がそれを聞いて居て、彼の老僧は發狂したので有らう、八十の老人が何うして是から行脚すなはち遊歴などに出られるものかと云ふた、宋公は其れを打ちつけて、大善知識去住自由なり何んなことをするのか分らぬと言ふて居たが、遂に大衆に對して老僧四十年、方打成一片と言つて其儘瞑目してしまふたと云ふ高僧である、此人に或る僧が如何なるか是れ祖師西來意と問ふた、祖師とは達磨大師、その大師が西域の天竺から東方の支那へ何をしに來たか、其意旨を聞きたいと云ふのが當時大流行の問題であつたから、昔から祖師西來意の問答は幾らもあるが、香林は、之に答へて坐久成勞と言はれた、坐久成勞と云ふは人と長時間對談などした時に、其の話も畢りてお別れと云ふ場合に至り、イヤ長い間サゾ御疲れでありませうといふ挨拶の言葉である、それで此の問答を俗語で言ひ直して見れば、彼の達磨大師は何ういふ考へで支那

へお出になつたので御座いましやうか、ハイ長い間お坐りでお疲れでありませうと云ふことになる、そこで大概のものは大師が九年面壁で長い間少林山に尻の腐るまで坐禪して居られたと云ふことであらうと此の公案を解して居るのであるが、其の様な淺はかなことなら何も香林の香林らしい所もなければ、又雪竇が殊更に頌出する價値もない、然らば何うであらうかと云ふに圓悟は問案の下に大に人の疑着する有りと着語した、實に是れは大疑着のある所で、此の疑問の解決が本統に出來れば本分の事畢ると謂ふべきである、なぜかと云ふに第一則の處にも寶志和尚が武帝に答へて觀音大士が佛心印を傳ふるために西來したのであると云ふたが、一體に佛心印と云ふものは人に傳へられるものであらうか、又人から傳へられるものであらうか、志公の注解も甚だおぼつかない、又大師が自から言ふた偈に吾本來此土傳法救迷情と云はれたが、これ亦前と同じことで法は傳授すべきものであるまい況んや迷情を救ふなどは奇怪なことである、元來迷情だの悟道だの救ふの救はれるのと云ふ沙汰は苟くも本分の納僧の齒牙に掛くべきことではない、乃ち然らば祖師の西來意、果して如何と參究せねばならぬが、圓悟は猶ほ、清箇の消息あることなり此の疑問は疾うに決了してあるがと思ふたに、まだ此の様な議論があるのかと云ふ、答話の下に魚行けば水濁り鳥飛べば毛を落す、元來祖師西來意は言句を以て答へらるべきでもなければ、其他に如何なる方法を用ひても之に適當すべき手段は無いはずであるに、香林が坐久成勞と答へたのは實に言ふに言はれぬ所を能く言ひ得た、其のわけはと此れから先きを講釋すると、専門の禪師たちに叱られるから言はない方が好いが、少しばかり内々に言ふて見れば、前にも申した通り坐久成勞といふ言葉は師家だちが衆のために説



法をして、モウ説き畢つた時の結語に聽衆への挨拶としてイヤ長談義で御迷惑であつたらうと言ふのであるから、今も祖師西來意は其の西來以前より千佛萬祖イナ宇宙萬象が日々夜々に説明し畢つて居るぞと言はれたので、乃ち坐久成勞であるけれども、己に坐久成勞と言ふただけ早や其言葉の痕迹がこのころ、その様子を魚が行けば水が濁る鳥が飛べば毛を落すやうなものぞ、水に跡は附かんやうなもの、やはり水が幾らか濁るぞと云ふたのである、故に更に狗口を合取せよ犬の口を塞げと云ふので、餘計なことを吠えるなど叱るのちや、作家の眼目、然し香林の答話はサスガに作家ぞと稱揚し、更に鋸解稱鎚これは解不得と云ふ意味の俗語であるさうな、如何なる鋸でも鐵鎚を挽き切ることは出来ないやうに、此の公案も鐵饅頭で誰も容易に齒は立たぬぞと云ふのである。

頌 一箇兩箇千萬箇何不依而行之○如麻似 脱却籠頭卸角駄從今  
○還體得也未○成群作隊作什麼 左轉右轉隨後來影自放不打下○影 紫胡要打劉鐵磨○日去

山僧拗折拄杖子更不行此柱  
令賊過後張弓○便打○斃

一箇兩箇千萬箇籠頭を脱却し角駄を卸す、これは權兵衛でも太郎作でも誰でも彼れでも、此の如何なるか、是れ祖師來意坐久成勞を悟り得さへすれば、皆ことごとく籠頭を脱却し角駄を卸して自由自在の身になるぞと云ふのちや、一箇兩箇と云ふは一人二人と云ふことであるが、近頃我國の俗人だちが人を數へるの

に一名二名と言ふが古くは使はない言葉である、漢文などで書くには是非とも一人二人と書かねばならず、俗語でも一箇二箇と書くべきである、籠頭と云ふは馬の鼻先を束縛して置くもの、角駄と云ふは馬に負はせる荷物のことちや、如何なるか是れ祖師西來意、坐久成勞の自得が出来れば、はだか馬が茫々たる原野を勝手氣儘に飛び廻ると同様に、都べての煩悶苦惱を解脱して灑々落々ぞと云ふのである、然らば其の坐久成勞とは何のやうな面倒なことか、長く坐つて居れば尻が痛くなると云ふことよ、日が暮れば暗くなり、夜が明ければ明るくなると云ふことよ、圓悟が第一句に何ぞ依て之を行ぜざる誰でも彼でも法の如くに修行さへすれば釋迦も達磨も權兵衛も太郎作も差別は無いぞ、麻の如く粟の如く百千萬箇いくらもあるぞ、いくらも有りはするが群を成し隊を作してどん栗の長くらはは什麼をか作さん第二句の着語に今日より應に須らく灑々落々たるべしと自由自在の境界を評し、更に還つて體得すや也た未だしやと門下を警醒せられた、左轉右轉後に隨ひ來らば紫胡劉鐵磨を打たんことを要す、これは更に吾々お互ひ參禪の者を誡められたので、此の公案に限つたことでは無い、左轉右轉と種々様々に氣迷ひして誰れが斯う言ふたとか、何の經論に何う言ふてあるとか、他人の尻跡を追ひあるくやうなことと有つたならば、たとへ如何ほどの學問をしても何のやうな修行をしても何の詮も無いのであるから、紫胡和尚が劉鐵磨を打ちなぐつたやうに一棒を喰はせるぞと雪竇禪師慈悲深重のお言葉である、紫胡と云ふは傳燈錄には子胡と書いてある、即ち衢州子胡巖の利蹤禪師といふ人で、彼の名高い南泉和尚の弟子である、其頃劉鐵磨といふ比丘尼で豪傑があつた、此の老婆の機鋒峻峻なのは諸方の男坊主どもが時々痛い目に遭はせられるので



餘ほど名高い比丘尼であつた、然るに或る時一人の比丘尼が此の子胡巖の利隆禪師を尋ねて来た、子胡はチラリと見るやいなや汝は是れ劉鐵磨なることなしやと聲をかける、果して此れが劉鐵磨であつたが、知らぬ顔して不取と答へた、日本の俗語で言ふたなら何れ致しましてと言ふたやうなアンパイ、子胡は更に左轉右轉とアビセ掛けた、何を迂路して歩くぞと言ふたやうな具合、劉鐵磨もスカサズ和尚顛倒すること莫れと言ふ聲の絶えぬ間に子胡は鐵磨をビシヤリと擲つた、これは元來鐵磨の方から和尚顛倒すること莫れと言ひながらドシンと子胡を打つべきであつたに惜いことに逆振に子胡に打たれた、此の故事を雪寶がこゝへ引出して来たのである、圓悟の着語に猶ほ自ら放不左轉右轉して居る様を前の馬の荷物のごとに引き掛けてマダ／＼荷物を卸し得ないと言ふたのちや、影々響々他人の後尻を追ふてあるく様で影に影が重なり足音に足音が響く、便ち打つと目を醒まさせる、結句の着語に山僧は拄杖子を拗折して更に是の令を行はず、山僧とは圓悟自分のこと左轉右轉の鈍漢を打つたのからても死馬を鞭つやうなものよ、故に吾ならば棒を棄て、しまふて打つことはせぬ、然るに雪寶が此の鈍漢を打つと云ふは賊後の張弓で盗人すみての棒ちぎり何の効もないぞ、と言ひつゝ、便ち打つこれが圓悟の令を行ずる所か、峻ア、危いところであつた。

第十八則 肅宗請塔樣

此の一則是、垂示がなくて直に本則ぢや。

**本則** 舉肅宗皇帝宗本是代問忠國師此誤百年後所須何物預擬待

然起模畫 國師云把不與老僧住作箇無縫塔帝日請果待

師塔樣好與國師良久云會麼將南帝云不會會

請詔問之類值不國師云草料不吾有付法弟子耽源可憐卻語此事果然

詔耽源問此意如何子承父業獨掌不浪鳴生解源云湘之南潭之北把不

黃金充一國箇消息雪竇着語云祖師獨掌不浪鳴了也雪竇着語云山形拄杖子拗折

無影樹下合同船開雪竇着語云海晏河清了也

瑠瑠殿上無知識雪竇着語云拈了也

張弓

後

言猶在耳



唐の肅宗皇帝は玄宗の子で深く禪宗に歸依し、別して忠國師を尊崇せられてあつた、忠國師と云ふは六祖慧能大師の法嗣で名を慧忠と曰はれた人であるが、肅宗および其子の代宗皇帝と二代の天子の師であつたから、單に忠國師とばかり稱されて居る、初め南陽の白崖山香嚴寺に住して居られたのを、代宗の時になつてから西京の光宅寺と云ふへ招請せられた、古へから天子の禮遇を受けた人も多くあるが此人ほどのは少なからうと思ふ、或時參内して宮中で說法せられたとき、既に事畢りて寺へ歸られるのを、肅宗皇帝が國師を鳳輦に載せて、天子自ら車を御して送られた、臣下の人だちが餘りの事に呆れて御不都合では御座らぬかと諫めたが天子は益々敬重を加へられたと云ふことである、此の國師が遷化せられたのは代宗の大曆十年であるから、此の本則の問答は肅宗では無くて代宗である、國師いよ／＼御臨終といふのであるから、代宗皇帝御臨幸になつて訣別の御問答である、百年の後須むる所何物ぞ百年といふことは世間普通のこと、天子には萬歳といふが一般の人には百年の壽命を最上とするのであるから、貴僧の死なれた後に何ぞお望みがあるなら遺言なされといふ勅語であつた、これは人の臨終に訪問した時には誰でも言ひさうな一通りの挨拶に過ぎないやうであるけれども、サスガに代宗も長い間參禪して國師の提携を受けて居るのであるから、おのづから言葉の中に自分の響きが聞える、しかし圓悟は之を抑へて預め搔て痒を待つ痒くもない處を豫かじめ搔て置き今に痒くなるかも知れぬからと云ふやうな馬鹿なことがあるか、百年の後よりも即今所須何物ぞとナゼ參究せぬぞと叱るのぢや、果然として模を起し様を畫く、幾ら參禪したなどと云ふてもドウせ本統の者ではあるまいと思ふて居たが、果して模を起し様を畫く、有りふれた形式だけの

ことよ、老々大々として這の去就を作す、四百餘州の君主として、一天萬乘の君と仰がるゝ身分でも此場に臨んでは此のやうな始末かと罵しつた、更に東を指して西と作す可からず此の着語は次の國師の答に對して、豫じめ願ばぬ前の杖をつかせたのであると云ふことぢや、國師云く老僧が與めに箇の無縫塔を作れサスガに國師ぢや、直に本分の事を以て答へられた、死んだ後に墓へ塔を建てるとか碑を建てると云ふは普通の事であるか、國師の望む塔は無縫塔と云ふのである、丸いとも四角とも、長いとも短いとも、高いとも低いとも、都べて其の様な形の見えるのでは無縫でない、無縫といふは縫目がないと云ふことであるから、當今の言葉で言へば無形といふも同じ事である、ドウぞ拙僧が死んだなら無形無象の塔婆を建て、下されと云ふ注文ぢや、無形無象の塔は世界塔婆と申して宇宙萬象其儘に儼然たる大塔である、吾々お互ひの本體本性、すなはち花となつては紅に咲き柳となつては綠に芽出す、其れが其儘無縫塔である、圓悟は把不住と着語した、取り留めの附かない言ひやうぞと言ふのぢや、代宗はスカサズ請ふ師塔様そのお望みの無縫塔と云ふのは如何なる象で何うして作りますのか御指圖を願ひたいと突込んだ、着語に好し、一割を與ふるに、割は前にもあつた通り針を刺すことで代宗が一本チクリとやつたのを賛成したのである、國師良久して云く會すや、此の良久といふことはヤ、ヒサシと云ふ字であるが、暫時黙して萬機を停止して居る姿である、而して置いて會すや、御合點がゆきましたか、圓悟の着語がおかしい囚に停まつて智を長す罪人が懲役に遣られて益々悪い智慧が増したやうなぐあひで、國師は良久して居るうちに利口になつたと罵しる、更に又直に得たり東を指し西を劃し南を將て北を作すことをと抑へ、ソレ見ろ良久して會すやなど



と子供だましをやらかす結局無縫の塔様が言葉にも形容にも何うして顯はすことが出来るものか、直ちに得たり口の匾擔に似たるを匾擔と云ふは支那の勞働者などが荷物を背負ふときに背中へあてる木のことで、日本の形容で云へば「へ」の字形といふやうなことで、即ち何とか言ひたいと思ふても言ひ得られない時の口つきを、匾擔に似たりと罵るのであるさうな、帝云く不會イヤ頓と合點がゆかぬぞ、此の不會といふことにも二様ある、前の第一則に達磨大師が武帝に對して不識といふたのと、武帝が志公に對して不識といふたのと言葉は同じ不識であるけれども、其意味は天地の違ひであるやうなもの、又譬へば惡逆な子が孝といふことを知らないのも、最善なる孝子が孝行を盡しながら其れを孝とも知らず只其の本分を全うして居るのも、孝を知らぬと云ふ言葉は同じである、今此の不會も代宗果して本分の上から迷悟を超脱しての不會であらうか又は俗に謂ゆる本統に國師の眞意が分らぬのであらうか、圓悟は頼ひに不會に遭ふ好くも不會と答へられたぞと揚げた、けれども更に當時更に一撈を與へて伊をして満口に霜を含ましめば却て些子に較れり代宗にモウ一段の力をもたせたかつたと言ふた、國師云く吾に付法の弟子耽源といふものあり却て此の事を請ふ詔して之に問ひたまへ、耽源といふは國師の法嗣で吉州の耽源寺に住して居られた應眞禪師のことである、着語に頼ひに禪床を掀倒せざるに値ふ若し代宗に峻峻の機があつたならば國師の禪床を引くり返し臨終の國師に痛い目を見せるであつたらうに、代宗が鈍いから好いアンバイに弟子の耽源に代らせることが出来た、何ぞ他に本分の草料を與へざる、國師も亦た手緩いでは無いか帝が不會といふた時に本氣になつて國師らしい手際を見せれば好かつたにと、これは國師の方へ向つての着語、人

を搽胡すること莫くんば好し然るに弟子の耽源にお問ひなされなどと人を馬鹿にしたやりかたでは無いか、搽胡は穢がす義で人に無禮なことをするなといふ意味である、一着を放過す何う考へて見ても弟子に譲られたのは手ぬるいやりかたであると重ね／＼の抑へやうである、國師遷化の後に帝耽源に詔して此意如何と問ふ着語に惜む可し、國師の在世に不會を、今頃此意如何と他人に問ふとは何事ぞ果然として定盤星を認む、國師が耽源に問へと言へば耽源でなければならぬやうに思ふて居る、其れが杖を守ると云ふものぞ、定盤星のことは前にもあつたと思ふが、權衡の目のことで、品の輕重大第に目方のかはることを知らずに、同じ目ばかり見て居る愚さを定盤星を認むといふのである、子は父の業を承け去る耽源が師匠の豫言にそむけぬは己むを得ぬ次第なれども、也た第二頭第三頭に落在すと帝の意氣地なきを抑へる源云く湘の南、潭の北これは四句一首の偈を以て無縫の塔様を頌したので、一句毎に雪寶が着語を以て相鐘を打つて居る、湘の南、潭の北は、太平洋の南シベリアの北でも開花の前落葉の後でも何處でも好い何時でも好い、雪寶の着語に云く獨掌は浪りに鳴らす隻手の聲は容易に聞えぬから、己むを得ず南だの北だのと言ふて方角を示すのよ、其實は隻手の聲といふさへに早や第二第三である、圓悟が也た是れ把不住耽源も亦た取り留めの附かぬことを言ふかと抑へ、更に兩々三々什麼をか作す帝と云ひ國師と云ひ耽源と云ひ幾人も幾人もよと云ふたアンバイ、半開半合分つたやうな分らないことをと抑へる、雪寶の着語の下に圓悟が、一盲衆盲を引くと云ふた、雪寶が盲人の先達を勤めるさうな、隻手の聲が聞えぬといふ側から言へば聾啞の先達かも知れぬ、果然として語に隨て解を生ず雪寶が耽源の口先に轉ぜられるやうに見えるぞ、邪に隨



ひ悪を逐ふて、什麼をか作さん、そも、國師が無縫塔を作れなどいふたのが邪惡の第一、ナゼかといふに法界塔婆すなはち吾人の本體本性は人に作つてもらふべきものではない、それを耽源が南だの北だのと餘計なことを云ふのが第一の邪惡それを又雪寶が相繼を打つとは何事ぞと抑へたのである、中に黄金あり一國に充つ。前の句は無縫塔を建てる場處を定めたので、此句は無縫塔の材料を示した、石塔ならば石で作る木塔ならば木で作る、今は無縫塔を黄金で作ると見える、先づ第一に中といふは何處のことぞ湘南と潭北の中間といふことであらうか、丸出しに言へば無限の空間といふことよ、其無限の空間に眞如法性が充塞して居る有様を黄金が一國に充つると言ふた、圓悟が上は是れ天にして、下は是れ地、豈た一國のみならんやと言ふて置いて、更に這箇の消息なし一國に黄金が充ちて居るといふやうな語は、遂に從來聞いたことが無いぞと拂ひのけた、法性眞如が法界に充滿して居るなどといふことも本分の衲僧の齒牙に掛くべきことではないからである、しかし是れは誰が分上の事ぞと門下後學へ注意した、雪寶の着語に云く山形の拄杖子。拄杖子と云へば今更申すまでも無い禪宗の師家達が手に携へて居て場合に依てはビシヤリと打つ所の七尺の棒であるが、其の作りかたは色々あつて中には美麗なる人工を加へたのもあらうけれども、今は山形といふので山中の立木を其儘に枝をおろしたばかり、少しも人工を加へないのである、耽源が中に黄金あり一國に充つと言ふたのが、無縫塔を丸出しに見せたのよと言ふのである、そこで圓悟が何を見せるのぢや、其の拄杖子を斯うしてやるぞと言ふので拗折して、了れ、ボキリ、也た是れ様を起し様を割す、ヤツぱり形式のみぢやと抑へる、無影樹下の合同船、この無影樹といふことは日輪正午に當る時には都ての樹木等

も影が無くなるので、これは無限の時間を太陽正中の一意味を以て言ひ現はしたのである、合同船といふは乗り合ひ船で、貴賤老若誰も彼も一つに乗れる、謂ゆる一乗とも大乘とも言ふ所の場合である、即ち無限の空間を通貫して無始劫來未來永劫いつからいつまでといふ限りなく、六趣四生は一切衆生皆もろとも平等一味の境界を誦ふたのである、圓悟が祖師衰し了れり、祖師すなはち忠國師は疾に遷化せられたと思ふたに、合同船に乗り合つて御座るナと揄擲する、團黎什麼と道ふぞ何うも其の合同船などと言ふのがつまらぬと耽源を抑へる、雪寶の着語に云く海晏河清まことに好いお天氣で航海が安全であると言ふのぢや、圓悟は逆に洪波浩渺白浪滔天おそろしい悪い天氣で船が今にも沈没しさうであるぞと云ふ、凡そ言句に言ひ得べからざることを強いて言句に出せば何時でも白浪滔天である、猶ほ些子に較れり、然し此の海晏河清といふ安穩無事のところが十分とは許されぬけれども少しばかりは本分に近いぞ、瑠璃殿上に知識なし彼の合同船の到着したる彼岸に内外玲瓏たる玉の臺がある、常には涅槃とも妙心とも極樂とも淨土とも名けられることも有るが、今は瑠璃殿と名けられた、此の御殿の中には佛とか如來とかゴツドとか云ふやうな有り難そうな者が居るかと思ふたに、豈はからんや知識なし知識と云ふは師匠や友人のことであるけれども、今は廣く見て誰も居ないと云ふことである、誰も居ないと云ふは聖者だの凡夫だの、佛だの衆生だの、貴賤貧富だの老若男女だの、智愚賢不肖だのといふことの認むべきが無いといふことである、圓悟が、咄と叱りつけた、耽源お前は何を其様に樂屋の戸棚の中まで押し廣げるやうなことをするぞと言ふのである、雪寶の着語に云く拈了也。これで無縫塔の建立落成したぞと云ふのぢや、圓悟が賊過後の張弓、今こ



ろになりて何の役に立つぞ、セメて耽源が湘とも潭とも口を開かない前に拈了也とやれば好かつたにと云ふのぢや、言猶ほ耳に在り然し此の拈了也の一言は何となく耳に留まつて居るぞと稱揚の意であらう。

〔頌〕無縫塔道一縫大小見還難非眼可睹澄潭三ハ不許蒼龍蟠見塵〇蒼龍

向三直得〇摸〇案〇不〇着〇層〇落〇落〇落〇花〇作〇什〇麼〇影〇團〇團〇通〇身〇是〇眼〇〇〇落〇七〇落〇八〇兩〇雨〇三〇千〇

古萬古與人看見塵〇閣〇黎〇觀〇得〇見〇塵〇

此頌の句作りは亦た一體ぢや、三言四句七言二句の歌である、第一句に無縫塔と言ひ出して宇宙萬象の本體を一句に呈露した、けれども已に言句に出しては早や縫目が附く、故に圓悟が此の一縫大小と抑へた、斯様なところに大小と云ふときは始めが大で後が小といふことで、即ち龍頭蛇尾といふやうなことになるさうな、下の大の字は衍字であると云ふた古人の説もある、更に什麼と道ふぞとかく言葉に出だすが悪い、見んとすれば還て難し此の無縫塔を眼で見やうとしては到底見えぬ、言葉にさへ言へぬ物が眼で見ることが出来やうぞ、圓悟が賛成して眼の見る可きに非ずと言ふた、耳の聞くべきでも無い、強て見んとすれば瞎、眼がつぶれるぞとも、又は此の瞎を見やうとて見えない、盲目よとも讀める、澄潭許さ蒼龍の蟠まるを澄潭といふは國師が良久した所をさす多くの人は此の無縫塔の塔様を國師良久の處で見やうとするが、蒼龍すなはち國師の本意は澄潭の死水の中には居らぬ、若し又澄みわたつてある水の中に居るや

うなものならば活龍では無い、圓悟の師匠五祖山の法演禪師は雪竇の頌古一冊の中で、只此の澄潭不許蒼龍蟠と云ふ一句のみを愛すと言はれたと云ふことぢや、實に此の一句は此の公案の頌ばかりでは無い、大乘佛法の眞意義はすべて此の一句に含まれてある、然るに多くは佛法を澄潭止水の寂寞の所にばかり求めて居る、其れ故に厭世に陥り消極に墮するのである、いづくんぞ知らん佛法の本旨は洪波浩渺白浪滔天の處に活動するのである、後の第九十五則の頌には臥龍不鑑止水、無處有月波澄、有處無風浪起と云ふてある、無處有處といふは活龍の居る處と居ぬ處といふことである、圓悟の着語に見るや澄潭の中に蒼龍が居るか居らぬか能く見えたかと云ふのである、然らば洪波浩渺白浪滔天の處に居ると思ふか、それも亦た見んとすれば還つて難しよ、其れでは結局蒼龍は什麼の處に向つて蟠まるぞ、此に至りては這裡直に得たり摸索不着で到底蒼龍を捕へることは出来まい、これで本則の頌は済んだが雪竇が例の如く更に一基の塔を建立した、層落々サテも立派な高塔よ十方法界に充滿して無上の莊嚴を極めてゐるぞ、着語に眼花すること莫れ、これは雪竇に向つてお前は其の様な層落々などを仰ぎ見て眼を廻はさぬが好いぞ、眼花して什麼をか作す其の様なものに見とれて何うするのぢやと云ふ、影團々さて其の高塔の影が團々と輝きわたつて美しくいことよ、着語に通身是眼、全身すべて眼の者なら見えるかは知らぬが、然し七に落ち八に落ちんヤハリ眼が散らつて十分に本統のものでは無い、兩々三々舊路に行く、帝も國師も耽源も雪竇も皆同じ所を迂路つて居るぞと抑へ、更に左轉右轉して後に隨ひ來ると罵つた、千古萬古人に與へて看せしむサテ此の落々團々たる層塔は無始劫來未來永劫巖然として樹立せられてあるから、誰でも皆歴々分明に



こられるはずぞと云ふ、そこで圓悟が見るや人に與へて看せしむと言ふが、諸人どう見たぞと警醒し、瞎漢作麼生か看ん盲人どもに何が見えるものか、先づ第一に雪竇お前は見たかナと云ふので闍黎、覓得見すやと着語した、此一則の着語はすべて皆抑へたのであるが、實に此の則の如き本分の事に至りては一言も一句も口舌に掛くべきもので無いことを示すが爲めに、圓悟の慈悲廣大なる所である、吾人お互ひに圓悟の感恩に辜かぬやうにと心がけねばならぬ。

第十九則 俱抵指頭禪

垂示 一塵舉大地收。一花開世界起。只如塵未舉花未開時如何著眼。所以道如斬一縷絲。一斬一切斬。如染一縷絲。一染一切染。只如今便將葛藤截斷。運出自己家珍。高低普應。前後無差。各々現成。儻或不然。看取下文。

一塵とか一花とか言へば甚だ微細なることのやうに思ひ、世界とか大地とか聞けば大層に廣大なやうに思ふのが凡夫の妄想である、正眼に見來れば大地を難れたる一塵もなければ、一塵を除いて大地を見ることも出來ぬ、試みに其れは一境のみ此れも一塵のみと言ふて微細の物を取り除いて見よ、大地は遂に皆無で

あるぞ、又試みに其れは一花のみ、此れは一葉のみと都べての物を取り除いて見よ、外に世界と云ふ物があるかい、其れと反對に今は一塵を舉れば其の一塵の中に盡大地が皆收まる、一花が開けば其の一花の上に十方世界の春色が起つて見える、然し其れは一塵一花を見た上のことであるが、塵未だ舉らず花未だ開かざる時の如き如何が眼を著けん、都て何事でも機前に向つて見込みが立たなくては臍を嚙むの悔を招く一塵已に舉り一花已に開いて後では遅い、天地開闢以前に向つて宇宙を達觀し、父母未生以前に向つて自己を識得せんければならぬ、所以に道ふ一縷絲を斬るが如し、一斬すれば一切斬す、これは糸の喻を以て前の意味を裏面から現はした、一塵に大地が收まつて在るのだから、其の一塵の處分が分れば大地の處分が附くわけである、例へば一つの小手卷の糸を一箇所ブツリと斬れば悉くバラ／＼になるやうなもの、又その糸を染める方から云ふても同じこと、小手卷の糸を藍瓶の中へツブリと浸せば、すぐ同じ色になる、只如今葛藤を將て裁斷し自己の家珍を運出せば吾々お互の上になつても、動もすれば種々様々なる妄想執着のみならず、學解だの識見だのと色々なる葛藤のために自由を得られないのであるから、すべての思慮分別を棄て、即ち葛藤を裁斷して而して自己の本心本性を天真爛漫に實踐躬行するやうにさへなれば、高低普く應じ前後差ふことなく各々現成せん如何なる境遇にあつても、如何なる事情に立至つても、自由自在に活潑の運動が出来るであらう、儻し其れが未だ然らずとならば下文を看取せよ、誠に好いお手本であらうぞと云ふ。



○熱則普天普地寒○換却天下人舌頭

【本則】**舉**俱**抵**和**尙**凡**有**所**問**○有什麼消息只**豎**一**指**○這老漢也要坐斷天下人舌頭

俱抵尙和は南嶽下の第五世で、達磨十一代の法孫である、婺州の金華山といふ處に住して居られて、師匠の天龍和尙から一指頭の禪といふことを相承し、生涯誰が何を問ふても只指を一本たてゝ見せるより外には一言一句も説かない人であつた、一塵未だ擧らず一花未だ開かざる以前の活機、たゞ一指頭の上に現成せしめて赤裸々露堂々である、凡そ所問あれば下に圓悟が什麼の消息かある、また鈍根の阿師と云ふた俱抵和尙は指一本たてることより外に何も知らない鈍根の阿師であるに、それに何を問ふたからと云ふて、何の消息があらうぞと云ふのであるが、其の鈍根が天下の舌頭を坐斷するのであるから、如何にも尊貴な如何にも峭峻なる鈍根である、此の際に於て何を問ふことのあるべきはずでは無いに依て、亦た什麼の消息を通すべきでは無い、只一指を豎つ下に、這の老漢天下の人の舌頭を坐斷せんことを要すと着語して、此の鈍根の價值を揚げた、其次の熱するときは普天普地熱し寒なるときは普天普地寒といふ着語と、又其次の天下人の舌頭を換却すとある二語は評唱中の語句が混入したので、着語として見るべきでないといふ風外老人は言はれてある、いかにも其うであらうと思はれる、此他にも後人の妄添もあれば又は一句に言ふべきを二句に分けたり、二句を一語に誤つたりしたのも多くあるかと思はれる、さて此の一指を豎つと云ふが如き公案に至りては、如何にしても講話し得べきものでは無いに依つて、お互ひに實參實究し

て唯獨りでニコリと笑ふ時に至るより外は無い。

【頌】**對揚**深**愛**老**俱**抵○癩兒牽件同**道**方**知** **宇**宙**空**來**更**有**誰**○兩箇

更有二箇也須打殺○**曾**向**滄**溟**下**浮**木**○全是這箇○是則是太孤峻 **夜**濤**相**共**接**○三箇

**盲**龜○擲天摸地○有什麼了期○接得○何用○據

對揚とは前にもあつた通り、人に應對して宗旨を擧揚すること、其の對揚のしかたは千佛萬祖みなそれぞれに一家風あるけれども、雪竇は別して深く此の老俱抵の只一指を豎てるばかりで、其他に佛とも法とも迷とも悟とも言はない所を愛するぞと言ふ、そこで圓悟が癩兒件を牽くと言ひ、又同道まことに知ると言ふた、俱抵と雪竇は癩病人の行列のやうで、蛇の道は反鼻が知ると云ふわけであるから、深く愛すは尤もぢや、しかし其の指を豎てると云ふことも、結局一機一境たるを免がれず此れで本分の現成とは言はれまいぞと抑へた、要する所は吾々が此の公案に參するに當りて、一指頭と云ふことに心を奪はれるやうであつたならば千里萬里である、仍て圓悟の慈悲、この一語を下して、吾人の那路に迷ふのを救はれたのである、第二句に宇宙空じ來りて更に誰かある、世界中にあらゆる佛祖を悉く検査して見た所で、此の俱抵のやうな者が又と二人あるかいと云ふのぢや、圓悟が兩箇三箇更に一箇あらんも也た須からく打殺すべしと云ふ、此の着語は二つ續けて見るが好い、一指頭の禪は、古今上下俱抵の一人舞臺で踊らせるが好い、若



し一人でも眞似などをする者があつたなら打殺してしまふが好いと、圓悟も立派に癩兒の道づれになつてしまふた、次に三四の句意に就ては、古人の色々な異説があつて、天桂和尚は圓悟が見誤つたのであるとも言ひ、風外老人は圓悟の評唱に衍文がある、後人の妄添であるといふてゐる、なるほど圓悟平生の調子では無い處がある、仍て天桂風外二老の意を參酌して此二句を見れば、雪竇が俱胝を深く愛して、俱胝の外に一人も無いと云ふ意味をます／＼強く進めて、千佛萬祖を罵倒するに至つたのである、乃ち曾て滄溟に向て浮木を下すと云ふたは、法華經にも華嚴經にも出て居る盲龜浮木の譬を借りて來たのである、其の故事は誰も知つて居る通り、大海の中に一つの龜が居て、其の龜は腹の下に目が一つあるだけであるから一生涯たつても天上を仰いで日を見ることが出来ない、そこで偶々孔の一つあいた木が流れて來たのに取り附いて、其の孔のところへ腹の下の目をあて、始めて天日を見るやうなものであると云ふ譬である、之は否々一切衆生が煩悩生死の大海に浮き沈みの苦しみを受けて居るのを、諸佛の大慈悲を以て法を説き教を立て、下さるのであるけれども、業報の悪い者は其の法を聞いて道を得ることの容易ならぬに喩へられたのである、そこで今この會で滄溟に向つて浮木を下すと云ふたのは、三世の諸佛歴代の祖師が法を説き道を弘められたことを申したので、之を第二義建化門から見るときは已むを得ぬ次第であるけれども、若し本分の上から言ふときには一切衆生本來成佛で迷ひの凡夫もなければ之を救ふべき世話もないはず、然るに浮木を下すなどは餘計なことぞと云ふので、圓悟が全く是れ遺箇是は則ち是なるも太孤峻生まことに已むを得ざることながら取り附きやうも無いことよと言ひ、更に破草鞋什麼の用處か有らんと

ふ、いよ／＼結句に夜講相共に盲龜を接す而も其の浮木を青天白日の波靜かなる所へ下したのでは無い、暗夜の風濤あらし眞只中へ投じて、千佛だの萬祖だのと多くの世話焼き連中が相共に盲龜を接し盲目どもを相手にして何うするといふことぞ、然るに俱胝和尚は、盲龜とも浮木とも、迷とも悟とも、佛とも法とも其の様な抹殺くさいことは少しも言はずに、只一指を豎てる、其の妙味といふものは、實に宇宙空じ來りて更に誰か有るといふべきであると言ふたのである、其れ故に圓悟も天を擲し地を撲して什麼の了明かあらん、餘計な心配をして何の役に立つぞと、又接得して何の用を作すに堪えんと言ひ更に令に據て行ひ無佛世界に聲向せんと云ふ、即ち佛とか法とか迷とか悟とか云ふ第二義の閑妄想を排除し盡すのである、最後に鬪黎一箇の瞎漢を接し得たりと一轉して愈々本分の事を明かにせられた、之は雪竇お前は夜講相共に盲龜を接して何の効があるかと言ひ、われ圓悟も其れに同意して何の用處があるの何の了期があるのと言ふたけれども、到頭お前のやうな大盲目を一人接し得たと言ふたのである、これで其の本分の事を談ずる場合には、滄溟とか夜講とか盲龜とか云ふことを都べて其儘に本色の大莊嚴と見る目がなければならぬのである、然るに凡夫の情見を以て見ると、迷ひとか暗いとか苦しむとも云ふやうな言葉を聞けば直に其れを憎み賤しむ心を起す、そんなことでは本分の事は話せない、地獄の釜の下の火の光も極樂の彌陀の白毫の光も差別なきに至つて、始めて雪竇や圓悟の話聞く資格があるのである。

第二十則 龍牙西來意



垂示 堆山積嶽。撞墻磕壁。佇思停機。一場苦屈。或有箇漢。出來掀翻大海。踢倒須彌。喝散白雲。打破虛空。直下向一機一境。坐斷天下人舌頭。無爾近傍處。且道從上來是什麼人。曾恁麼試學看。

山に堆く嶽に積み墻を撞ち壁を磕くと云ふは、無限の空間に充滿して到る處に普ねく有るぞと云ふ意味で、本體本性の常住普遍であることを明かされた、然るに若し佇思停機と彼れか此れかと考へたり工夫したりするやうなことでは、一場の苦屈まことに氣の毒な次第である、それとは反對に箇の漢とも言はれるほどの衲僧が掛けて来て大海を掀翻し須彌を踢倒すと宇宙萬象を悉く蹴飛ばして眼中に一物をも留めず、其の又上に其の一物をも留めないと云ふ痕跡をも忘れる有様を白雲を喝散し虚空を打破すと云ふた、要する所は有とか無とか云ふ都べての思慮分別を超過した境界であつたならば、直下に一機一境に向つて天下人の舌頭を坐斷する働きがあつて、如何なる場合にも自由自在を得て誰も何とも言ふことが出来ないから衲僧が近傍する處なからん、如何なる人も傍へ寄り附くことが出来ないことになる、從上來是れ什麼人か恁麼にし來れる、昔から誰れぞ其の様なことを實行した人があつたかナ、試みに擧す看よと本則を呼び出した。

本則 擧龍牙問翠微如何是祖師西來意 也 諸方舊話 微云 與我過禪板來 泊合放過 禪板作什麼 牙過禪板與翠微 龍不解騎 可憐許 承當不微接得便打 著打得箇死漢濟甚事 牙云 打即任打要且無祖師西來意 這漢話在第二頭 牙又問臨濟如何是祖師西來意 曹溪波浪如相似 無限平人被 諸方舊案再問將 來不直半文錢 濟云 與我過蒲團來 陸沈 一狀領過 一坑埋却 牙取蒲團過興臨濟 依然把不住 依然不恰 濟接得便打 著可憐打這般牙云 打即任打要且無祖師西來意 將謂得便宜 賊過後張弓

龍牙といふは湖南の龍牙山妙濟院に住して居られた居遁禪師といふ人で、後に證空大師と諡號を賜はつた大徳である、法を青原下の五世洞山悟本禪師に嗣ぎ、達磨大師第十二代の孫である、翠微といふは京兆終南山の無學禪師と申して、青原下の三世丹霞天然禪師の法嗣であるから、龍牙の祖父の雲岩と法の從兄弟に當る人である、即ち龍牙よりは餘程の先輩であるといふことが分る、然るに龍牙は己に此の祖師西來意といふ問題に於て、自から大に悟る所があると思ふて心に誇つて居る所から、他の先輩に向つて試験しやろと思ふ料簡を起し、遂に此の問答に及んだものと見える、とかく誰でも少壯の頃には何事に就いても、



此の程度の時期があるものと見える。如何なるか。是れ祖師西來意の問題は前にもあつた通り、達磨大師が遙々と何ういふ心持で支那へ来たかと云ふ問題で、その頃に處々方々で頻りに研究せられつつあつたのである、それ故に圓悟が、諸方の舊話也た勘過を要すと著語した、勘過といふは又勘檢とも勘破とも言ふので、他人の悟りを試験して見ることである、故に此の著語は祖師西來意といふ問題は己に陳腐な話であるに、それを持ち出して他の翠微を勘檢しやうとするのか、これは面白いことになるであらうぞと豫想したアンバイ、微云く我がために禪板を過し來れ、サスガに翠微老漢ちや落つき拂つてソレ其處にある禪板を取つてよこしてくれと言はれた、禪板といふは長い時間坐禪をして疲れた時に、チヨイと倚り懸るために作つてある板である、そこで圓悟が禪板を用ひて什麼かせん祖師西來意の間に對して禪板を何うするか、龍牙を打ちなぐらうとするのなら拳骨でも何でもスバリと早く打つが好いでは無いか、然るに禪板を取つてくれなど、手ぬるいことを言ふて居るのは、泊んど放過すべし、打つべきものを打たずに許してやるやうなものぞ、然し龍牙が之れに對して何うすることやら、暇まことに危険なことぞと危ぶんだ、牙禪板を過して翠微に與ふ、此時に龍牙に十分の力があつたならば、直に其の禪板を取てビシヤリと翠微を打つべきであるに、オメ〜と對手の言ふ通りに禪板を過してやるといふは也た是れ把不住とりとめの附かないことよと圓悟が著語した、又青龍に駕與すれども騎ることを解せず青龍ともいふべき程の良い馬を授けられながら、それに乗ることを知らない龍牙の意氣地なしよと抑へ、更に可惜許おしいことよと言ひ又當面に承當せず彼れが禪板を過し來たると言ふた其の一言下に承當、すなはち豁然大悟せねばならぬとこ

ろであるのにと重ね〜龍牙に小言を云ふた、微接得して便ち打つ翠微は果して禪板を受取るや否やビシヤリと龍牙を打つた、圓悟が着うまく打ち得たぞと賛成した、然し箇の死漢を打着して甚事をか濟さん翠微は頻りに龍牙を悟らせやうとて本分の提携に及んでも、其の効がないに依て也た是第二頭に落在し了れり氣の毒な次第よと言ふた、牙云く打つことは即ち打つに任す要且つ祖師西來意なしコレが其の龍牙が自から大悟徹底したつもりで誇つて居る所なので、祖師の西來は無意であると云ふ一見識を擔いて居るのである、そこで此の祖師西來意なしと言ふことを言ひたいばかりで、打たれると知りつつもオメ〜と禪板を翠微に過したのであるから、翠微が禪板を取て直にビシヤリと打つた時に、龍牙の方では思ふ坪へスバリとはまつたやうな心持で、直に打つことは打つに任す、祖師西來意なしと言ひ放つたのである、すべて何か一つ己れに取り着いて居る所があつては、宇宙の全體に涉る大真理が見えるものではない、それ故に佛法は孰れの宗派に於ても無我無念を第一とし、他力教などに於ては別して瓜かすほどでも自己を頼む心をもつてはならぬと教へるのである、然るに龍牙が未だ年が若くて修行が中途であつたから、切角の翠微の深切も其効がない、そこを圓悟が遺の漢第二頭に話す己れの身分も知らずに口のへらないことを言ふて居る、況んや賊過後の張弓何の役に立つぞと抑へた、然るに翠微は其れきりで何とも言はないから龍牙は立派に翠微を勘破したものであるに依て、此上は世間に尤も名高い臨濟和尚を一つ勘破してやらうと云ふ勢ひで、牙又臨濟に問ふ如何なるか是れ祖師西來意と同じ問題を提出した、臨濟といふは謂ゆる臨濟宗の高祖で其法脈を言へば南嶽下の第四世黃檗希運禪師の上足の弟子であるから、達磨大師第十一世の



孫である、圓悟の着語に諸方の舊公案再び將ち來ると言ひ、又半文錢に直らずと言ふた、賣丸のこりの品には値打がないぞと言ふのである、濟云く我が與めに蒲團を過し來れ翠微は禪板を取つてくれと云つたが今度は蒲團を持つて來いと言ふ、禪板と蒲團と品が違ふばかりで全く同じ形式の答である、そこで或は禪宗の問答といふものは同じ一つの型があつて、誰でも同じ軌轍を踏んで往くのであらうと思ふ者もあるかは知らんが、決して其ういふわけのものでは無い、翠微には翠微の眉毛があり、臨濟には臨濟の眼目がある、その所を圓悟が曹溪の波浪如し相似たらば限りなき平人も陸沈せられん、此の七言二句は後の第九十三則の頌に雪竇が言ふた句である、今は翠微も臨濟も同じ曹溪の法孫であるから似て居るなどと思ふたならば宗旨は見えぬぞ、若し佛法が其様な人真似で濟むものならば、一切衆生悉く墮落してしまはうぞと云ふ、陸沈といふことは莊子や論衡などにも見える語で、讀んで字の如く陸地で沈溺するといふ事であるからモトは隱遁する意味であつたのを、後に失敗するといふやうな事にも使ふことになつたものと見える、龍牙は例の如くに蒲團を取て臨濟に過興す圓悟が依然として把不住ヤツぱり取り留め得ない、又依然として不伶俐いつまでも愚な奴ぢやと言ひ更に越國に依倚として揚州に彷彿たり、アチラへ往てはマゴ／＼コチラへ來てはブラ／＼實につまらん男ぞと抑へる、濟接得して便ち打つ圓悟は相變らず、着と言ふて此の打つたのを稱揚した、然し惜む可し這般の死漢を打ちたることよ打たれた龍牙の皮の下に血があつたなら、今度は此處で當然大悟と往くべき所にといふ心ぞ一摸に脱出す然し翠微も臨濟も同じ型で別に新機軸もない牙云く打つことは打つに任す要且つ祖師西來意なし圓悟が灼然と龍牙が相變らず其う言ふて

西來無意の悟りを振り廻はすであらうと思ふて居たに、果して其うであつたと言ひ、更に其れが即ち鬼窟裡に活計を作すと言ふもの、亡者の生活が何で人間の用に立つものか然るに龍牙は却て將に謂へり便宜を得たりと自分で首尾よく臨濟を勘破したつもりであらうが、いつくんぞ知らん賊過後の張弓まことにつまらぬこと、徹頭徹尾抑下しぬいたが、此の公案は始めから終りまで打つ打たれるといふ上に就ての話でほとんど劍術の話聞くやうである、要する所は禪機は一毫ばかりも隙間のあるを許さぬと云ふことが、こゝらの機合で多少合點がゆくであらう。

頌 龍牙山裏龍無眼

勝○誤○別人○即○得○泥○裏  
洗○王○地○天○下○人○總○知

死水何曾振古風

然○忽

付與盧公

也○則○分○付○不○着○漆  
桶○莫○作○這○般○見○解

禪板蒲團不能用

教○阿○誰○說○備○要○禪○板○蒲○團  
作○什○麼○莫○是○分○付○閣○黎○麼

只應分

此の一則には、雪竇の頌が前後二首あつて、これが即ち前頌である、此の頌に就ては古來色々喧ましい議論もあるが、今は風外老人の斷案に據ることにする、風外老人の説に據れば、一體に此の公案を以て龍牙和尚の生涯を見やうとするのが誤りである、これは龍牙が未だ本統の悟りが開けない時の事であるから、其のつもりでさへ見て置けば何も見難い所は無い、それ故に今此の龍牙山裡龍に眼なし死水何ぞ曾て古風を振はんと云ふたのも、龍牙が大奮發で翠微臨濟の二大家を勘檢にと出かけた機鋒は立派な龍の姿であ



るけれども、惜しいことには眼が無い盲龍である、それ故に西來無意といふやうな自分免許の悟りを振りまはして居るので、二大老の活手段を領得することが出来ず、死水の底に眠つて居るのであるから、少林曹溪の古風を振ひ興すことが出来ぬ、そこで翠微が禪板をと言ふても、臨濟が蒲團をと教へても、少しもそれを活用させることが出来ぬ、結構な道具を使ふことが出来ぬなら、吾れ雪竇に分付せよと云ふので、蒲團禪板用ること能はずんば只應に分付して盧公に與ふべしと言ふた、盧公といふは雪竇の別號で自分のことを謂ふたのである、圓悟の着語は第一句に、瞎まことに抑せの如く盲目で御座ると言ひ、別人を慢ずることは即ち得たり龍牙を侮慢するは御勝手であるが、吾れ圓悟などは其う慢じてくれまいぞ、雪竇お前は人の事を其様に言ふけれども泥裏に土地を洗ふので似たり合つたりなものでは無いか、天下人總て知る龍牙に眼の無いことを知らない者は無いに、珍らしさうに其様なことを言ふ者では無い、第二句の下に忽然として活する時奈何ともすること無からん、死水裡の盲龍と思ふて居ても若し遽に生きて働くことになつたら何うするぞ、累天下人に及び出頭不得たらん、若しも此れが活龍になつて翔るといふことになつたら、其の累ひが天下に及んで一人も頭を擧げることが出来まいぞ、第三句の下に阿誰をして説かしめん其の蒲團禪板を用ること能はざる意旨を誰に辯護してもらふたならば好からうかと擲論し備蒲團禪板を要して什麼をか作さん其様な不用の品を龍牙から受取つて何にするぞ、是れ闍黎に分付すること莫しや大かた龍牙はお前にお渡しするつもりであらうぞ、第四句の下に也た則ち分付不着ならん横合から手を出されては龍牙が渡し得ないであらうと言ひ、結局漆桶這般の見解を作すこと莫れ漆桶といふは眞暗で目も鼻も

分らぬと云ふやうな所に使ふ俗語と見える、禪板蒲團を分付せよなどとは何のこととも分らぬぞと雪竇を抑へるやうに言ふて、門下後學に參究の注意をせられたことと見える、次に後頌ぢや。

頌 這老漢也未得勦絶復成一頌灼然○能有幾人知○自盧公付  
了亦何憑盡大地討恁麼人○教誰領話坐倚休將繼祖燈草裏漢○打入黑山下○堪  
對暮雲歸未合錯○果然出不得遠山無限碧層層寒却備眼○寒却備

更參三十一

這の老漢未だ勦絶することを得ず勦絶といふは古い所では書經などにも見える言葉で、事のサツパリとした意味であるさうだから、今此の龍牙の問答に就ての批評が何うも未だサツパリとせぬに依て、もう一つ頌して見やうと云ふた、これは第二の頌の小引である、圓悟が其れに着語して灼然テツキリ其うであらうと思ふた、能く幾人の知ることありや雪竇ならでは他に知る人は無からう、自ら知る一半に較れり前の頌だけでは薄團禪板の始末が附かぬ所を能く自から知られたのが値打ちやと云ふ、頼ひに最後の句あり此の最後の句があつてこそササガに雪竇であると知りて托上した、サテ其頌は第一句に盧公に付し了ると亦た何ぞ憑らん前に蒲團禪板の使ひやうを知らぬなら盧公に渡せといふたが、それを盧公が受取つたからと云ふても、別に之を以て佛とか法とか有り難さうな御用に立てやうと云ふのでは無い坐倚將て祖燈を繼ぐを休



めよ。其の蒲團を敷いて坐禪をしたり其の禪板に倚り懸つて知識らしい顔をしたりして、それで佛祖正傳の傳燈を繼いだ大和尚であるぞといふやうなことを致さぬが好いぞ、われ雪竇は其の様な抹香くさいことは嫌ひぞと言ふのぢや、そこで圓悟が盡大地無量の人を討ぬるに得がたし世界中どのやうに探しても雪竇のやうな見識の人は稀れであると大賛成ぢや、更に誰をして領話せしめん然し此の雪竇の大見識を能く領解して其の話し相手になる者は誰であらうぞと門下一同を見廻はしたかと思はれる、第二句の下に草裡の漢祖燈を繼ぐを休めよと云ふて、自己の本分を忘れる者を警醒せられたは、草裡に混じての慈悲心ぞと云ひ、佛法だの祖燈だのと云ふ抹香くさい所を打破して黒山下に打入して坐し、鬼窟裡に落在するのかと注意した、極樂へ往生するには及ばないぞと云へば、それなら地獄へ往かうかと云ふやうでは、溺を避けて火に投ずるのぢや、地獄も極樂も、生死も涅槃も、すべて氣にかゝらぬやうになりたいのである、それは如何なる姿であらうか其れを三四の句に對するに堪たり暮雲の歸り未だ合せざるに遠山限りなき碧層々何と好い景色では無いか、暮雲には限らない、遠山には拘はらない、花とさき紅葉とちり、月と照り風とふく、宇宙萬象何の處か好風景ならざる、それを何ぞや彼れが此れかと擇び立てをして、本來の風光をことごとく疵ものにしてしまふ、誠に淺ましいことではある、圓悟が第三句に着語して一箇半箇と言ふた、此の絶景に對するに堪えたる者は多くはあるまい、天下に一人が半人よ、然し此の景色を好いとか悪いとか言葉に出してはモウつまらぬぞと云ふので擧着すれば即ち錯らん然るに今雪竇が對するに堪たりなどと言ひ立てた果然として出不得ハヤ脚が抜かれぬぞと抑へた、第四句の下に偏が眼を塞却し偏が耳を塞却す雪竇が

此のやうな景色などを並べ立て、偏等諸人を盲目にするぞ聲啞にするぞ、此の遠山限りなき碧層々すなはち法性眞如の不可思議なる境界に耳目を留めるやうであつたならば深坑に没溺して浮ぶ瀬はあるまいぞ更に參ぜよ三十年、これは容易に看過することは出来ない所よと吾人に重々慈愍の垂誡である。

第二十一則 智門蓮華荷葉

垂示 建法幢立宗旨錦上鋪華脫籠頭卸角馱太平時節  
或若辨得格外句舉一明三其或未然依舊伏聽處分

法幢と云ふは人の師となつて法を説くものが、其の徽章として幡幟を門頭に建てるのが印度の風習であつたと見える、今で言へば學校の校旗のやうなものであらう、宗旨といふ言葉は、今さら申すまでも無いが佛祖正傳の主義のことぢや、佛祖正傳の法といふものは法幢を建て宗旨を立て、説き立てるには及ばないもので、イナ説き立てればハヤ第二第三に落ちて本統のことには成らぬ、天然自然に宇宙萬象其儘が活潑自在な正法のあらはれた姿である、けれども愚迷の凡夫を誘引する方便として已む事を得ず法幢を建てたり宗旨を立たりするのであるから、乃ち錦上に花を鋪くのである、美しいは美しいが餘計な事よ、籠頭を脱し角馱を卸すといふことは前にもあつた通り、馬を束縛して荷物を負せてあるをすべて取り除いて自由自在にさせることで、即ち八萬四千の煩惱も八萬四千の法門も共に掃ひ盡して縱横無礙なる境界、そ



れは太平の時節である、サテ以上は目的やら方法やらであるが其の方法を以て其の目的を達する手段に至つては、其の人の機根次第であつて或は若し格外の句を辨得するほどの上根上機のものであつたならば、明三つわづかに神影を見て走る良馬の如くに一を聞て三を知ることも出来やうけれども其れ或ひは未だ然らずんば舊に依て伏て處分を懸け例の如くに一則の公案を拈提して見せやうぞと云ふ、格外の句といふことは、釋迦一代の説法五千四十八卷の經文と云ふが如きは、皆其れ々々規格のある言教であるが、今この教外別傳の祖師門下に於ては、都べての規格に拘はらず、自由自在に咄とでも喝とでも乃至打つとも擲ぐるとも、只その目的さへ達し得れば好いのであるから、即ち格外といふのである。

**本則** 學僧問智門蓮華未出水時如何鈎在不疑之地○泥裏洗智

門云蓮華一二三四五六七僧云出水後如何莫向鬼窟裏作活計○又恁麼去也門云。

荷葉兩頭三面○笑殺天下人

智門といふは諱を光祚と曰ひ、此の碧巖集の頌を作つた雪竇重顯禪師の師匠で、青原下の第八世香林澄遠和尚の法を嗣ぎ、達磨大師第十四世の孫である、宗派を言へば五家の中で雲門宗に屬し、雲門香林智門と相承したのであるから雲門の嫡孫にあたる、隋州の智門といふ寺に住して居られたに依て智門の祚といふのが所稱になつて居る、蓮華未だ水を出でざる時如何之は水を出でざる前と水を出で、後との二段の間

で、敢て蓮華に限つたことでは無い、太陽未だ昇らざる時如何、已に昇りて後如何でも、花未だ開かざる時如何、開いて後如何でも好い、要する所は世界未だ成立せざる以前の本體はドンなもので御座るかとの問である、故に圓悟は不疑の地に鈎在す、彼れの此れのと議論するに及ばぬ場所へ餘計な鈎針を下したものでやと言ひ、又泥裏に土塊を洗ふ、幾ら商量して見たからといふてもサツパリ綺麗に洗ひ立ての出来るものは無いぞと言ひ、又那裏より這の消息を得來る何處から其の様な問題を持つてきたぞと言ふ、畢竟不可思議不可説の境界は言詮を以て論量すべきでは無い、と言へば何やら別段に異はつた事でもあつてかと言ふに、智門云く蓮華、如何なるか是れ未だ事實に現はれざる時の理想といふ問に對して、答へて云く理想といふたわけで何の不思議もないことぞ、故に圓悟は一二三四五六七と評し、何も珍らしいことでは無い、六々三十六といふも、山は是れ山と云ふも同じことよ、然しながら此間の消息が天下人を疑殺する大問題ぞ容易に看過しては濟まぬ、僧云く水を出で、後如何然らば其の蓮華が水を出た後は何うであらうぞと云ふは、前の例で言へば天地萬物の現象あらはれた後は如何とも、理想が事實と成つた時は如何とも見える、着語は鬼窟裡に向つて活計を作すこと勿れ、鬼窟が料理の献立をするやうなことをするな、萬物の森森羅々たるに目を廻はすなといふたやうなアンバイ又恁麼にし去るや、前の問答で埒が明かないで出の不出のと兩端に迷ひ、未だ其の様なことを問ふて居るか抑へた、門云く荷葉、前に水を出でざる時には蓮華であつたのが水を出た後は荷葉であると言ふ、蓮華と荷葉と是れ同か是れ別か、法性法身の如來様と花や紅葉は是れ同か是れ別かの問題である、然るに圓悟が幽州は猶ほ自から可なり、最も苦なるは是れ江南、此



言葉は宋朝の末に宋の天子は金國の爲めに捕虜にされたりして大困難を極めたのは幽州すなはち今の北京の方に都して居た時のことであつたが、其の後江を渡りて江南へ都を遷し金の難を避けたつもりであつたけれども、それが早や宋の亡ぶる本となつたので、時の俚諺に幽州は猶ほ可なり江南は更に苦しと言ふたのであるさうな、それを今こゝへ借りてきて前の蓮華と答へられた時は、まだ合點し易いやうであつたが、今度の荷葉に至りては容易に會し難いことになつたぞと言ふて、參學の徒に疑團を起させるのである、更に智門の答が兩頭三面で色々なことを言ふから合點がゆかぬぞと言ひ、又智門が色々なことを云ふて、天下人を笑殺す世間の笑ひものにされるであらうぞと諷つたやうな言葉を以て智門の作略の非凡なることを稱揚したのである、すべて着語には裡面から毀譽抑揚したのが多いのであるから、其のつもりで見ねばならぬのである。

頌蓮華荷葉報君知老婆心切出水何如未出時泥裏洗土

江北江南問王老主人公在什麼處一狐疑了一

狐疑一坑埋却○自是爾疑○不也好○不可○江北江南問王老主人公在什麼處○備自踏破草鞋一

智門が蓮華と言ふたり荷葉と言ふたりして宇宙の本體妙用を君等諸人に報知せられることであるが、其水を出でざる以前と、又水を出た後と云ふやうな言葉に取り着き廻つて色々妄想する者もあらうが、一體

出水は未出の時に何如れ此の何如といふ字をナンゾシカンと訓んでは何となく出水よりも未出の時の方が勝れて居るかのやうに聞えるけれども、此の字は孰如といふ字と同じことで、イツレと訓むが好いと云ふことである、そこで圓悟の着語には第一句に老婆心切、蓮華だの荷葉だのと手品使ひのやうに色々な物を持ち出して子守婆さんの御深切めいて居ると云ひ、現成公案といふは山は山のまゝに水は水のまゝに、現在目前そのまゝが眞如法性の當體であることを言ひ顯はした言葉で、即ち今の蓮華と云ひ荷葉と云ふた其れが直に現成公案ぞ、さりながら已に蓮とでも荷とでも口に言ひ出せばハヤ文彩已に彰はるで幾分かお飾りが見えるぞと云ふ、第二句に泥裏に土地を洗ふ、出水の未出のと論量すべきでは無いぞと言ふたからと云ふても其れがハヤ泥水で土を洗ふやうなもので、綺麗サツパリとなるものではない、とかく言句や伎倆にかけてはモウ第二第三たることを免かれぬぞ、しかし出水未出と分開して工夫するも也、好からうと許し更に備働なるべからず、之は容易に看過しては濟まぬ所ぞと諸人に注意せられた、備働といふは器の未だ成らざる貌とか申して事物の不満足なることを言ふのであるさうな、第三句に江北江南王老に問はば、然るに此れで合點することが出来ないで、處々方々を尋ねあるき、彼れか此れかと妄想し廻つたならば一狐疑了。一狐疑で、一つの疑ひが解けたかと思へば更に一つの疑ひが起り、枝葉に枝葉が茂つて到頭幹も根も分らぬことにならうぞと雪竇の警誡ぢや、王老といふたり王老師といふたりするのは、支那人の姓には王とか李とか張とかいふのが大層多いので、日本ならば横兵衛でも太郎作でも熊でも八でもと云ふやうな所へ張三李四といふやうなことを言ふが、此の王老も其の仲間では田舎の和尚どもと云ふたやうなアンパイと



見える、第一句の着語に江北の江南のと迂路つきあるく奴は自家の主人公什麼の處にかある裏家の大同様だと云ひ、且つ王老師に問て什麼か作さんと叱り、幾ら尋ね歩いても備目ら草鞋を踏破す、くたびれ損の旅費つひやしであらうぞと言ふて自己の事は自己に参考せねばならぬことを示される、結局の着語に一坑に埋却せん其やうに餘處を尋ねあるく連中は皆打殺して一つ穴へ埋めてしまへと言ひ、自らは備疑ふ誰も外から疑はせるのではないぞ、然るに疑情未だ息まぬといふは氣の毒なことぞと言ひつゝビシヤリと一棒を與へて、會すやどうぢや合點がゆかぬかと圓悟重々の慈悲を垂れる。

第二十二則 雪峰鼈鼻蛇

垂示大方無外。細若隣虛。擒縱非他。卷舒在我。必欲解粘去縛。直須削迹。吞聲人々。坐斷要津。箇々壁立千仞。且道是什麼人境界。試舉看。

大方無外と云ふは宇宙萬物の本體が無限の空間に充塞して居ることを云ふので、無外と云ふも無邊と云ふも皆無限の義である、無限であるからコ、からが内でコ、からが外といふ隔ては無い、即ち無外といふ一語で内も外もない何處も彼處もといふ事になる、實に眞如とか法性とか法身佛とか言はれる宇宙の本體は

之を廣げて見れば此の通りであるけれども、之を縮めて見れば細なること隣虚の若し、隣虚といふは都べての物質を破て推いて微塵にして、更に碎いて碎いてモウこれより細かに碎くことが出来ないといふほどになつた時には、虚空と同様になる、已に虚空と同様であるけれども、それを直に虚空とは言はれないに依て、虚空の近鄰すなはち無の鄰りであるといふ所から鄰虚塵といふのである、法の本體は是の如きもので、儒教の説にも之を放てば六合に彌り之を卷けば退て密に藏ると言ふてある、それ故に吾人お互ひが其法が手に入りさへすれば擒と取り抑へることも縦と放ち棄てることも他に非ず己れの自由であり、卷と縮めて使ふことも舒と廣げて用ふることも、我に在り他人のお指圖を受くべきでは無い、然るに吾々凡夫は種々様々の妄想執着に己れと己れを束縛して自由を得られないのであるから、佛祖慈愍のあまりに色々方便を廻らして濟度の法を建てられてある、要する所は粘を解き縛を去るのであるが其の粘と喰つ附きまはり縛と手足の自由のきかんといふものは、迹に滯り聲に隨ふからである、迹といふは都べて形式にあらはれてゐること、聲といふは文字や言葉にあらはれて居ること、誰が何うしたとか彼れが斯う言ふたとか經論の説であるとか研究の結果であるとか、都て其のやうな他人の跡尻を逐ふやうなことを悉く除き去らねばならぬのであるから、直に須からく迹を削り聲を吞むべしと云ふのである、サテ此に至りさへすれば人々要津を坐斷し箇々壁立千仞ならんと云ふ、要津とは言ふまでもなく都べて海や河を渡るに就て肝要なる渡し場または湊のことであるのを、佛法修行の上にも其れく肝要なる渡し場の如き處のあるに譬へ、今は大悟徹底即ち彼岸へ到りおふせた人であるから、其の渡し場にも用が無くなつた姿を坐斷すと